

地方都市における育児支援ニーズの特徴と その対応の具体的展開に関する研究

(課題番号 12610166)

平成12年度～平成15年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2))

研究成果報告書

平成16年3月

研究代表者 **竹村 祥子**

(岩手大学 人文社会科学部 助教授)

目次

第一章 研究の目的と経緯	竹村祥子	1
研究組織／研究経費		1
第1節 研究の目的		2
第2節 本報告書の位置づけ		3
第二章 地方都市における育児	竹村祥子	5
第1節 地方都市をどう捉えたか		5
第2節 「育児」の時期		6
第3節 「育児」の担い手と方向の前提		7
第4節 自治体の「育児支援」施策の課題		8
第三章 地方都市における6歳未満の子どもがいる世帯の状況	竹村祥子	11
－統計資料からみえる動向－		
第1節 県庁所在市の特徴		11
第2節 東北地方所在市の特徴		27
第3節 地方都市の子どもの状況		41
第四章 県庁所在市にみる育児支援施策	竹村祥子	43
－県庁(府庁)所在市対象の「育児支援に関する調査」結果から－		
第1節 調査概要		43
第2節 調査の結果		46
1. 調査内容ごとの結果・子育て支援事業の中心となる部課係		
2. 子育て支援事業と関わりのある部署や機関		
3. 国との連携／県との連携		
4. 市独自の企画		
5. 実績の上がっている事業		
6. 子育て支援事業は市の重点施策か否か		
7. 市民グループとの連携		
8. 事業の周知方法		
9. エンゼルプラン／新エンゼルプラン／健やか親子21／ 男女共同参画基本法との関わりや影響		
10. 市民のニーズの収集方法		
11. 事業効果の把握方法と評価		
12. 新しい事業の起こし方		
13. 担当者の意識		
第3節 県庁所在市調査についての考察		52
第五章 盛岡市と矢巾町における育児教室	大澤扶佐子	55
第1節 調査の概要		55
第2節 育児教室の取り組み　－母子保健担当者からの聞き取り調査－		61
第3節 育児教室の参加者に対する質問紙調査と参与観察から得られた結果		74
第4節 調査のまとめ		119
第六章 地方都市における育児支援の諸相と可能性	竹村祥子	123
－まとめにかえて－		
資料		127

第一章 研究の目的と経緯

研究組織

研究代表者：竹 村 祥 子 （岩手大学 人文社会科学部 助教授）

研究協力者：大 澤 扶佐子 （現職 岩手看護短期大学専攻科 講師）

研究経費（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 12 年度	1400	0	1400
平成 13 年度	800	0	800
平成 14 年度	700	0	700
平成 15 年度	600	0	600
総 計	3500	0	3500

第1節 研究の目的

今日、少子・高齢化対策として、出産・育児支援政策は多くの自治体にとって「推進すべき課題」となっている。しかし事業の具体的実施経過をみると多様な問題や課題が存在する。例えば、地方都市における課題は、当該地域にとっては「独自」の施策事例と位置づけられていても、他の地域をみれば、すでに類似する事業が展開されていて、事業で達成できる効果もかなりはつきりしているにもかかわらず、先の自治体では「独自」の事業と位置づけたために、克服される必要のある課題についても、先の事例の轍を踏む結果となるようなものである。また実施してみると利用者の伸びないサービスになってしまったり、好評で、市民からは継続が望まれている事業でも財政を圧迫するという理由から事業が継続しにくくなるような例もある。前者は自治体間で情報交換や連絡調整ができにくい状況に起因するようにも見えるが、担当者が変わるごとに「新しい事業」をおこして行かなくてはならないような、めまぐるしい、事業助成主体の変化も一因になっているのではないだろうか。

一方、研究の蓄積という点からみると小学校就学前の育児についての研究は、家庭内、保育園、幼稚園、託児施設（短時間託児施設やベビーホテル等）、育児サークルなど、個々の機関の取り組みについては先進的な取り組みの報告も含めて山積している。にもかかわらず、集団間や機関との関連やどのような組み合わせで利用されているのか、どう調整しているか、地域特性を活かしたニーズへの対応はどのように行われているか、というような育児環境全体との関わりから育児資源の活用をみていく実証的研究は乏しい。

そこで本研究は、大都市圏とは違った育児環境がある地方都市において、地方都市独自の育児施策の具体的展開がどのように進んでいるのか、住民のニーズがどのような方法で吸い上げられているのか、住民がどのように社会的資源を発見し、活用しているのか手がかりとして、「地域社会計画」の視点から出産・育児施策について実証的研究を進めてきた。

第2節 本報告書の位置づけ

この報告書は、平成12年度から15年度 科学研究費（基盤研究（C）（2））助成を受けて実施した、以下2件の調査の分析結果を中心にまとめたものである。

①県庁所在市の育児支援施策を知るための「育児支援に関する調査」

- ・大都市圏に入らない県庁（府庁）所在地自治体を対象として、地域の特色、育児助成（推進）にかかわる施策／保育園・幼稚園・育児サークル等に対する支援政策について、どのような方法で住民のニーズを吸い上げているか、事業実施状況についての、機関あて郵送法調査

②育児教室参加者の育児ニーズを知るために盛岡市・矢巾町の育児教室で行った「母親の育児支援に関する意識調査」

- ・岩手県県庁所在地盛岡市と隣接町矢巾町において、出産・育児支援政策がどのように展開しているかをしるための「育児教室」参加者に対する質問紙調査
- ・就学前保育の実態と選択されている保育資源との関わりをあきらかにするために、「育児教室」を運営する保健師からの面接聞き取り調査

第二章 地方都市における育児

第1節 地方都市をどう捉えたか

本研究では、調査対象を特定するため「地方都市」を以下のように捉えることとした。

首都圏や大阪圏から比較的独立的な県（道・府）庁所在地自治体（県庁所在地）であり、都市の人口規模が100万人近くの都市をのぞいたものを、地方都市と操作的に定義した。自治体を単位に考えたのは、政策や施策、事業としてどのように展開されているかを具体的に捉えるためである。

また「地方都市」と言う地域の単位に注目するのは、当該都市に内在するその都市「固有」の社会的基盤や歴史性が、「子育て」のやり方や支援方法にも影響を与えると考えたからである。

ただし県庁所在地対象の調査は、東京都を除いた全道府県の県（道・府）庁所在地自治体に配票した。これは、都市「固有」の社会的基盤が類似する都市では、規模の違いによらず、事業の立案や実施効果に類似性がみられるかもしれないとも考えたからである。

第2節 「育児」の時期

就学前の子どもの育児の問題は、個々人の人生にとっては、「季節の問題」として位置づけられる。結婚生活を選んだ女性にとって、子どもは、生涯2人を年齢差も小さく産んで育てることが主流となっっている今日、育児はある期間、集中的に担う「しごと」と位置づけられる。一個人にとって子育てが、うまくいっても、社会にとっては、「子育て」問題や「社会」問題または「社会」が対処すべき課題が「社会問題」として恒常的に存在している。さらに個々の家族や女性にとっては、自分の子どもを育ててしまえば、「育児問題」は自分の人生において乗り越えられた課題となって、今すぐ解決しなくてはならない生活の課題ではなくなっていくものである。

子ども自身にとっての「子育て」問題は、大人とある程度相互の意思の疎通ができ、不都合に思うことを言語をとおして訴えられるようになるころになってはじめて、子ども自身の問題になるのであるから、それ以前の生まれてからの数年は、親にとっての「育児」の季節問題ではあっても、子ども自身の問題にはなり得ないのである。

以上の点を考え合わせると、親にとってはの「育児」は「季節問題」であり、子どもにとって「子育て」問題は、自分自身の主体的問題とは捉えられないのである。

第3節 「育児」の担い手と方向の前提

また子どもの育児や保育には、「発達」という視点がついて回る。福祉・教育分野にとどまらず、「発達する客体」というまなざしで子どもをみることは、一方向性への動きが前提されているように見える。単純なものからより複雑なものへ、又は、曖昧なものからより明確に分化したものへ動く方向を示唆している。

研究上であれば、この方向性は「仮説」であったり「操作概念」であったりして自覚的だが、日常の生活で子どもをみるまなざしには、子どもは「発達する＝よい方向にかわっていく」ことがあたりまえであり、その担い手も母（家族）であるという前提が「自動的」に想定されている。

特に就学前の子どもを世話するものは、家族の母親であるとみなされている。

実態においても、育児は母親によって粛々と担われているし、研究状況としても育児研究は、母子研究と言えるような状態である。

また子どもが重大な事件を起こすと、責任は母親に求められ、責任の重さも母親にかかる。

これらの背後仮説については、近年の家族研究において、指摘されていることであるが、本研究においてもこの点が可視化されたと考えている。

第4節 自治体の「育児支援」施策の課題

1. 「支援」の対象は誰なのか

政策をみても、男女共同参画社会構築の支援対策や少子化対策をみても、支援政策そのものが「就労女性は子どもをみることができなくて、保育に欠ける状況にあるのだ」という前提上で「支援」が計画されている。保育に欠けない状況がスタンダードに存在し、その標準以下の者を引き上げるという視点から脱し切れていない。

「育児支援」が字義通りとらえられるとすれば、育児をしている者すべてへの支援ということになり、その主流派である「専業主婦」への施策が多くなってきてもおかしくはないのだが、現状の「育児支援施策」は、「就労している女性」への労働環境改善施策であって、「育児の担い手支援」とはなっていないことは明白である。

それでは現状の法律に助成されているスタンダードな「家庭保育」はどのような育児環境のもとで行われているのだろうか。昨今の問題については、育児機能の低下や不全問題として研究も進んでいるが、はたして「健全」育成の行える環境が「スタンダード」にあるものだろうか。

また地方都市と首都圏や大阪圏といった巨大都市では育児環境に共有できる問題はどの程度あるのだろうか、例えば、保育所の不足や待機児問題は、地方都市の問題としては共感しにくいテーマである。

地方都市には地方都市の問題があって、大都市とは違うという体験が、全国一律の「少子化問題」対策事業の助成金獲得競争の中で「緊急性のない事業」とは位置づけられはしまいかという心配をよぶ。

地域間格差という点からも地域の特性を活かした（育児）政策という点からみても上記の点の検討は早急に必要であろう。

2. 盛岡市の育児支援事業に関係する国・県の制度

表2-4-1は、子育て支援に関わる国、岩手県の制度や事業の一覧である。少子化を背景として、「エンゼルプラン」、「新エンゼルプラン」は、立て続けに施行された法律であり、「少子化」阻止政策を目的に掲げていたが、その効果は薄いかもしれない。しかしながら盛岡市にとどまらず、他の県庁所在市に

とつても、第四章でふれるように「エンゼルプラン」、「新エンゼルプラン」は、育児支援事業の事業数、事業内容、事業予算の拡大推進に寄与してきたことは明らかである。それと同時に、類似した事業の部課係間の調整や連絡業務を煩雑にさせている。

本報告書ではこの点は扱えなかったが、どのようなコンフリクトがあるのかという検討が、具体的な市町村の事例検討を通して行われる必要があるだろう。

表 2-4-1 子育て支援に関わる法律・制度・事業（乳幼児期）

「新エンゼルプラン」		児童福祉法		児童の権利に関する条約		児童虐待防止法		男女共同参画社会基本法	
国		母子保健法 ・「健やか親子21」 ・「健康日本21」		保育所保育指針 ・幼稚園教育要領	NPO法		労働基準法 ・男女雇用機会均等法 ・育児・介護休業法		
「いわて子育てプラン」									
「いわて男女共同参画プラン」									
親戚・近隣・友人	保健医療分野 〔医療〕	福祉分野	保育分野	ボランティア	公民館	労働分野	その他行政支援		
子	乳児健診 ・夜間診療所 ・小児救急当番病院 妊産婦健診 パパママ学級	〔児相〕 ・電話相談 〔児相〕 《経済面》 ・出産育児一時金 （社保又は国保） ・児童手当 ・（特別）児童扶養手当 （児童福祉課） ・その他	・保育 ・幼稚園教育 [子育て支援センター—事業] 電話相談 他 [保育園] 特別保育事業（乳児・延長・一時・休日保育等） [幼稚園] 預かり保育 [認可外保育サービス]	・ベビーママ ・ファミリーサポート—事業 ・保育ママ	・育児教室 ・子育てサークル支援	・育児時間 ・育児休業 ・子どもの看護休暇（努力義務） ・職場保育所	・「すこやか子どもランド（仮称）」 ・乳幼児医療費助成 ・保育料の引き下げ		
親	・母親学級 ・医師会健康教育・HP * 「もりおか子育てぶっく」 ・母親学級 ・電話相談 ・育児教室 ・育児相談会								
親と子	・家庭訪問 ・子育てサークル支援 児童虐待防止対応		・保育施設開放 ・子育てサークル支援	・NPO	・子育てサークル支援				
地域	・保健推進委員活動	・民生児童委員活動	・世代間交流 ・異年齢交流						

は事業協力されているもの

*は盛岡市独自のもの

大澤扶佐子 作成

第三章 地方都市における6歳未満の 子どものいる家族の状況 —統計資料からみえる動向—

本章では、大都市圏とは違った育児環境がある地方都市がどのような子育て環境にあるのかを知るために県庁(府庁)所在都市及び東北地方の「市」の出生率や世帯類型等の特徴を確認する。

以下は『平成12年国勢調査』、『平成7年国勢調査』および『平成5年～平成9年 人口動態保健所・市区町村別統計 人口動態統計特殊報告』、『昭和63年～平成4年 人口動態保健所・市区町村別統計 人口動態統計特殊報告 下巻』のデータを元に分析を進めたものである。

第1節 県庁所在市の特徴

1. 盛岡市の特徴

岩手県の県庁所在地盛岡市は、本報告書第五章の調査「母親の育児支援に関する意識調査」を行った対象地区であるが、子育てにかかわる地域の特性について、岩手県の他地域との比較から確認しておきたい。

盛岡市の人口は、平成12年288,843人で、昭和60年からの人口の増減率は、2.1(H2/S60)、2.9(H7/H2)、0.8(H12/H7)と減少はしないが増加も大きくはない安定した人口構成の都市である。年齢構造は、年少人口指数が昭和60年から平成2年、7年、12年まで31.5、27.6、24.8、22.1と緩やかに減少している。

をもとに世帯の構成をみると、1世帯あたり親族人員は盛岡市で2.44人、岩手県2.92人、全国は2.66人であるから、盛岡市はやや少ない。

出生に関わる特徴は、表3-1-1・表3-1-2からわかるように近年は、全国の変化傾向と同様に低下傾向にある。出生数6歳未満の子ども6歳未満の子どもについても平成2年2647人+556人(合併前都南村)=3203人、7年2964人、12年2802人のように徐々に落ちてきている。

表3-1-1 出生率・乳児死亡率・離婚率〔県庁所在市〕(1988年)

市名	出生率	合計特殊出生率	乳児死亡率	離婚率
札幌市	10.5	1.32	4.1	2.07
青森市	10.2	1.47	5.1	1.75
盛岡市	11.6	1.53	3.3	1.21
仙台市	11.3	1.48	3.8	1.27
秋田市	10.1	1.45	5.2	1.36
山形市	10.5	1.62	4.1	0.93
福島市	10.7	1.66	4.9	1.11
水戸市	11.7	1.62	3.8	1.35
宇都宮市	11.3	1.64	5.2	1.62
前橋市	11.2	1.64	3.7	1.47
浦和市	11.0	1.51	4.4	1.30
千葉市	9.7	1.42	3.4	1.47
東京都	8.9	1.22	4.2	1.55
横浜市	10.3	1.44	4.1	1.45
新潟市	10.1	1.49	4.2	1.15
富山市	9.7	1.56	5.8	1.30
金沢市	10.5	1.50	4.5	1.27
福井市	10.8	1.65	4.8	1.30
甲府市	9.8	1.54	4.2	1.47
長野市	10.8	1.57	4.9	1.02
岐阜市	9.8	1.42	4.6	1.33
静岡市	9.9	1.46	4.5	1.32
名古屋市	10.7	1.48	4.4	1.46
津市	10.7	1.56	4.9	1.27
大津市	11.0	1.59	3.6	1.15
京都市	9.3	1.35	4.7	1.38
大阪市	9.8	1.35	4.9	1.97
神戸市	9.4	1.37	4.0	1.53
奈良市	10.1	1.46	4.2	1.24
和歌山市	10.1	1.51	4.6	1.79
鳥取市	11.4	1.78	5.4	1.27
松江市	11.0	1.66	5.7	1.20
岡山市	11.2	1.60	4.5	1.50
広島市	11.1	1.55	4.4	1.43
山口市	10.0	1.58	5.3	1.09
徳島市	10.8	1.53	4.8	1.46
高松市	10.8	1.61	4.3	1.52
松山市	11.3	1.52	5.2	1.82
高知市	10.3	1.50	6.1	2.15
福岡市	11.3	1.44	4.1	1.82
佐賀市	11.3	1.62	3.5	1.32
長崎市	10.5	1.46	4.8	1.48
熊本市	11.3	1.53	4.5	1.58
大分市	11.2	1.56	4.8	1.55
宮崎市	11.5	1.59	4.6	1.74
鹿児島市	11.4	1.51	4.7	1.62
那覇市	14.1	1.84	5.6	2.17

表3-1-2 出生率・乳児死亡率・離婚率〔県庁所在市〕(1993年)

市名	出生率	合計特殊出生率	乳児死亡率	離婚率
札幌市	9.4	1.18	3.4	2.35
青森市	9.5	1.40	4.6	1.89
盛岡市	10.4	1.41	3.1	1.38
仙台市	10.3	1.33	2.9	1.52
秋田市	9.3	1.39	3.9	1.54
山形市	9.8	1.53	3.1	1.05
福島市	10.1	1.55	4.0	1.37
水戸市	10.9	1.51	3.9	1.69
宇都宮市	10.8	1.54	4.4	1.86
前橋市	10.5	1.53	3.6	1.62
浦和市	11.6	1.45	3.4	1.66
千葉市	9.7	1.31	3.4	1.79
東京都	8.5	1.13	4.2	1.91
横浜市	10.1	1.33	3.5	1.84
新潟市	9.5	1.37	4.0	1.36
富山市	9.8	1.50	4.2	1.37
金沢市	10.3	1.42	4.2	1.35
福井市	10.4	1.58	4.0	1.42
甲府市	9.6	1.50	3.8	1.77
長野市	10.4	1.54	2.9	1.24
岐阜市	9.8	1.37	3.9	1.56
静岡市	9.6	1.39	3.4	1.59
名古屋市	10.2	1.37	3.5	1.80
津市	10.3	1.48	4.3	1.50
大津市	10.4	1.47	4.5	1.45
京都市	9.1	1.26	4.4	1.26
大阪市	9.9	1.30	3.8	2.43
神戸市	9.4	1.33	3.6	1.85
奈良市	9.7	1.34	3.9	1.56
和歌山市	9.7	1.40	4.2	2.08
鳥取市	10.4	1.64	3.2	1.57
松江市	10.7	1.62	4.6	1.41
岡山市	11.1	1.54	3.6	1.78
広島市	10.8	1.43	3.5	1.72
山口市	9.5	1.50	4.4	1.36
徳島市	9.8	1.40	4.7	1.69
高松市	10.4	1.52	3.2	1.74
松山市	10.5	1.41	4.4	2.13
高知市	10.2	1.46	5.3	2.43
福岡市	10.4	1.31	4.1	2.07
佐賀市	11.0	1.60	4.5	1.57
長崎市	9.4	1.39	3.5	1.73
熊本市	10.8	1.48	3.4	1.91
大分市	10.8	1.52	2.9	1.87
宮崎市	11.0	1.53	5.2	2.00
鹿児島市	10.4	1.43	3.1	1.78
那覇市	12.4	1.66	5.4	2.35

世帯構成をみると表3-1-3・表3-1-5のように1995年と2000年の比較で親族世帯は66.2%から64.4%へと減少し、単独世帯がその分33.4%から35.2%と比率を上げている。夫婦とその子どもからなるいわゆる「核家族世帯」は、46.1%から44.0%へと減少している。また夫婦のみ世帯の伸びは大きい。

6歳未満の子どものいる世帯についてみると6歳未満の子どものおおよそ8割はいわゆる「核家族世帯」の中で暮らしている。表3-1-4・表3-1-6のように1995年と2000年を比較すれば、「核家族」の中にいる子どもの比率は微増している。一方その他の親族とともに暮らす6歳未満の子どもの割合は2割ほどである。

日本の場合、出生率の低下は晩婚化と未婚率の上昇におっているところが大きいことが指摘されている。盛岡市についても例にもれない。男性の未婚率は表3-1-12でみられるように2000年では50歳から54歳層にならないと1割を切ることがなくなった。1995年段階よりさらに晩婚化が進んだと言えそう。

女性の未婚率からも晩婚化の傾向が読み取れるが、未婚率が1割を切るのは45歳から49歳層と男性よりは5歳層ぶん若い。

2. 出生に関わる特徴

出生に関わる特徴は、表3-1-1・表3-1-2からわかるように近年は、低下傾向にある。出生率について1988年と1993年データを比較してみても、増加しているのは、水戸市、浦和市（合併前）、大阪市だけで、3市とも大都市圏のベッドタウンを含む都市である。

合計特殊出生率では、1993年の方が大きくなっている都市はなかった。那覇市で0.18ポイント、仙台市で0.15ポイント、札幌市で0.14ポイントと減少が著しい市は、地方の中核の大都市が目立っている。佐賀市や長野市を筆頭に西南の都市の方が減少が穏やかであった。

3. 世帯構成の特徴

世帯構成をみると表3-1-3・表3-1-5のように1995年から2000年の間で親族世帯は全体的に減少している。特に、神戸市4.4ポイント、大阪市3.6ポイントと減少が著しい。他の3ポイント以上の減少が確認できる市も西南の都市に多くなっている。金沢市、青森市は変化がほとんどなかった。

表3-1-3 世帯の家族類型(県庁所在市)(1995年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世代
札幌市	66.2	89.3	28.2	49.5	11.6	10.7	33.4	0.4	
青森市	74.6	79.9	23.3	44.6	12.0	20.1	25.1	0.3	
盛岡市	66.2	81.0	23.7	46.1	11.2	19.0	33.4	0.3	
仙台市	61.9	83.6	23.2	50.3	10.2	16.4	37.7	0.4	
秋田市	72.0	80.3	25.6	44.6	10.1	19.7	27.7	0.3	
山形市	73.6	68.2	21.3	39.1	7.9	31.8	26.3	0.1	
福島市	74.9	76.2	23.1	43.5	9.6	23.8	24.8	0.2	
水戸市	71.6	83.4	24.8	48.8	9.8	16.6	28.1	0.3	
宇都宮市	71.9	80.5	22.2	48.6	9.7	19.5	27.7	0.5	
前橋市	75.6	80.7	23.7	47.4	9.6	19.3	24.0	0.3	
浦和市	73.5	88.4	23.1	56.2	9.1	11.6	26.1	0.4	
千葉市	73.0	88.8	22.4	56.8	9.6	11.2	26.6	0.3	
東京都									
横浜市	71.5	88.8	24.6	54.9	9.3	11.2	28.1	0.4	
新潟市	68.9	78.5	23.3	45.1	10.1	21.5	30.9	0.2	
富山市	75.2	73.0	23.1	41.0	8.9	27.0	24.7	0.2	
金沢市	65.8	77.4	22.9	45.3	9.2	22.6	33.9	0.2	
福井市	75.0	67.8	20.3	39.0	8.4	32.2	24.8	0.2	
甲府市	68.0	82.7	26.9	45.0	10.8	17.3	31.7	0.3	
長野市	75.1	76.7	23.8	44.5	8.4	23.3	24.7	0.2	
岐阜市	74.4	75.6	22.7	43.3	9.6	24.4	25.3	0.4	
静岡市	74.0	77.7	22.1	45.7	10.0	22.3	25.7	0.3	
名古屋市	67.1	84.6	25.4	49.1	10.1	15.4	32.5	0.4	
津市	71.1	80.3	26.3	45.6	8.4	19.7	28.7	0.2	
大津市	78.8	82.6	21.7	52.5	8.3	17.4	21.0	0.2	
京都市	64.2	84.5	24.3	48.8	11.3	15.5	35.5	0.3	
大阪市	63.3	88.0	27.2	47.5	13.3	12.0	36.2	0.5	
神戸市	72.8	88.2	25.7	51.3	11.2	11.8	26.9	0.3	
奈良市	78.5	84.3	23.2	52.2	8.9	15.7	21.3	0.2	
和歌山市	77.7	82.7	25.6	46.8	10.2	17.3	22.1	0.2	
鳥取市	73.9	72.6	20.4	41.9	10.4	27.4	26.0	0.1	
松江市	69.6	77.8	25.3	42.5	10.0	22.2	30.2	0.2	
岡山市	68.5	81.2	25.6	46.1	9.5	18.8	31.2	0.2	
広島市	67.7	88.0	26.3	52.2	9.5	12.0	32.0	0.3	
山口市	65.6	80.0	27.5	43.6	9.0	20.0	34.1	0.2	
徳島市	69.5	79.0	24.6	43.9	10.5	21.0	30.2	0.3	
高松市	72.1	82.2	27.0	45.2	10.1	17.8	27.7	0.2	
松山市	68.3	86.0	26.0	48.4	11.6	14.0	31.4	0.3	
高知市	66.8	86.7	27.2	46.0	13.5	13.3	32.9	0.3	
福岡市	59.0	87.5	23.8	50.9	12.8	12.5	40.5	0.4	
佐賀市	69.3	80.0	23.3	45.3	11.3	20.0	30.4	0.3	
長崎市	71.5	86.0	25.9	48.0	12.1	14.0	28.2	0.2	
熊本市	67.7	83.6	24.0	48.2	11.4	16.4	32.0	0.3	
大分市	71.0	84.7	24.7	50.3	9.6	15.3	28.7	0.3	
宮崎市	69.2	88.9	27.5	49.8	11.6	11.1	30.5	0.4	
鹿児島市	67.8	90.8	26.6	51.9	12.2	9.2	31.9	0.4	
那覇市	73.1	85.7	15.9	52.0	17.9	14.3	26.5	0.4	

表3-1-4 6歳未満の子どものいる世帯の家族類型〔県庁所在市〕(1995年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世代
札幌市	100.0	91.8		87.3	4.5	8.2			
青森市									
盛岡市	100.0	78.7		74.9	3.8	21.3			
仙台市	100.0	82.3		79.3	3.0	17.7			
秋田市	100.0	77.6		74.3	3.3	22.4			
山形市	100.0	58.6		56.9	1.7	41.4			
福島市	100.0	70.4		67.2	3.3	29.6			
水戸市	100.0	82.1		78.9	3.2	17.9			
宇都宮市	100.0	75.7		72.4	3.3	24.3			
前橋市	100.0	78.8		75.8	2.9	21.2			
浦和市	100.0	89.6		87.7	1.9	10.4			
千葉市	100.0	88.1		85.5	2.6	11.9			
東京都									
横浜市	100.0	89.5		87.3	2.2	10.5			
新潟市	100.0	71.8		68.8	3.0	28.2			
富山市	100.0	66.4		64.0	2.5	33.6			
金沢市	100.0	76.1		73.4	2.7	23.9			
福井市	100.0	57.4		54.8	2.6	42.6			
甲府市	100.0	81.1		77.9	3.2	18.9			
長野市	100.0	72.6		70.5	2.1	27.4			
岐阜市	100.0	68.1		65.0	3.1	31.9			
静岡市	100.0	71.7		69.1	2.6	28.3			
名古屋市	100.0	84.1		81.2	2.9	15.9			
津市	100.0	79.7		76.5	3.1	20.3			
大津市	100.0	80.1		77.6	2.5	19.9			
京都市	100.0	84.6		81.0	3.5	15.4			
大阪市	100.0	88.6		84.0	4.6	11.4			
神戸市	100.0	88.9		85.4	3.5	11.1			
奈良市	100.0	84.1		81.6	2.6	15.9			
和歌山市	100.0	81.0		77.8	3.2	19.0			
鳥取市	100.0	64.5		61.1	3.3	35.5			
松江市	100.0	74.9		71.3	3.6	25.1			
岡山市	100.0	80.8		77.5	3.3	19.2			
広島市	100.0	90.4		87.4	3.0	9.6			
山口市	100.0	81.1		78.3	2.8	18.9			
徳島市	100.0	77.3		73.5	3.7	22.7			
高松市	100.0	83.0		79.4	3.6	17.0			
松山市	100.0	87.1		83.0	4.1	12.9			
高知市	100.0	87.0		81.7	5.4	13.0			
福岡市	100.0	89.2		85.1	4.0	10.8			
佐賀市	100.0	76.5		72.6	3.9	23.5			
長崎市	100.0	84.7		81.2	3.6	15.3			
熊本市	100.0	83.4		79.6	3.8	16.6			
大分市	100.0	86.4		82.9	3.4	13.6			
宮崎市	100.0	90.9		86.6	4.3	9.1			
鹿児島市	100.0	93.3		88.8	4.4	6.7			
那覇市	100.0	87.2		79.9	7.3	12.8			

表3-1-5 世帯の家族類型(県庁所在市)(2000年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世帯
札幌市	65.4	90.5	30.9	46.6	12.9	9.5	34.1	0.5	3.6
青森市	71.6	81.4	25.7	42.6	13.2	18.6	28.1	0.3	9.6
盛岡市	64.3	82.2	26.2	44.0	12.1	17.8	35.2	0.5	8.2
仙台市	60.5	85.0	26.3	47.5	11.2	15.0	39.0	0.5	6.5
秋田市	69.8	82.1	28.4	42.8	11.0	17.9	29.9	0.3	9.2
山形市	71.3	70.4	23.8	37.9	8.6	29.6	28.4	0.3	17.0
福島市	73.1	78.0	25.8	41.7	10.5	22.0	26.5	0.3	12.4
水戸市	69.4	84.6	27.4	46.1	11.0	15.4	30.1	0.5	7.9
宇都宮市	69.9	81.7	24.9	46.3	10.5	18.3	29.5	0.6	9.8
前橋市	72.9	82.3	26.8	45.1	10.4	17.7	26.6	0.5	49.6
浦和市	72.1	89.9	25.8	54.2	9.9	10.1	27.3	0.6	5.0
千葉市	70.9	90.2	26.8	52.8	10.6	9.8	28.6	0.5	4.8
東京都	58.5	89.2	28.9	47.7	12.6	10.8	40.9	0.7	3.6
横浜市	70.0	90.1	27.8	52.0	10.3	9.9	29.5	0.5	4.6
新潟市	67.0	80.1	26.1	43.1	10.9	19.9	32.8	0.2	10.1
富山市	72.6	76.0	26.3	39.8	9.9	24.0	27.1	0.3	13.5
金沢市	65.7	80.3	25.8	44.4	10.1	19.7	33.9	0.3	9.7
福井市	74.1	69.8	22.8	37.9	9.2	30.2	25.6	0.3	18.1
甲府市	66.5	84.4	29.4	43.2	11.8	15.6	33.1	0.4	7.4
長野市	73.8	78.7	26.4	43.0	9.3	21.3	25.7	0.4	12.0
岐阜市	72.6	77.7	25.7	41.7	10.3	22.3	26.9	0.5	12.6
静岡市	73.0	79.2	25.0	43.3	11.0	20.8	26.5	0.4	11.5
名古屋市	65.4	86.4	28.5	46.7	11.3	13.6	34.0	0.5	6.2
津市	70.5	83.0	28.9	44.6	9.6	17.0	29.1	0.4	8.6
大津市	77.2	84.5	24.8	50.4	9.3	15.5	22.5	0.3	9.3
京都市	62.0	86.2	27.2	46.5	12.5	13.8	37.5	0.5	5.6
大阪市	59.7	89.0	29.8	44.7	14.6	11.0	39.6	0.7	3.7
神戸市	68.4	90.1	29.3	48.6	12.2	9.9	31.2	0.4	4.3
奈良市	76.5	86.4	27.0	49.4	10.0	13.6	23.3	0.3	7.6
和歌山市	75.8	84.3	28.5	44.5	11.3	15.7	23.8	0.4	8.5
鳥取市	70.5	75.3	22.4	41.5	11.5	24.7	29.3	0.2	13.7
松江市	66.8	80.3	27.6	41.4	11.2	19.7	32.9	0.3	9.8
岡山市	67.6	83.3	27.7	44.9	10.6	16.7	32.0	0.4	8.2
広島市	66.6	89.4	29.4	49.4	10.6	10.6	33.1	0.3	4.5
山口市	64.4	82.6	29.6	43.1	9.9	17.4	35.3	0.3	7.8
徳島市	66.7	81.3	27.1	42.6	11.5	18.7	33.0	0.4	9.1
高松市	69.8	84.7	30.0	43.7	11.1	15.3	29.9	0.3	7.5
松山市	66.5	87.5	28.4	46.2	13.0	12.5	33.1	0.4	5.3
高知市	63.9	88.4	29.3	44.3	14.7	11.6	35.6	0.5	4.5
福岡市	56.3	88.6	26.3	48.2	14.1	11.4	43.1	0.6	3.8
佐賀市	67.9	81.5	25.5	43.6	12.4	18.5	31.7	0.4	9.4
長崎市	69.8	87.0	28.2	45.6	13.2	13.0	29.8	0.3	6.1
熊本市	66.3	85.1	25.7	46.6	12.8	14.9	33.2	0.5	6.6
大分市	70.3	86.2	27.6	47.9	10.8	13.8	29.2	0.5	6.8
宮崎市	67.6	89.7	29.7	47.2	12.8	10.3	31.8	0.6	4.3
鹿児島市	65.1	91.7	28.9	49.3	13.5	8.3	34.5	0.4	2.8
那覇市	70.1	87.0	17.8	49.8	19.3	13.0	29.3	0.6	5.4

表3-1-6 6歳未満の子どもがいる世帯の家族類型〔県庁所在市〕(2000年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世帯
札幌市	100.0	92.7		86.4	6.3	7.3			6.8
青森市	100.0	77.4		72.4	4.9	22.6			21.9
盛岡市	100.0	80.5		76.0	4.5	19.5			19.1
仙台市	100.0	85.2		81.5	3.7	14.8			14.4
秋田市	100.0	80.8		76.5	4.4	19.2			18.8
山形市	100.0	65.4		62.7	2.8	34.6			34.3
福島市	100.0	75.2		71.0	4.3	24.8			24.4
水戸市	100.0	84.6		80.4	4.2	15.4			15.0
宇都宮市	100.0	79.8		75.7	4.2	20.2			19.8
前橋市	100.0	81.9		77.8	4.1	18.1			17.7
浦和市	100.0	91.6		89.2	2.4	8.4			8.2
千葉市	100.0	90.7		87.1	3.6	9.3			8.9
東京都	100.0	91.3		87.0	4.2	8.7			8.3
横浜市	100.0	91.6		88.6	3.0	8.4			8.0
新潟市	100.0	76.2		72.3	3.9	23.8			23.5
富山市	100.0	72.3		68.9	3.5	27.7			27.3
金沢市	100.0	80.9		77.2	3.7	19.1			18.8
福井市	100.0	62.4		59.4	3.0	37.6			37.1
甲府市	100.0	84.7		80.3	4.3	15.3			14.9
長野市	100.0	77.4		74.5	2.9	22.6			22.3
岐阜市	100.0	73.9		69.9	4.0	26.1			25.6
静岡市	100.0	76.3		73.0	3.3	23.7			23.3
名古屋市	100.0	87.6		83.4	4.2	12.4			11.9
津市	100.0	84.6		80.6	4.0	15.4			14.9
大津市	100.0	84.1		80.7	3.4	15.9			15.6
京都市	100.0	87.3		82.6	4.7	12.7			12.3
大阪市	100.0	90.5		84.5	6.1	9.5	0.001		8.8
神戸市	100.0	91.2		86.4	4.8	8.8			8.3
奈良市	100.0	88.0		84.3	3.6	12.0			11.7
和歌山市	100.0	84.5		80.0	4.5	15.5			14.9
鳥取市	100.0	71.5		67.5	4.0	28.5			28.1
松江市	100.0	79.7		75.6	4.2	20.3	0.015		19.9
岡山市	100.0	84.5		80.1	4.3	15.5	0.003		15.2
広島市	100.0	92.1		88.0	4.1	7.9			7.6
山口市	100.0	85.5		81.1	4.4	14.5			14.3
徳島市	100.0	81.6		76.6	5.1	18.4			18.0
高松市	100.0	87.2		82.3	4.9	12.8			12.4
松山市	100.0	90.1		84.5	5.5	9.9			9.4
高知市	100.0	90.0		83.2	6.8	10.0			9.5
福岡市	100.0	90.8		85.4	5.4	9.2			8.7
佐賀市	100.0	79.4		75.1	4.3	20.6			20.0
長崎市	100.0	86.2		81.4	4.9	13.8			13.1
熊本市	100.0	85.6		80.6	5.0	14.4			13.8
大分市	100.0	88.3		83.6	4.7	11.7			11.3
宮崎市	100.0	90.9		84.6	6.3	9.1			8.7
鹿児島市	100.0	94.0		87.9	6.0	6.0			5.5
那覇市	100.0	87.7		79.3	8.5	12.3			11.3

単独世帯は、親族世帯の減少とは逆に比率が高くなってきている。神戸市、大阪市は親族世帯の比率の減少分ほとんどが、単独世帯の増加していた。

夫婦とその子どもからなるいわゆる「核家族世帯」は、2000年の方が全体としては比率を下げています。どの市も2000年では5割内外がこの世帯構成に属している。「核家族世帯」比率が高いのは、浦和市(合併前)54.2%、千葉市52.8%、大津市50.4%と大都市の近郊都市である。鹿児島市49.3%や那覇市40.8%と高くなっている。富山市39.8%、山形市37.9%、福井市37.9%は「核家族世帯」の比率がひくく、その他の親族世帯の比率が高くなっている。1995年から2000年の間で「核家族世帯」の比率の変化が大きかったのは、千葉市4ポイントであった。

また夫婦のみ世帯の伸びも全体的には大きくなっている。札幌市は30.9%で一番高く、那覇市は17.8%と例外的に低いですが、その他の親族世帯の比率の高いところでは相対的に夫婦のみ世帯の比率が低い。

4. 6歳未満の子どものいる世帯構成の特徴

6歳未満の子どものいる世帯についてみると6歳未満の子どもは、7割5分近くがいわゆる「核家族世帯」の中で暮らしている。表3-1-4・表3-1-6のように1995年と2000年を比較すれば、「核家族」の中にいる子どもの比率は微増している。一方その他の親族とともに暮らす6歳未満の子どもは、2割ほどである。大都市周辺ほど「核家族世帯」の中にいる子どもの比率は大きい。2000年で札幌市、浦和市(合併前)、広島市は、6歳未満の子どもの約9割が「核家族世帯」で暮らしている。ただし、宮崎市86.6%、鹿児島市88.8%で6歳未満の子どもの約9割が「核家族世帯」のなかで暮らしている。

福井市、山形市は「その他の親族世帯」の中で暮らす子ども割合3割以上とかなり高い。とはいえ1995年から2000年までの「核家族世帯」の増加率をみると鳥取市6.4ポイント、山形市5.8ポイントと増加傾向にあることは楽しと同様であった。

5. 婚姻率・未婚率の特徴

婚姻率は、表3-1-7・表3-1-8からわかるように1988年から1993年の間で上昇している。大阪市、横浜市、宇都宮市で7%以上となっていた。

女性の未婚率からも晩婚化の傾向が読み取れそうだが、表3-1-9・表3-1-11でみられるように、未婚率が1割を切るのが早いのは、福井市で35

歳から 39 歳層で 9.7 % となっている。他方東京都、大阪市、長崎市は 45 歳から 49 歳層でも 1 割が未婚である。

男性の未婚率は表 3-1-10・表 3-1-12 でみられるように 2000 年には 50 歳から 54 歳層でも 1 割以上が未婚の都市がでてきている。東京都、大阪市、那覇市は、50 歳から 54 歳層でも 1 割以上が未婚であった。1995 年段階よりさらに晩婚化が進んでいる。

表3-1-7 婚姻率〔県庁所在市〕(1988年)

市名	婚姻率
札幌市	7.4
青森市	5.7
盛岡市	6.1
仙台市	6.5
秋田市	5.7
山形市	5.5
福島市	5.4
水戸市	6.5
宇都宮市	7.1
前橋市	6.5
浦和市	7.7
千葉市	6.0
東京都	6.9
横浜市	7.2
新潟市	5.6
富山市	5.8
金沢市	6.0
福井市	5.9
甲府市	6.2
長野市	5.6
岐阜市	6.0
静岡市	5.9
名古屋市	6.8
津市	5.9
大津市	5.9
京都市	6.0
大阪市	7.3
神戸市	5.8
奈良市	5.9
和歌山市	6.2
鳥取市	5.5
松江市	5.6
岡山市	6.2
広島市	6.5
山口市	5.1
徳島市	5.8
高松市	6.1
松山市	6.5
高知市	6.0
福岡市	6.9
佐賀市	5.7
長崎市	5.6
熊本市	6.1
大分市	5.9
宮崎市	6.2
鹿児島市	6.1
那覇市	6.6

表3-1-8 婚姻率〔県庁所在市〕(1993年)

市名	婚姻率
札幌市	7.4
青森市	6.2
盛岡市	6.3
仙台市	7.2
秋田市	6.0
山形市	5.7
福島市	6.0
水戸市	6.8
宇都宮市	7.5
前橋市	6.6
浦和市	8.5
千葉市	7.0
東京都	7.2
横浜市	7.8
新潟市	6.1
富山市	6.4
金沢市	6.7
福井市	6.2
甲府市	6.3
長野市	6.3
岐阜市	6.5
静岡市	6.4
名古屋市	7.1
津市	6.1
大津市	6.6
京都市	6.6
大阪市	8.1
神戸市	6.6
奈良市	6.4
和歌山市	6.6
鳥取市	6.0
松江市	5.9
岡山市	6.8
広島市	7.2
山口市	5.4
徳島市	5.9
高松市	6.8
松山市	6.8
高知市	6.5
福岡市	7.3
佐賀市	6.1
長崎市	5.7
熊本市	6.5
大分市	6.5
宮崎市	6.4
鹿児島市	6.2
那覇市	7.0

表3-1-9 女性未婚率(県庁所在市)(1995年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
札幌市									
青森市	98.9	86.0	48.4	21.7	12.4	8.1	6.8	5.4	4.9
盛岡市	98.9	86.6	51.3	24.0	12.4	9.6	7.9	6.4	5.7
仙台市									
秋田市	99.1	87.8	48.8	20.4	10.3	7.1	5.3	4.7	4.0
山形市	99.3	88.4	46.8	17.7	8.4	6.3	4.9	4.1	3.9
福島市	99.2	85.2	46.4	19.6	9.7	7.3	5.8	5.3	4.6
水戸市	99.1	86.2	46.3	17.9	9.3	6.6	5.2	4.7	4.1
宇都宮市	98.8	84.8	43.1	16.7	8.7	5.9	4.9	4.0	3.9
前橋市	99.0	85.1	46.4	20.2	9.8	6.5	6.5	5.4	4.6
浦和市	98.9	87.6	44.8	17.4	9.8	6.5	5.7	4.2	3.9
千葉市									
東京都									
横浜市									
新潟市	99.3	88.3	52.2	23.6	12.3	8.2	6.7	5.2	4.7
富山市	99.1	86.7	42.5	16.0	7.4	4.6	4.3	3.2	3.0
金沢市	99.1	88.9	47.8	17.8	9.2	5.8	5.2	5.0	4.4
福井市	99.1	86.2	42.5	13.3	6.4	4.2	3.8	3.0	3.0
甲府市	99.2	88.2	48.8	20.2	10.5	8.0	6.3	5.2	5.0
長野市	99.4	88.8	49.8	18.7	9.5	6.2	5.2	4.6	4.4
岐阜市	99.0	89.8	49.6	19.3	9.9	6.5	5.8	4.9	4.2
静岡市	99.3	89.4	52.0	22.7	11.3	7.4	5.9	4.6	4.1
名古屋市									
津市	98.7	86.4	41.0	14.6	7.7	5.4	4.8	4.6	3.9
大津市	99.2	88.2	45.7	15.3	7.2	5.0	4.4	3.6	3.7
京都市									
大阪市									
神戸市									
奈良市	98.9	90.0	50.0	18.6	8.9	5.8	5.3	4.4	3.9
和歌山市	98.1	84.6	45.5	17.5	9.3	6.1	5.1	4.4	4.4
鳥取市	98.9	83.2	42.7	16.2	7.7	5.4	4.6	4.1	3.8
松江市	99.1	85.2	45.3	19.7	9.5	6.4	5.9	4.8	5.2
岡山市	99.1	85.8	43.5	18.4	9.5	6.2	5.5	4.5	4.1
広島市									
山口市	99.2	89.0	45.2	17.0	8.3	5.8	5.8	5.8	4.5
徳島市	98.6	86.9	45.6	18.4	9.8	7.2	6.9	5.9	4.4
高松市	99.2	84.2	42.4	16.5	8.4	6.1	5.5	4.7	4.2
松山市	99.0	87.0	49.7	22.7	12.1	8.9	7.2	6.1	5.8
高知市	98.6	84.7	49.0	22.8	13.7	9.4	8.4	6.9	6.0
福岡市									
佐賀市	99.4	88.3	49.8	21.8	12.0	8.6	7.1	5.8	5.5
長崎市	99.5	89.8	54.5	26.5	15.3	11.5	9.5	7.5	5.8
熊本市	98.9	88.4	50.6	23.6	12.6	9.4	7.9	7.1	6.2
大分市	99.2	86.3	47.7	19.8	9.3	1.1	4.9	4.3	4.2
宮崎市	98.9	86.3	51.5	23.0	11.7	8.1	7.2	5.8	5.6
鹿児島市	99.2	90.5	56.1	25.0	13.0	8.5	7.8	6.8	6.4
那覇市	98.0	86.3	57.7	27.9	16.6	13.8	11.9	8.4	7.5

表3-1-10 男性未婚率(県庁所在市)(1995年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
札幌市									
青森市	99.1	91.6	62.2	33.8	20.8	15.0	8.9	5.2	3.0
盛岡市	99.1	91.3	63.8	36.3	21.8	14.7	9.8	6.1	3.6
仙台市									
秋田市	99.1	93.4	63.6	33.3	18.7	12.9	8.6	4.8	3.1
山形市	99.5	93.0	64.2	34.0	20.5	14.2	8.6	4.8	3.0
福島市	99.5	90.9	62.5	36.4	21.3	15.6	10.5	6.1	3.9
水戸市	99.3	91.7	64.9	35.4	20.8	15.0	9.9	5.6	3.5
宇都宮市	99.1	92.4	65.7	36.8	22.1	15.7	10.0	6.0	4.3
前橋市	99.4	90.8	63.8	36.7	21.2	16.3	11.7	7.2	4.5
浦和市	99.3	94.5	67.9	35.7	21.8	17.3	12.1	6.9	4.0
千葉市									
東京都									
横浜市									
新潟市	99.4	93.6	67.3	36.5	22.2	16.2	10.9	5.9	3.8
富山市	99.4	93.1	63.5	33.3	19.7	13.9	9.3	4.5	2.6
金沢市	99.4	94.4	65.6	34.3	18.8	13.3	9.2	4.6	3.5
福井市	99.3	93.7	63.9	30.4	16.4	11.3	6.7	3.6	2.3
甲府市	99.5	95.3	68.8	40.1	23.5	18.5	12.9	8.0	5.8
長野市	99.4	94.3	67.6	34.8	20.6	13.9	9.8	5.5	3.6
岐阜市	99.2	93.5	67.4	33.8	18.2	13.6	9.2	5.2	3.3
静岡市	99.5	94.2	70.0	38.3	23.5	17.2	13.1	7.8	5.3
名古屋市									
津市	99.0	93.4	65.1	29.3	15.9	11.3	7.7	5.1	3.1
大津市	99.4	94.3	64.6	30.3	15.9	11.2	8.3	4.6	3.2
京都市									
大阪市									
神戸市									
奈良市	99.0	93.3	64.0	29.6	15.5	9.5	6.0	3.0	2.0
和歌山市	98.8	90.4	61.7	29.9	16.9	12.3	9.2	5.5	4.0
鳥取市	99.5	92.3	60.5	33.2	17.9	13.0	7.8	4.3	3.4
松江市	99.1	90.3	61.0	32.5	20.3	13.5	9.5	6.0	4.5
岡山市	99.3	92.3	60.1	30.4	17.3	12.3	8.7	5.1	3.4
広島市									
山口市	99.5	93.7	63.6	32.4	17.1	12.0	9.1	5.5	4.3
徳島市	98.9	90.7	61.8	30.8	18.3	13.9	10.0	5.7	4.4
高松市	99.6	91.1	62.3	30.8	17.9	12.7	8.6	4.9	3.2
松山市	99.4	92.0	61.2	31.4	17.5	13.6	9.5	5.4	3.8
高知市	99.3	89.2	60.2	34.1	21.1	15.5	11.6	7.4	4.8
福岡市									
佐賀市	99.6	92.9	64.1	33.2	18.2	12.7	7.4	3.9	3.2
長崎市	99.6	93.2	65.7	34.8	21.5	14.8	9.6	5.9	4.1
熊本市	99.1	93.5	61.8	31.6	18.5	12.1	7.9	5.4	3.5
大分市	99.5	92.3	59.8	29.5	15.0	10.3	6.2	3.9	2.8
宮崎市	99.3	90.1	61.5	30.9	18.6	12.4	7.9	4.8	3.0
鹿児島市	99.4	93.8	63.8	34.0	20.3	14.0	8.6	5.4	4.0
那覇市	98.8	91.2	70.7	42.1	30.4	23.4	16.7	10.9	7.8

表3-1-11 女性未婚率(県庁所在市)(2000年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
札幌市	99.2	89.0	58.2	33.1	19.7	13.2	9.4	7.2	5.7
青森市	99.0	85.9	52.5	28.7	15.4	10.5	7.7	6.6	5.0
盛岡市	99.2	88.2	55.8	30.5	17.8	11.1	9.2	7.7	6.3
仙台市	99.2	90.3	57.0	30.0	15.9	10.6	7.3	6.2	4.9
秋田市	99.3	88.2	53.3	26.4	14.3	8.8	6.3	5.3	4.6
山形市	99.4	89.0	52.3	24.3	12.5	6.9	5.9	4.7	3.8
福島市	98.9	85.4	49.8	24.9	13.2	8.0	7.0	5.8	4.8
水戸市	99.3	89.0	51.4	24.3	12.4	8.1	6.2	5.0	4.3
宇都宮市	99.1	86.1	49.8	22.9	11.2	7.4	5.6	4.5	3.9
前橋市	99.1	87.2	52.5	26.1	14.4	8.3	6.0	6.0	5.5
浦和市	99.4	90.7	52.6	22.9	11.7	8.2	6.2	5.4	3.8
千葉市	99.3	90.6	56.1	26.9	13.2	8.0	5.8	4.2	3.2
東京都	99.3	93.0	65.3	37.6	22.0	15.3	11.6	9.9	8.0
横浜市	99.2	90.9	55.5	26.6	14.2	9.1	6.8	5.8	4.4
新潟市	99.3	89.5	56.7	29.9	16.9	10.6	7.6	6.5	4.9
富山市	99.5	87.5	49.7	22.9	11.8	6.9	4.5	4.1	3.0
金沢市	99.3	90.3	53.5	25.8	13.1	8.0	5.4	4.7	4.5
福井市	99.4	89.1	49.9	20.4	9.7	5.7	3.7	3.6	2.8
甲府市	99.2	89.8	54.9	26.2	13.9	9.1	7.6	5.9	5.1
長野市	99.5	88.0	54.1	26.3	12.7	7.9	5.8	4.9	4.4
岐阜市	99.3	90.7	55.1	25.2	13.7	8.6	6.2	5.5	4.4
静岡市	99.2	90.0	56.6	28.4	16.1	9.7	6.9	5.6	4.3
名古屋市	99.0	89.6	54.6	26.6	14.7	9.8	7.6	6.8	5.5
津市	98.7	89.1	49.9	21.2	10.9	6.9	4.9	4.4	4.6
大津市	99.5	91.2	53.5	22.9	10.1	6.0	4.7	4.2	3.5
京都市	99.2	93.0	61.1	32.9	18.1	12.1	9.5	8.3	6.8
大阪市	98.8	88.3	57.7	35.1	21.7	15.6	12.2	10.3	7.9
神戸市	99.3	90.9	58.0	30.6	16.2	10.3	7.9	7.0	6.0
奈良市	99.6	93.0	58.5	27.1	12.8	7.8	5.6	5.0	4.2
和歌山市	98.9	86.3	52.7	25.3	12.8	7.9	5.7	4.9	4.1
鳥取市	99.1	85.1	48.4	21.9	12.0	6.7	5.3	4.3	4.3
松江市	99.4	89.2	50.3	23.8	14.0	7.9	6.1	5.8	4.6
岡山市	99.1	87.8	50.2	24.8	13.8	8.4	5.7	5.2	4.4
広島市	99.2	89.2	53.7	26.9	13.5	8.3	5.8	4.7	4.2
山口市	99.4	90.0	50.9	24.2	11.9	6.8	5.5	5.4	5.5
徳島市	98.8	89.0	53.1	27.2	13.3	8.1	6.3	6.1	5.1
高松市	98.8	84.9	47.5	23.2	12.6	7.6	5.9	5.5	4.5
松山市	99.0	88.7	54.9	28.9	17.0	10.6	8.3	7.0	5.8
高知市	99.1	86.9	53.6	30.6	16.3	11.2	8.7	8.0	6.3
福岡市	99.1	92.2	63.4	35.4	19.3	12.7	9.9	8.8	7.1
佐賀市	99.3	88.6	55.8	27.6	16.3	10.7	8.5	7.0	5.6
長崎市	99.4	90.6	59.3	32.0	20.2	13.4	11.1	9.2	7.3
熊本市	99.1	88.4	56.5	29.0	16.5	10.6	8.5	7.5	6.4
大分市	99.3	87.5	53.1	26.7	13.9	7.9	5.4	4.6	3.9
宮崎市	99.2	88.0	55.1	29.5	16.3	10.1	7.3	7.0	5.6
鹿児島市	99.4	90.6	61.4	33.2	18.3	11.2	8.1	7.7	6.4
那覇市	98.6	85.9	61.8	36.2	20.1	14.0	12.2	10.8	8.0

表3-1-12 男性未婚率(県庁所在市)(2000年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
札幌市	99.5	93.1	67.8	40.5	23.3	16.4	12.4	8.2	4.9
青森市	99.5	91.2	64.6	39.7	23.5	17.0	13.6	8.3	5.2
盛岡市	99.6	91.6	66.3	41.9	26.9	18.7	13.8	9.2	5.6
仙台市	99.6	93.8	69.2	42.0	24.2	16.8	12.9	7.9	4.8
秋田市	99.5	92.6	65.1	38.8	24.3	15.9	12.0	8.2	4.5
山形市	99.5	92.3	66.1	39.4	23.8	16.3	12.7	8.3	4.6
福島市	99.5	89.8	63.1	39.1	25.0	17.8	14.5	10.0	5.7
水戸市	99.4	92.2	66.6	41.5	23.0	17.1	13.2	8.9	5.1
宇都宮市	99.4	92.9	68.6	42.3	24.8	17.9	13.9	8.9	5.4
前橋市	99.6	91.4	67.1	41.2	26.0	17.8	14.8	10.7	6.4
浦和市	99.7	95.8	72.2	40.6	22.8	16.6	14.6	10.6	5.9
千葉市	99.7	95.5	73.2	44.6	23.9	17.0	13.5	9.1	5.3
東京都	99.5	96.5	79.4	54.1	33.1	24.4	20.7	16.2	10.9
横浜市	99.6	95.5	74.1	45.5	27.2	19.6	16.3	12.0	7.5
新潟市	99.5	93.4	68.7	42.7	25.3	17.8	14.8	10.1	5.3
富山市	99.6	93.1	66.0	39.4	23.8	16.9	12.9	8.4	4.3
金沢市	99.5	94.5	66.9	39.0	23.3	15.5	11.8	8.6	4.2
福井市	99.7	94.7	66.4	36.9	20.4	13.9	10.1	6.4	3.2
甲府市	99.7	95.3	71.9	46.0	28.1	19.7	16.1	11.8	7.4
長野市	99.7	93.0	68.6	41.0	24.3	16.9	12.6	8.9	4.9
岐阜市	99.6	94.3	68.9	39.5	22.9	15.1	12.1	8.3	4.6
静岡市	99.6	93.4	71.2	43.3	26.2	18.5	15.3	11.8	6.5
名古屋市	99.4	94.6	71.8	43.6	26.5	19.2	17.3	13.5	8.9
津市	99.3	94.0	67.8	38.4	18.8	12.6	10.2	6.6	4.0
大津市	99.7	95.0	68.1	36.8	18.9	12.5	9.5	7.2	4.0
京都市	99.5	95.9	73.0	44.5	25.0	17.5	15.6	11.8	6.3
大阪市	99.3	92.7	70.1	47.2	30.7	24.5	22.2	18.0	12.2
神戸市	99.6	94.1	70.1	41.7	22.6	15.5	13.2	10.1	6.6
奈良市	99.7	95.1	69.2	36.9	18.3	11.6	8.2	5.5	2.9
和歌山市	99.5	90.8	65.1	38.2	20.6	13.9	11.0	8.5	5.1
鳥取市	99.5	92.4	64.9	38.0	24.7	15.7	12.3	7.2	4.4
松江市	99.8	93.3	63.6	37.8	24.2	16.3	13.0	9.5	5.6
岡山市	99.5	92.5	62.9	36.3	20.5	13.9	11.0	7.5	4.6
広島市	99.5	92.9	66.6	38.7	21.0	14.0	11.6	7.9	4.5
山口市	99.7	93.2	66.1	37.8	20.4	13.1	10.8	8.3	5.4
徳島市	99.2	92.9	64.5	38.7	20.7	14.5	12.3	8.3	4.9
高松市	99.5	90.6	62.6	36.2	20.7	15.0	11.6	8.1	4.4
松山市	99.5	92.3	64.2	37.1	22.1	15.0	12.4	8.8	4.9
高知市	99.6	89.7	64.5	40.0	23.5	15.6	13.3	10.3	7.0
福岡市	99.4	95.1	73.2	45.2	23.8	16.1	12.3	8.6	4.9
佐賀市	99.6	93.2	66.0	39.7	22.9	15.0	11.5	7.1	3.9
長崎市	99.6	92.7	67.4	40.8	24.7	18.1	14.1	9.1	5.6
熊本市	99.5	92.8	66.0	37.4	20.0	13.9	10.5	7.3	4.7
大分市	99.4	92.1	63.1	35.5	19.6	11.9	9.1	5.7	3.7
宮崎市	99.6	91.6	63.9	37.3	21.8	15.0	11.7	7.7	4.6
鹿児島市	99.6	93.1	67.5	38.8	24.9	17.1	13.2	8.3	5.2
那覇市	99.3	91.3	73.4	49.6	29.4	24.2	19.7	15.0	10.1

第2節 東北地方所在市の特徴

1. 出生に関わる特徴

出生に関わる特徴は、前節の県庁所在市の状況と類似している。表3-2-1・表3-2-2からわかるように近年は、低下傾向にある。出生率について1988年と1993年データを比較してみても、増加しているのは、水沢市、長井市、天童市の3市だけであった。

合計特殊出生率では、1993年の方が大きくなっている都市が東北地方の市では9市みられた。合計特殊出生率の一番高かった三沢市で2.03ポイント(1993年)だった。一番低い仙台市、塩竈市でも1.33であった。

2. 世帯構成の特徴

世帯構成をみると表3-2-3・表3-2-5のように1995年から2000年の間で親族世帯は全体的に減少している。特に、本荘市5.4ポイント、三沢市、気仙沼市3.5ポイントと減少が著しい。他の3ポイント以上の減少が確認できる市が7市ある。

単独世帯は、親族世帯の減少とは逆に比率が高くなってきている。東北地方の市で、単独世帯の比率が高いのは仙台市39.0%、盛岡市35.2%で、3割以上になっていた市は、米沢市と郡山市(2000年)であった。

夫婦とその子どもからなるいわゆる「核家族世帯」は、2000年の方が全体としては比率を下げている。東北地方のどの市も2000年では5割内外が、「核家族世帯」であり、比率が高いのは、多賀城市47.8%、仙台市47.5%、名取市46.8%と仙台の近郊都市である。尾花沢市19.8%、江刺市23.4%、遠野市23.8%は「核家族世帯」の比率が低い。

その他の親族世帯の比率は開きがあって、一番低いのは仙台市で15.0%、一番高い市は尾花沢市57.4%となっている。

また夫婦のみ世帯については、高いのは秋田市、能代市で28.9%、低いのは尾花沢市16.4%、黒石市17.0%、寒河江市17.1%(2000年)となっていて、全体では2割ほどとなっている。

その他の親族世帯の比率の高いところでは相対的に夫婦のみ世帯の比率も低いことは県庁所在市と同様の傾向である。

表3-2-1 出生率〔東北地方「市」〕(1988年)

市名	出生率	合計特殊出生率
青森市	10.2	1.47
弘前市	9.8	1.45
八戸市	11.6	1.70
黒石市	10.5	1.70
五所川原市	10.7	1.60
十和田市	10.5	1.62
三沢市	13.9	2.09
むつ市	11.7	1.86
盛岡市	11.6	1.53
宮古市	10.2	1.78
大船渡市	10.4	1.86
水沢市	10.4	1.72
花巻市	9.9	1.73
北上市	11.0	1.88
久慈市	12.8	1.97
遠野市	9.1	1.96
一関市	9.7	1.69
陸前高田市	9.0	1.74
釜石市	9.0	1.72
江刺市	9.0	2.00
二戸市	11.0	1.99
仙台市	11.3	1.48
石巻市	10.5	1.64
塩竈市	9.6	1.51
古川市	12.3	1.82
気仙沼市	9.8	1.64
白石市	10.0	1.70
名取市	11.2	1.66
角田市	9.8	1.79
多賀城市	12.6	1.78
岩沼市	11.4	1.79
秋田市	10.1	1.45
能代市	8.3	1.60
横手市	9.0	1.64
大館市	8.9	1.61
本荘市	10.2	1.68
男鹿市	7.6	1.51
湯沢市	9.8	1.73
大曲市	9.1	1.64
鹿角市	8.7	1.77
山形市	10.5	1.62
米沢市	10.4	1.77
鶴岡市	10.3	1.77
酒田市	10.0	1.78
新庄市	11.1	1.82
寒河江市	10.6	1.83
上山市	8.8	1.65
村山市	9.8	1.92
長井市	9.7	1.77
天童市	10.6	1.76
東根市	10.4	1.80
尾花沢市	9.7	1.98
南陽市	10.6	1.92

市名	出生率	合計特殊出生率
福島市	10.7	1.66
会津若松市	12.0	1.80
郡山市	12.3	1.76
いわき市	10.8	1.77
白河市	12.3	1.92
原町市	10.6	1.86
須賀川市	11.6	1.81
喜多方市	10.3	1.97
相馬市	10.7	1.91
二本松市	12.0	1.89

表3-2-2 出生率〔東北地方「市」〕(1993年)

市名	出生率	合計特殊出生率
青森市	9.5	1.40
弘前市	9.5	1.44
八戸市	11.0	1.65
黒石市	10.1	1.72
五所川原市	10.0	1.56
十和田市	10.1	1.64
三沢市	13.4	2.03
むつ市	11.3	1.84
盛岡市	10.4	1.41
宮古市	9.6	1.72
大船渡市	9.8	1.90
水沢市	10.6	1.77
花巻市	9.1	1.60
北上市	10.8	1.82
久慈市	11.1	1.79
遠野市	8.0	1.91
一関市	9.5	1.69
陸前高田市	8.8	1.77
釜石市	8.3	1.68
江刺市	8.1	1.85
二戸市	9.5	1.74
仙台市	10.3	1.33
石巻市	10.2	1.60
塩竈市	8.5	1.33
古川市	11.5	1.72
気仙沼市	9.3	1.65
白石市	8.4	1.53
名取市	10.9	1.58
角田市	8.4	1.58
多賀城市	11.8	1.64
岩沼市	10.2	1.59
秋田市	9.3	1.39
能代市	8.0	1.60
横手市	8.1	1.57
大館市	8.6	1.64
本荘市	9.6	1.69
男鹿市	6.4	1.41
湯沢市	9.3	1.77
大曲市	9.0	1.63
鹿角市	8.4	1.88
山形市	9.8	1.53
米沢市	9.5	1.66
鶴岡市	9.8	1.73
酒田市	9.7	1.75
新庄市	9.8	1.74
寒河江市	9.7	1.81
上山市	7.7	1.53
村山市	8.5	1.82
長井市	9.8	1.89
天童市	10.9	1.77
東根市	10.2	1.82
尾花沢市	8.1	1.92
南陽市	9.5	1.79

市名	出生率	合計特殊出生率
福島市	10.1	1.55
会津若松市	10.8	1.71
郡山市	11.2	1.63
いわき市	10.3	1.73
白河市	11.2	1.83
原町市	9.8	1.74
須賀川市	10.5	1.71
喜多方市	9.5	1.92
相馬市	10.0	1.86
二本松市	10.4	1.74

表3-2-3 世帯の家族類型〔東北地方「市」〕(1995年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世代
青森市	74.6	79.9	23.3	44.6	12.0	20.1	25.1	0.3	
弘前市	71.5	70.5	21.0	37.0	12.5	29.5	28.2	0.3	
八戸市	76.8	79.3	22.2	44.9	12.3	20.7	22.8	0.4	
黒石市	85.2	59.0	15.4	32.0	11.6	41.0	14.7	0.1	
五所川原市	79.1	69.7	22.0	36.3	11.4	30.3	20.5	0.4	
十和田市	72.2	72.5	21.7	39.2	11.5	27.5	27.4	0.3	
三沢市	74.5	79.9	25.2	43.7	11.1	20.1	25.2	0.3	
むつ市	76.5	81.3	25.0	44.0	12.3	18.7	23.2	0.3	
盛岡市	66.2	81.0	23.7	46.1	11.2	19.0	33.4	0.3	
宮古市	77.5	72.3	24.5	36.4	11.4	27.7	22.4	0.1	
大船渡市	80.0	64.4	23.2	31.6	9.6	35.6	19.9	0.2	
水沢市	76.0	69.7	23.0	36.6	10.1	30.3	23.7	0.3	
花巻市	77.0	62.0	19.4	33.4	9.2	38.0	22.8	0.2	
北上市	75.1	64.1	18.2	36.1	9.7	35.9	24.6	0.3	
久慈市	77.6	73.1	21.7	36.7	14.7	26.9	22.3	0.1	
遠野市	81.3	56.6	23.5	24.3	8.8	43.4	18.7	0.0	
一関市	77.0	66.3	22.0	34.6	9.7	33.7	22.9	0.1	
陸前高田市	86.2	55.0	18.8	24.8	11.3	45.0	13.8	0.1	
釜石市	78.0	74.9	31.2	33.3	10.3	25.1	21.8	0.1	
江刺市	86.2	48.3	18.5	22.2	7.5	51.7	13.7	0.1	
二戸市	77.8	68.8	24.1	34.0	10.7	31.2	22.0	0.2	
仙台市	61.9	83.6	23.2	50.3	10.2	16.4	37.7	0.4	
石巻市	77.3	73.2	21.0	41.7	10.5	26.8	22.5	0.2	
塩竈市	82.2	73.8	20.6	42.7	10.5	26.2	17.6	0.2	
古川市	77.8	65.9	18.2	38.5	9.2	34.1	22.2	0.0	
気仙沼市	83.1	66.0	21.0	35.8	9.2	34.0	16.8	0.1	
白石市	83.4	61.6	18.5	34.8	8.3	38.4	16.3	0.2	
名取市	83.7	73.2	17.4	47.4	8.4	26.8	16.0	0.2	
角田市	85.1	56.9	15.7	33.2	8.0	43.1	14.8	0.1	
多賀城市	73.0	80.9	20.0	50.9	10.0	19.1	26.6	0.4	
岩沼市	83.0	71.9	17.3	46.0	8.6	28.1	16.6	0.3	
秋田市	72.0	80.3	25.6	44.6	10.1	19.7	27.7	0.3	
能代市	80.9	67.9	26.2	31.4	10.3	32.1	19.1	0.1	
横手市	82.6	61.8	23.7	30.2	7.9	38.2	17.3	0.1	
大館市	80.0	66.9	25.7	31.5	9.7	33.1	19.8	0.1	
本荘市	80.1	63.7	19.4	34.3	10.0	36.3	19.9	0.1	
男鹿市	85.9	63.4	23.6	31.0	8.7	36.6	14.0	0.1	
湯沢市	83.6	58.5	20.8	29.0	8.7	41.5	16.4	0.1	
大曲市	80.6	60.9	21.6	30.7	8.5	39.1	19.3	0.1	
鹿角市	81.7	55.0	22.6	24.1	8.3	45.0	18.2	0.1	
山形市	73.6	68.2	21.3	39.1	7.9	31.8	26.3	0.1	
米沢市	72.9	59.6	17.7	32.5	9.4	40.4	27.0	0.1	
鶴岡市	79.6	61.4	19.7	32.0	9.7	38.6	20.3	0.1	
酒田市	80.5	63.7	20.6	33.1	9.9	36.3	19.4	0.2	
新庄市	80.5	57.7	19.1	30.7	7.8	42.3	19.2	0.3	
寒河江市	90.5	48.1	14.6	27.7	5.9	51.9	9.5	0.0	
上山市	85.9	53.3	17.5	28.3	7.5	46.7	14.0	0.1	
村山市	92.0	41.5	15.7	20.4	5.4	58.5	8.0	0.0	
長井市	85.8	52.6	17.6	27.8	7.2	47.4	14.0	0.2	
天童市	84.0	58.6	17.0	34.7	7.0	41.4	15.9	0.2	
東根市	87.5	52.3	16.3	30.4	5.6	47.7	12.4	0.1	
尾花沢市	91.7	39.0	13.9	19.7	5.3	61.0	8.2	0.1	
南陽市	86.6	51.3	16.0	27.4	7.9	48.7	13.2	0.2	
福島市	74.9	76.2	23.1	43.5	9.6	23.8	24.8	0.2	
会津若松市	72.5	73.2	24.3	38.2	10.7	26.8	27.2	0.3	
郡山市	71.4	74.1	20.3	44.4	9.4	25.9	28.3	0.3	
いわき市	79.4	73.0	22.6	40.4	10.0	27.0	20.4	0.2	
白河市	75.4	71.8	21.2	40.8	9.7	28.2	24.5	0.1	
原町市	78.8	64.9	19.5	36.6	8.9	35.1	21.0	0.2	
須賀川市	84.5	65.1	16.8	39.6	8.7	34.9	15.4	0.1	
喜多方市	81.5	58.6	19.9	29.5	9.2	41.4	18.3	0.2	
相馬市	79.9	59.1	19.4	30.5	9.2	40.9	19.9	0.2	
二本松市	81.4	60.5	17.0	35.3	8.2	39.5	18.5	0.1	

表3-2-4 6歳未満の子どものいる世帯の家族類型〔東北地方「市」〕(1995年) (%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世帯
青森市									
弘前市									
八戸市									
黒石市									
五所川原市									
十和田市									
三沢市									
むつ市									
盛岡市	100.0	78.7		74.9	3.8	21.3			
宮古市	100.0	59.3		56.1	3.2	40.7			
大船渡市	100.0	44.1		41.5	2.6	55.9			
水沢市	100.0	60.5		57.3	3.1	39.5			
花巻市	100.0	47.3		44.8	2.5	52.7			
北上市	100.0	54.8		51.9	2.9	45.2			
久慈市	100.0	66.7		58.9	7.7	33.3			
遠野市	100.0	35.5		33.4	2.1	64.5			
一関市	100.0	54.1		52.0	2.2	45.9			
陸前高田市	100.0	27.6		24.5	3.1	72.4			
釜石市	100.0	65.1		62.1	3.0	34.9			
江刺市	100.0	28.2		27.0	1.2	71.8			
二戸市	100.0	60.9		57.7	3.2	39.1			
仙台市	100.0	82.3		79.3	3.0	17.7			
石巻市	100.0	62.3		58.5	3.8	37.7			
塩竈市	100.0	60.3		57.4	2.9	39.7			
古川市	100.0	59.0		56.1	2.9	41.0			
気仙沼市	100.0	44.5		41.9	2.6	55.5			
白石市	100.0	49.6		47.2	2.5	50.4			
名取市	100.0	65.2		63.5	1.8	34.8			
角田市	100.0	43.2		40.7	2.5	56.8			
多賀城市	100.0	76.6		73.0	3.7	23.4			
岩沼市	100.0	66.1		64.2	1.9	33.9			
秋田市	100.0	77.6		74.3	3.3	22.4			
能代市	100.0	51.6		48.9	2.7	48.4			
横手市	100.0	48.8		47.0	1.9	51.2			
大館市	100.0	51.1		48.4	2.7	48.9			
本荘市	100.0	51.0		48.4	2.6	49.0			
男鹿市	100.0	42.3		40.5	1.8	57.7			
湯沢市	100.0	38.9		36.6	2.3	61.1			
大曲市	100.0	46.5		44.1	2.5	53.5			
鹿角市	100.0	33.2		31.7	1.5	66.8			
山形市	100.0	58.6		56.9	1.7	41.4			
米沢市	100.0	42.1		40.0	2.1	57.9			
鶴岡市	100.0	43.5		41.3	2.2	56.5			
酒田市	100.0	46.1		43.8	2.4	53.9			
新庄市	100.0	40.7		38.6	2.1	59.3			
寒河江市	100.0	31.0		30.2	0.8	69.0			
上山市	100.0	29.9		28.2	1.7	70.1			
村山市	100.0	18.9		18.4	0.6	81.1			
長井市	100.0	30.4		28.9	1.5	69.6			
天童市	100.0	47.6		45.4	2.2	52.4			
東根市	100.0	36.5		35.0	1.5	63.5			
尾花沢市	100.0	11.7		11.5	0.2	88.3			
南陽市	100.0	29.5		27.8	1.7	70.5			
福島市	100.0	70.4		67.2	3.3	29.6			
会津若松市	100.0	64.4		60.8	3.7	35.6			
郡山市	100.0	68.3		65.3	3.0	31.7			
いわき市	100.0	64.3		61.6	2.8	35.7			
白河市	100.0	62.1		59.5	2.7	37.9			
原町市	100.0	54.1		51.2	2.9	45.9			
須賀川市	100.0	53.9		51.9	2.1	46.1			
喜多方市	100.0	40.9		39.1	1.8	59.1			
相馬市	100.0	46.8		43.8	3.0	53.2			
二本松市	100.0	46.6		44.6	2.1	53.4			

表3-2-5 世帯の家族類型(東北地方「市」)(2000年)

(%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世帯
青森市	71.6	81.4	25.7	42.6	13.2	18.6	28.1	0.3	9.6
弘前市	70.0	72.0	22.7	35.6	13.7	28.0	29.6	0.4	15.2
八戸市	75.2	79.9	24.6	42.4	12.9	20.1	24.4	0.5	11.4
黒石市	82.3	60.6	17.0	31.2	12.5	39.4	17.5	0.2	27.1
五所川原市	77.6	72.0	23.7	35.7	12.6	28.0	22.2	0.2	16.8
十和田市	72.1	74.9	24.0	38.6	12.3	25.1	27.5	0.4	13.8
三沢市	71.0	80.9	26.5	42.2	12.1	19.1	28.6	0.4	10.4
むつ市	74.3	82.4	27.7	41.6	13.1	17.6	25.3	0.4	9.2
盛岡市	64.3	82.2	26.2	44.0	12.1	17.8	35.2	0.5	8.2
宮古市	75.7	74.1	27.1	34.8	12.3	25.9	24.1	0.2	14.3
大船渡市	77.4	65.0	25.6	28.8	10.6	35.0	22.5	0.1	21.0
水沢市	74.4	71.6	25.0	35.7	10.8	28.4	25.2	0.4	16.4
花巻市	75.7	64.4	21.3	32.8	10.3	35.6	24.0	0.3	21.8
北上市	73.6	67.1	20.8	35.8	10.5	32.9	26.4	0.0	19.5
久慈市	75.5	76.0	24.0	35.4	16.6	24.0	24.3	0.2	13.7
遠野市	78.7	58.3	24.0	23.8	10.5	41.7	21.2	0.1	25.3
一関市	74.2	68.7	24.0	34.1	10.6	31.3	25.5	0.3	18.5
陸前高田市	84.5	55.9	21.0	24.8	10.1	44.1	15.3	0.1	28.9
釜石市	75.2	76.4	33.5	31.3	11.6	23.6	24.7	0.2	11.8
江刺市	83.4	51.2	19.2	23.4	8.6	48.8	16.4	0.2	32.3
二戸市	75.2	70.6	25.0	33.8	11.8	29.4	24.6	0.3	16.1
仙台市	60.5	85.0	26.3	47.5	11.2	15.0	39.0	0.5	6.5
石巻市	75.7	75.1	24.1	39.4	11.6	24.9	24.1	0.2	14.6
塩竈市	80.7	75.3	23.1	40.2	12.0	24.7	18.9	0.4	15.9
古川市	75.3	68.8	19.8	39.0	10.1	31.2	24.2	0.6	19.5
気仙沼市	79.6	66.4	24.5	31.6	10.2	33.6	20.1	0.2	20.6
白石市	82.0	64.2	20.7	34.1	9.5	35.8	18.0	0.1	23.9
名取市	81.7	76.3	20.1	46.8	9.4	23.7	17.8	0.5	16.0
角田市	82.6	58.8	17.2	32.8	8.8	41.2	17.3	0.1	28.0
多賀城市	72.3	81.8	22.9	47.8	11.1	18.2	27.3	0.4	10.7
岩沼市	80.7	74.9	20.6	44.4	9.9	25.1	18.8	0.4	16.6
秋田市	69.8	82.1	28.4	42.8	11.0	17.9	29.9	0.3	9.2
能代市	77.6	70.2	28.4	30.9	10.9	29.8	22.2	0.2	17.1
横手市	80.0	64.3	25.3	30.0	9.1	35.7	19.8	0.3	21.8
大館市	77.8	68.8	27.3	30.7	10.9	31.2	22.0	0.2	18.6
本荘市	74.7	66.9	21.9	34.1	10.9	33.1	24.9	0.4	19.9
男鹿市	82.9	66.5	26.2	30.3	10.0	33.5	16.9	0.1	21.0
湯沢市	81.7	61.5	22.5	28.9	10.1	38.5	18.1	0.1	24.7
大曲市	78.2	64.4	24.3	30.7	9.4	35.6	21.5	0.3	21.5
鹿角市	78.9	56.1	23.7	22.8	9.6	43.9	20.9	0.2	27.1
山形市	71.3	70.4	23.8	37.9	8.6	29.6	28.4	0.3	17.0
米沢市	69.5	61.8	19.6	31.9	10.3	38.2	30.3	0.2	21.8
鶴岡市	76.5	63.4	21.5	31.4	10.4	36.6	23.3	0.2	22.7
酒田市	77.8	66.4	23.2	32.6	10.6	33.6	22.0	0.2	20.6
新庄市	79.1	59.3	20.7	29.6	8.9	40.7	20.7	0.2	26.4
寒河江市	87.9	52.1	17.1	28.2	6.7	47.9	11.9	0.1	35.8
上山市	83.9	56.2	20.3	27.7	8.1	43.8	15.9	0.2	30.5
村山市	90.3	45.0	18.2	20.5	6.3	55.0	9.7	0.1	40.9
長井市	83.2	54.8	19.5	27.1	8.2	45.2	16.6	0.1	31.5
天童市	81.8	62.1	19.5	34.5	8.1	37.9	17.8	0.4	26.0
東根市	84.4	56.3	19.2	31.0	6.1	43.7	15.4	0.3	30.9
尾花沢市	90.7	42.6	16.4	19.8	6.4	57.4	9.2	0.1	42.1
南陽市	84.3	54.2	18.5	27.0	8.7	45.8	15.6	0.1	32.3
福島市	73.1	78.0	25.8	41.7	10.5	22.0	26.5	0.3	12.4
会津若松市	70.2	74.3	25.6	36.9	11.8	25.7	29.4	0.4	13.9
郡山市	69.3	75.7	22.6	42.6	10.6	24.3	30.2	0.5	13.4
いわき市	77.1	75.1	24.6	39.2	11.3	24.9	22.6	0.3	14.8
白河市	72.2	74.0	24.0	40.0	10.0	26.0	27.4	0.3	14.8
原町市	78.5	67.1	22.5	34.4	10.2	32.9	21.2	0.3	20.7
須賀川市	81.7	67.5	18.8	39.3	9.4	32.5	18.2	0.1	22.1
喜多方市	79.9	60.6	21.5	28.9	10.2	39.4	19.9	0.2	25.1
相馬市	79.1	60.8	20.8	30.0	10.0	39.2	20.7	0.2	25.2
二本松市	79.5	62.7	18.9	34.8	9.0	37.3	20.2	0.3	24.6

3. 6歳未満の子どものいる世帯構成の特徴

6歳未満の子どものいる世帯についてみると東北地方の市では構成比に大きな差が出ている。表3-2-4・表3-2-6をみると1995年よりも2000年のほうが、夫婦と子世帯といういわゆる「核家族世帯」で暮らす子どもは、増加している。「核家族世帯」で暮らす子どもの比率が一番高いのは、仙台市で81.5%であり、続いて秋田市76.5%、多賀城市76.1%、盛岡市76.0%であった。

その他の親族世帯のなかで暮らす6歳未満の子どもは、東北地方の市では、5割以上いる市が20市(63市中)あり、比率が一番高かったのは、村山市73.3%だった。その一方でその他の親族世帯の比率が、仙台市14.8%、秋田市19.2%、盛岡市19.5%のように低いところもある。県庁所在市と比較すると、東北地方の市は、その他の親族世帯の中で暮らす子ども割合がかなり高い。

4. 婚姻率・未婚率の特徴

表3-2-7・表3-2-8からわかるように1988年から1993年の間で東北地方の市でも大半は婚姻率が上昇しているが、10市で比率が下がり、4市で同値であった。

女性の未婚率からも晩婚化の傾向は読み取れそうだが、表3-2-9・表3-2-11でみられるように、35歳から39歳層で未婚率が1割を切るのは、13市あった。未婚率が最も低くなっているのは、村山市5.0であった。45歳から49歳層で未婚率が1割をきるのは青森市、盛岡市、宮古市、釜石市、仙台市、塩竈市であった。

男性の未婚率は表3-2-10・表3-2-12でみられるように2000年では50歳から54歳層でも1割以上が未婚の都市が19市でてきている。そのうち喜多方市15.1、釜石市14.6は特に高い。1995年段階よりさらに晩婚化が進んでいる。

表3-2-6 6歳未満の子どもがいる世帯の家族類型〔東北地方「市」〕(2000年) (%)

市名	親族世帯	核家族	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	その他の親族世帯	単独世帯	非親族	三世帯
青森市	100.0	77.4		72.4	4.9	22.6			21.9
弘前市	100.0	60.3		55.0	5.3	39.7			39.0
八戸市	100.0	73.8		68.4	5.4	26.2			25.6
黒石市	100.0	42.2		38.6	3.6	57.8			57.1
五所川原市	100.0	64.9		60.5	4.4	35.1			34.5
十和田市	100.0	67.9		62.5	5.4	32.1			31.5
三沢市	100.0	78.8		73.5	5.3	21.2			38.4
むつ市	100.0	78.8		72.0	6.8	21.2			20.7
盛岡市	100.0	80.5		76.0	4.5	19.5			19.1
宮古市	100.0	63.0		59.0	4.0	37.0			36.3
大船渡市	100.0	47.1		43.2	3.9	52.9			52.6
水沢市	100.0	65.6		61.7	3.9	34.4			34.0
花巻市	100.0	53.0		49.4	3.5	47.0			46.5
北上市	100.0	61.8		58.2	3.6	38.2			37.7
久慈市	100.0	70.1		61.5	8.6	29.9			29.3
遠野市	100.0	40.2		37.4	2.8	59.8			59.2
一関市	100.0	60.6		56.6	4.0	39.4			39.1
陸前高田市	100.0	30.7		28.3	2.4	69.3			68.4
釜石市	100.0	68.6		64.7	3.9	31.4			31.0
江刺市	100.0	37.3		35.8	1.5	62.7			62.5
二戸市	100.0	63.7		60.1	3.6	36.3			36.0
仙台市	100.0	85.2		81.5	3.7	14.8			14.4
石巻市	100.0	67.9		63.1	4.9	32.1			31.4
塩竈市	100.0	64.0		58.9	5.0	36.0			35.3
古川市	100.0	67.5		63.9	3.6	32.5			32.2
気仙沼市	100.0	46.8		43.3	3.5	53.2			52.4
白石市	100.0	54.8		51.6	3.2	45.2			44.8
名取市	100.0	73.4		70.8	2.7	26.6			26.2
角田市	100.0	48.7		46.2	2.4	51.3			50.8
多賀城市	100.0	79.6		76.1	3.5	20.4			20.0
岩沼市	100.0	73.1		69.4	3.7	26.9			26.2
秋田市	100.0	80.8		76.5	4.4	19.2			18.8
能代市	100.0	58.0		54.8	3.3	42.0			41.5
横手市	100.0	56.0		53.1	2.9	44.0			43.4
大館市	100.0	57.4		53.9	3.5	42.6			42.0
本荘市	100.0	58.0		54.4	3.6	42.0			41.3
男鹿市	100.0	51.7		49.5	2.2	48.3			48.0
湯沢市	100.0	48.3		44.9	3.4	51.7			51.2
大曲市	100.0	58.6		55.3	3.4	41.4			41.1
鹿角市	100.0	34.9		31.4	3.4	65.1			64.3
山形市	100.0	65.4		62.7	2.8	34.6			34.3
米沢市	100.0	49.5		46.7	2.8	50.5			50.0
鶴岡市	100.0	49.8		46.5	3.3	50.2			49.6
酒田市	100.0	54.4		51.5	2.8	45.6			45.2
新庄市	100.0	46.4		43.8	2.6	53.6			53.1
寒河江市	100.0	40.4		38.4	1.9	59.6			59.3
上山市	100.0	36.7		35.1	1.6	63.3			62.8
村山市	100.0	26.7		25.5	1.2	73.3			72.8
長井市	100.0	38.2		36.7	1.6	61.8			61.6
天童市	100.0	55.6		52.7	2.9	44.4			44.0
東根市	100.0	50.8		49.0	1.7	49.2			49.0
尾花沢市	100.0	20.6		19.1	1.5	79.4			79.0
南陽市	100.0	38.5		36.6	1.9	61.5			61.0
福島市	100.0	75.2		71.0	4.3	24.8			24.4
会津若松市	100.0	68.4		63.8	4.7	31.6			31.1
郡山市	100.0	72.5		68.5	4.1	27.5			27.1
いわき市	100.0	69.7		65.3	4.4	30.3			29.7
白河市	100.0	68.3		64.5	3.9	31.7			31.3
原町市	100.0	57.6		54.0	3.7	42.4			41.9
須賀川市	100.0	60.0		57.0	3.0	40.0			39.7
喜多方市	100.0	46.9		43.4	3.4	53.1			52.5
相馬市	100.0	48.4		45.0	3.4	51.6			51.1
二本松市	100.0	55.7		52.4	3.3	44.3			43.3

表3-2-7 婚姻率〔東北地方「市」〕(1988年)

市名	婚姻率
青森市	5.7
弘前市	5.3
八戸市	6.2
黒石市	5.5
五所川原市	5.4
十和田市	5.4
三沢市	7.8
むつ市	5.9
盛岡市	6.1
宮古市	4.8
大船渡市	5.1
水沢市	5.6
花巻市	4.9
北上市	5.7
久慈市	5.7
遠野市	4.1
一関市	5.0
陸前高田市	4.5
釜石市	4.5
江刺市	4.2
二戸市	4.7
仙台市	6.5
石巻市	5.7
塩竈市	5.2
古川市	6.1
気仙沼市	5.1
白石市	4.5
名取市	5.8
角田市	4.2
多賀城市	7.0
岩沼市	5.0
秋田市	5.7
能代市	4.3
横手市	4.5
大館市	4.7
本荘市	5.2
男鹿市	4.1
湯沢市	4.7
大曲市	4.7
鹿角市	4.4
山形市	5.5
米沢市	5.1
鶴岡市	4.8
酒田市	4.9
新庄市	5.2
寒河江市	5.1
上山市	4.5
村山市	4.7
長井市	5.2
天童市	5.7
東根市	5.4
尾花沢市	4.3
南陽市	5.1

市名	婚姻率
福島市	5.4
会津若松市	5.9
郡山市	6.2
いわぎ市	5.7
白河市	5.7
原町市	5.2
須賀川市	5.3
喜多方市	5.0
相馬市	5.1
二本松市	5.1

表3-2-8 婚姻率〔東北地方「市」〕(1993年)

市名	婚姻率
青森市	6.2
弘前市	5.5
八戸市	6.4
黒石市	4.9
五所川原市	6.0
十和田市	5.6
三沢市	8.4
むつ市	6.4
盛岡市	6.3
宮古市	5.1
大船渡市	4.9
水沢市	5.7
花巻市	5.2
北上市	5.9
久慈市	5.6
遠野市	3.9
一関市	5.3
陸前高田市	4.7
釜石市	4.8
江刺市	4.0
二戸市	4.8
仙台市	7.2
石巻市	6.1
塩竈市	5.3
古川市	6.8
気仙沼市	5.1
白石市	4.6
名取市	6.1
角田市	4.6
多賀城市	7.6
岩沼市	5.5
秋田市	6.0
能代市	4.9
横手市	4.5
大館市	5.1
本荘市	5.3
男鹿市	3.9
湯沢市	4.8
大曲市	5.3
鹿角市	4.3
山形市	5.7
米沢市	5.6
鶴岡市	5.0
酒田市	5.3
新庄市	5.1
寒河江市	5.3
上山市	4.5
村山市	4.6
長井市	5.2
天童市	6.4
東根市	6.2
尾花沢市	4.6
南陽市	5.2

市名	婚姻率
福島市	6.0
会津若松市	6.2
郡山市	6.6
いわき市	6.1
白河市	6.3
原町市	5.3
須賀川市	5.8
喜多方市	4.5
相馬市	5.5
二本松市	5.6

表3-2-9 女性未婚率〔東北地方「市」〕(1995年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
青森市	98.9	86.0	48.4	21.7	12.4	8.1	6.8	5.4	4.9
弘前市	99.4	87.8	46.0	19.1	10.8	7.8	6.5	5.4	5.1
八戸市	99.0	81.1	44.0	18.2	9.7	6.0	5.0	4.0	3.7
黒石市	98.9	79.9	38.7	13.4	8.1	4.1	4.9	3.7	2.3
五所川原市	98.6	80.0	37.6	16.1	7.8	5.8	5.6	3.8	3.0
十和田市	99.2	83.1	41.4	15.7	7.7	5.2	5.2	5.0	3.4
三沢市	98.2	73.3	33.5	14.0	8.1	5.5	4.8	3.8	2.9
むつ市	98.2	73.6	33.9	14.4	8.6	5.0	4.6	3.7	3.1
盛岡市	98.9	86.6	51.3	24.0	12.4	9.6	7.9	6.4	5.7
宮古市	98.7	77.7	43.4	18.9	10.8	8.2	7.2	4.5	4.5
大船渡市	99.3	76.9	40.6	14.1	8.0	4.3	3.8	3.3	2.6
水沢市	98.8	77.2	41.6	17.6	9.2	6.0	4.8	4.2	2.2
花巻市	99.4	83.3	42.6	16.9	8.6	6.0	4.1	3.2	3.1
北上市	98.8	76.9	36.2	13.1	7.2	4.3	3.9	2.7	2.6
久慈市	99.1	74.4	40.7	16.2	7.1	4.8	4.3	3.1	3.5
遠野市	99.2	71.4	39.9	17.9	6.3	5.8	4.2	2.7	1.6
一関市	99.4	79.6	41.9	17.6	8.2	5.6	5.4	5.2	3.3
陸前高田市	99.9	82.1	48.1	15.7	8.5	4.6	3.5	2.1	2.5
釜石市	99.0	77.1	45.1	24.2	11.6	9.7	8.6	4.5	4.1
江刺市	99.4	79.5	42.4	15.3	4.2	3.3	2.7	1.9	1.3
二戸市	98.6	76.5	41.3	14.3	8.8	5.6	3.6	3.9	2.9
仙台市									
石巻市	98.8	82.6	43.1	19.0	8.5	5.7	4.1	3.6	2.6
塩竈市	99.3	85.5	49.6	21.9	11.9	6.9	5.2	3.8	3.1
古川市	98.4	78.2	33.7	11.7	5.7	4.0	4.2	3.6	2.3
気仙沼市	99.3	82.5	46.0	18.6	7.8	4.9	3.7	2.7	3.1
白石市	99.2	85.1	43.9	18.3	9.2	5.7	5.0	3.6	3.8
名取市	99.3	82.8	44.6	16.6	8.5	4.6	3.7	3.0	3.3
角田市	99.3	81.8	42.8	12.8	7.8	3.4	3.4	2.5	3.2
多賀城市	98.9	81.2	39.7	15.1	7.7	4.6	3.6	2.9	2.5
岩沼市	99.0	83.1	42.9	16.9	7.6	4.8	4.9	2.5	3.6
秋田市	99.1	87.8	48.8	20.4	10.3	7.1	5.3	4.7	4.0
能代市	99.0	80.6	41.4	15.9	7.8	4.4	3.9	4.0	3.3
横手市	99.2	80.7	39.8	15.1	7.1	4.0	5.4	4.4	3.5
大館市	98.9	80.4	42.1	15.8	7.8	5.3	5.4	4.1	2.8
本荘市	99.1	79.9	42.9	16.6	7.3	5.6	6.4	4.6	2.9
男鹿市	99.6	83.6	51.0	20.2	9.4	6.1	3.7	3.7	1.6
湯沢市	98.9	82.1	44.8	15.5	7.4	4.9	4.8	4.3	4.9
大曲市	99.6	79.6	38.7	15.1	7.9	4.8	4.3	4.4	3.3
鹿角市	99.2	76.6	37.6	13.9	5.2	4.1	3.8	2.4	2.1
山形市	99.3	88.4	46.8	17.7	8.4	6.3	4.9	4.1	3.9
米沢市	99.3	83.1	43.2	15.8	8.2	5.5	4.4	4.2	3.3
鶴岡市	99.5	83.6	41.8	15.8	6.8	4.1	4.4	3.9	2.9
酒田市	99.6	81.6	42.2	14.9	7.5	5.1	3.8	3.4	3.3
新庄市	99.2	77.8	41.5	14.3	6.4	4.1	3.4	2.9	3.4
寒河江市	99.0	85.3	39.4	11.7	4.6	3.5	2.4	2.0	1.3
上山市	99.3	87.3	44.9	16.0	7.4	3.8	3.2	4.9	5.6
村山市	99.9	80.7	38.0	9.3	4.1	2.6	1.6	2.0	1.3
長井市	99.4	77.8	39.7	12.2	4.2	3.6	4.0	3.4	2.6
天童市	99.7	80.7	37.1	12.9	5.9	3.8	3.3	2.6	3.0
東根市	99.3	79.4	37.2	10.8	3.3	2.2	2.1	1.6	1.3
尾花沢市	98.6	78.8	37.2	11.3	4.4	3.5	2.1	1.8	1.8
南陽市	99.5	83.2	37.8	14.0	6.0	4.7	3.8	2.9	3.3
福島市	99.2	85.2	46.4	19.6	9.7	7.3	5.8	5.3	4.6
会津若松市	99.0	81.8	41.4	16.8	7.8	6.9	5.7	4.9	4.2
郡山市	98.9	82.5	42.9	17.2	9.4	6.1	5.1	4.1	3.9
いわき市	98.7	79.8	42.5	16.8	9.0	6.3	5.2	3.9	3.0
白河市	99.0	78.4	40.7	13.1	8.4	5.0	4.8	4.1	3.1
原町市	98.7	75.6	37.5	12.2	7.0	4.3	4.0	4.0	2.8
須賀川市	98.8	77.5	42.3	15.0	8.1	4.6	3.9	3.9	3.0
喜多方市	99.3	78.3	38.2	14.9	6.5	6.0	4.3	5.8	3.8
相馬市	98.4	75.0	36.6	12.0	6.1	3.4	3.5	3.4	2.9
二本松市	99.2	82.9	42.8	17.8	6.4	5.1	4.9	2.6	3.1

表3-2-10 男性未婚率〔東北地方「市」〕(1995年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
青森市	99.1	91.6	62.2	33.8	20.8	15.0	8.9	5.2	3.0
弘前市	99.7	92.5	62.0	31.3	20.4	14.8	9.0	6.2	3.7
八戸市	99.6	91.0	61.1	35.8	24.0	16.4	9.5	4.9	3.2
黒石市	99.6	86.8	57.4	32.1	19.6	11.9	7.6	3.7	3.2
五所川原市	99.5	87.1	53.3	27.9	18.9	12.2	6.8	4.6	2.8
十和田市	99.6	90.7	60.3	33.8	22.0	14.7	9.9	6.4	4.2
三沢市	99.5	88.1	62.3	34.5	23.2	16.0	10.1	5.7	2.7
むつ市	99.6	87.6	60.3	34.3	22.8	16.4	8.8	4.2	3.4
盛岡市	99.1	91.3	63.8	36.3	21.8	14.7	9.8	6.1	3.6
宮古市	99.3	85.6	59.0	39.5	26.9	21.0	13.5	7.1	5.0
大船渡市	99.7	88.0	61.3	35.3	22.6	17.8	9.4	4.8	2.4
水沢市	99.3	85.4	57.1	37.3	24.7	17.5	10.8	6.7	3.1
花巻市	99.7	91.6	60.9	36.4	21.5	15.1	9.3	6.1	2.6
北上市	99.3	89.4	59.5	37.7	23.7	16.3	10.0	5.0	2.6
久慈市	99.8	85.9	59.4	37.8	24.6	17.9	8.9	5.5	3.4
遠野市	100.0	82.2	60.4	42.9	26.9	20.2	10.9	7.9	3.9
一関市	99.6	88.1	61.9	37.1	25.4	18.8	11.5	7.0	5.2
陸前高田市	100.0	90.9	65.1	40.8	26.0	17.2	11.4	4.9	2.3
釜石市	99.2	85.8	61.8	40.8	28.8	23.5	15.5	6.8	3.5
江刺市	99.9	88.0	64.6	43.1	26.5	19.7	12.7	5.2	2.4
二戸市	99.9	86.0	57.8	35.1	27.7	20.0	12.0	5.2	3.0
仙台市									
石巻市	99.4	91.0	61.1	36.1	23.8	15.7	9.0	5.5	3.2
塩竈市	99.3	90.6	65.7	38.4	24.8	17.8	11.9	5.9	3.5
古川市	99.2	85.1	58.3	31.9	18.3	15.5	8.5	5.2	4.0
気仙沼市	99.4	90.3	61.7	38.4	24.7	19.5	10.6	6.1	3.4
白石市	99.2	90.5	64.3	40.6	26.3	18.3	11.6	6.2	4.0
名取市	99.5	89.4	61.6	30.3	19.6	15.5	9.2	5.6	4.0
角田市	99.5	91.0	63.8	36.0	25.2	18.1	10.6	6.9	2.6
多賀城市	99.5	91.5	62.1	34.5	21.4	13.5	8.1	3.8	2.8
岩沼市	99.5	90.1	60.5	35.1	24.8	15.8	9.8	5.8	3.1
秋田市	99.1	93.4	63.6	33.3	18.7	12.9	8.6	4.8	3.1
能代市	99.6	89.2	61.6	35.5	21.6	15.7	9.7	5.6	4.0
横手市	99.5	89.7	63.1	33.4	20.5	15.6	9.9	6.6	4.1
大館市	99.1	89.4	60.1	36.2	22.8	16.5	10.3	6.2	3.3
本荘市	99.6	89.5	61.4	32.6	21.2	14.9	8.9	4.6	3.6
男鹿市	99.9	91.8	70.8	44.9	29.8	18.2	8.3	3.8	3.2
湯沢市	99.1	91.3	63.0	37.6	23.4	15.2	9.2	5.4	4.5
大曲市	99.9	88.9	53.9	32.9	21.4	14.5	7.7	5.0	3.5
鹿角市	99.6	87.2	62.1	37.8	20.3	16.9	7.6	5.1	3.6
山形市	99.5	93.0	64.2	34.0	20.5	14.2	8.6	4.8	3.0
米沢市	99.8	93.2	65.6	37.7	24.9	18.3	12.0	5.0	3.2
鶴岡市	99.7	91.0	60.6	35.0	23.4	16.7	10.9	6.4	3.1
酒田市	99.8	90.9	63.5	35.0	21.8	16.0	10.6	5.8	3.8
新庄市	99.4	88.5	61.4	32.0	19.9	13.2	9.1	4.7	3.1
寒河江市	99.5	91.3	61.4	33.5	18.4	13.9	7.8	3.6	1.9
上山市	99.5	92.8	65.4	38.0	22.8	17.3	10.4	8.4	6.9
村山市	99.9	88.4	60.5	35.3	23.8	14.8	9.5	3.7	1.6
長井市	99.5	88.9	58.3	33.8	18.5	15.9	11.3	6.3	3.3
天童市	99.7	88.1	58.4	30.6	19.7	13.3	7.7	5.0	3.4
東根市	99.9	92.0	63.6	33.4	20.1	13.4	6.6	3.1	2.1
尾花沢市	99.3	89.2	62.4	36.7	26.2	16.1	9.1	3.6	2.8
南陽市	99.8	90.9	60.1	34.6	21.1	17.0	8.6	5.3	2.9
福島市	99.5	90.9	62.5	36.4	21.3	15.6	10.5	6.1	3.9
会津若松市	99.5	88.0	58.7	31.7	21.0	16.9	11.3	6.9	3.8
郡山市	99.1	90.9	60.8	34.6	21.0	15.0	9.5	5.9	3.9
いわき市	99.3	88.6	62.2	36.8	25.2	18.3	11.7	7.2	4.7
白河市	99.4	88.6	62.4	35.5	21.7	14.5	9.5	6.5	2.8
原町市	99.7	84.4	58.1	33.0	21.4	14.4	9.2	5.7	4.6
須賀川市	99.3	85.7	58.6	34.8	21.0	13.1	9.4	4.9	3.7
喜多方市	99.6	87.6	59.9	35.2	25.0	18.1	15.0	8.8	5.9
相馬市	99.7	86.9	59.1	30.3	20.3	13.5	8.1	5.2	2.9
二本松市	99.5	87.0	59.2	35.2	23.4	15.3	9.0	5.6	3.4

表3-2-11 女性未婚率〔東北地方「市」〕(2000年)

市名	(%)								
	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
青森市	99.0	85.9	52.5	28.7	15.4	10.5	7.7	6.6	5.0
弘前市	99.4	89.2	52.0	26.9	14.1	9.6	7.2	6.0	5.2
八戸市	98.9	81.5	49.7	25.3	12.8	8.3	6.1	4.9	3.8
黒石市	98.8	80.5	46.5	21.3	10.6	5.9	4.3	4.3	3.3
五所川原市	98.7	76.9	45.9	21.3	11.8	7.5	5.6	5.2	3.9
十和田市	99.1	85.5	47.6	20.4	11.0	7.0	5.5	5.3	4.6
三沢市	98.2	75.1	38.6	16.3	9.3	7.3	5.9	4.6	4.6
むつ市	98.0	69.8	39.1	17.3	11.4	7.9	5.5	4.7	3.8
盛岡市	99.2	88.2	55.8	30.5	17.8	11.1	9.2	7.7	6.3
宮古市	99.0	79.1	47.7	24.6	14.7	10.0	7.7	7.4	4.2
大船渡市	98.8	79.8	46.3	20.5	8.6	6.9	4.5	3.9	3.4
水沢市	98.9	78.1	42.4	24.1	12.4	8.0	5.8	4.8	4.1
花巻市	99.4	81.4	47.2	22.7	11.8	6.7	5.6	4.1	3.5
北上市	98.4	74.2	39.7	19.2	8.9	6.3	3.6	3.9	2.6
久慈市	99.2	78.1	43.6	21.5	10.0	6.8	4.3	3.5	2.9
遠野市	98.8	72.4	39.9	24.9	12.3	5.8	6.1	4.4	2.0
一関市	98.7	80.0	43.0	24.0	13.5	8.0	5.8	5.1	4.7
陸前高田市	98.9	76.4	50.5	27.4	10.8	7.3	4.5	3.4	2.3
釜石市	99.0	77.1	47.0	24.8	17.1	11.4	9.2	8.3	4.7
江刺市	99.2	77.1	43.9	19.9	9.3	4.2	3.1	3.0	1.7
二戸市	98.9	79.6	44.3	21.5	11.9	8.2	5.1	4.5	3.4
仙台市	99.2	90.3	57.0	30.0	15.9	10.6	7.3	6.2	4.9
石巻市	98.6	79.8	47.2	24.8	13.8	7.3	5.2	3.4	3.8
塩竈市	99.2	85.4	56.8	29.2	15.0	10.2	6.6	4.6	3.5
古川市	98.5	77.6	41.0	19.1	8.8	5.5	3.5	4.1	3.4
気仙沼市	98.7	83.6	49.0	24.5	13.1	6.9	5.4	3.8	3.1
白石市	98.6	81.9	51.1	24.9	12.7	8.2	5.9	4.8	3.2
名取市	99.4	84.7	50.5	21.6	10.0	6.2	4.0	3.4	2.9
角田市	99.2	81.2	53.6	24.2	7.7	7.0	3.6	3.1	2.2
多賀城市	99.0	80.4	44.0	21.6	11.6	7.7	4.5	3.5	2.5
岩沼市	98.2	82.4	49.0	24.1	11.8	6.6	5.1	5.3	2.6
秋田市	99.3	88.2	53.3	26.4	14.3	8.8	6.3	5.3	4.6
能代市	99.4	81.6	45.0	21.7	10.9	6.8	4.2	3.8	3.3
横手市	99.3	81.8	46.1	22.6	11.5	6.6	3.8	5.1	4.4
大館市	99.3	81.4	46.7	21.6	11.6	7.0	5.4	5.5	4.1
本荘市	99.3	79.8	43.9	24.0	13.5	6.3	5.7	6.2	5.0
男鹿市	99.4	90.5	52.3	29.2	14.4	9.3	5.9	4.0	3.0
湯沢市	99.6	77.3	45.0	22.8	10.7	6.5	4.5	4.6	3.8
大曲市	99.3	82.1	44.0	19.8	11.7	7.4	4.7	4.4	3.8
鹿角市	99.2	73.0	45.5	19.4	10.3	4.1	3.4	4.4	3.0
山形市	99.4	89.0	52.3	24.3	12.5	6.9	5.9	4.7	3.8
米沢市	99.2	83.0	46.2	21.1	11.9	7.2	5.3	4.6	3.6
鶴岡市	98.9	81.5	47.0	22.7	11.0	6.0	3.9	4.2	3.8
酒田市	99.1	81.0	46.9	20.9	10.0	6.5	4.7	3.8	3.6
新庄市	98.4	77.7	42.0	19.0	10.6	5.7	4.2	3.2	2.7
寒河江市	99.4	81.5	45.1	18.1	7.7	4.3	3.7	2.6	1.6
上山市	99.4	88.5	53.8	22.6	10.6	6.3	3.5	3.3	4.9
村山市	99.5	84.6	45.5	15.1	5.0	4.0	2.7	1.5	2.0
長井市	99.2	76.5	45.3	18.1	7.7	4.1	3.8	3.8	3.0
天童市	98.9	81.3	43.3	18.6	8.9	4.7	3.8	3.1	2.2
東根市	98.7	78.5	39.7	17.3	6.5	3.5	2.6	2.1	1.7
尾花沢市	99.0	81.6	37.9	19.4	8.3	4.2	3.1	2.2	1.3
南陽市	99.0	78.4	45.8	18.8	10.1	5.1	4.0	3.2	2.5
福島市	98.9	85.4	49.8	24.9	13.2	8.0	7.0	5.8	4.8
会津若松市	98.8	79.8	45.1	22.6	11.4	6.7	6.5	5.5	4.9
郡山市	98.9	83.3	47.9	23.2	12.0	8.2	5.9	4.9	4.2
いわき市	98.9	81.1	45.3	21.6	11.5	8.1	5.9	5.1	4.0
白河市	98.9	77.9	44.1	20.7	10.9	7.4	4.7	4.7	4.3
原町市	98.1	74.5	42.1	19.5	10.5	6.0	3.9	3.6	3.7
須賀川市	98.8	78.3	41.6	21.9	11.3	6.9	4.7	4.1	3.7
喜多方市	98.4	74.2	42.1	20.9	11.6	5.5	6.4	4.2	5.7
相馬市	98.6	76.3	39.8	19.0	8.2	5.3	3.9	3.8	3.2
二本松市	98.8	79.8	45.8	21.7	11.7	5.9	5.2	4.6	3.7

表3-2-12 男性未婚率〔東北地方「市」〕(2000年)

(%)

市名	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59
青森市	99.5	91.2	64.6	39.7	23.5	17.0	13.6	8.3	5.2
弘前市	99.5	92.5	63.6	38.6	23.1	18.0	13.6	8.8	6.0
八戸市	99.4	89.6	64.6	41.0	26.3	20.3	15.0	9.3	4.6
黒石市	99.3	86.4	60.2	38.0	23.4	16.9	12.4	8.6	4.2
五所川原市	99.6	82.3	57.2	32.3	19.5	17.5	12.1	7.1	4.8
十和田市	99.7	90.7	61.1	38.8	25.6	19.4	14.9	9.1	6.8
三沢市	99.1	84.4	61.5	38.1	25.7	19.2	15.9	10.0	6.0
むつ市	99.4	85.4	60.2	38.3	27.3	18.9	15.6	8.0	4.2
盛岡市	99.6	91.6	66.3	41.9	26.9	18.7	13.8	9.2	5.6
宮古市	99.5	84.6	62.5	41.0	31.0	24.9	19.7	13.3	6.7
大船渡市	99.8	85.8	60.4	42.6	26.7	18.0	17.2	9.6	4.4
水沢市	99.6	85.1	60.0	38.2	27.6	21.4	17.0	10.3	6.9
花巻市	99.8	90.3	61.4	40.9	27.3	18.7	14.4	8.9	6.5
北上市	99.4	85.8	61.9	40.7	28.4	20.9	14.9	8.8	5.5
久慈市	99.6	85.6	61.0	42.1	28.9	23.4	16.8	8.3	5.8
遠野市	99.5	86.3	58.7	44.2	32.6	24.1	18.8	10.8	8.2
一関市	99.7	85.9	63.2	42.0	28.6	22.9	17.1	10.4	6.8
陸前高田市	100.0	85.6	65.2	45.6	30.9	21.3	17.3	11.1	5.5
釜石市	99.5	84.6	62.1	40.2	33.0	25.9	22.7	14.6	7.2
江刺市	99.6	85.5	65.1	43.3	30.8	20.7	19.0	12.2	5.1
二戸市	99.7	85.0	61.3	39.1	28.4	25.7	17.5	11.7	6.4
仙台市	99.6	93.8	69.2	42.0	24.2	16.8	12.9	7.9	4.8
石巻市	99.6	87.4	60.8	40.9	26.0	20.1	14.3	8.4	5.2
塩竈市	99.5	88.7	69.4	48.1	29.1	20.7	16.6	10.8	4.9
古川市	99.2	83.8	58.1	36.5	23.4	15.2	13.2	8.1	4.4
気仙沼市	99.4	89.7	63.8	42.9	29.8	21.6	17.7	9.7	6.2
白石市	99.3	87.4	68.3	45.0	31.4	23.9	16.8	10.8	6.4
名取市	99.6	89.5	63.7	36.9	19.8	14.4	12.9	8.0	5.2
角田市	99.2	88.3	69.6	44.8	26.5	21.5	16.7	10.3	6.4
多賀城市	99.5	90.3	61.3	39.7	25.1	18.6	12.4	7.2	4.0
岩沼市	99.4	86.7	62.5	40.6	26.6	19.7	14.5	8.6	5.5
秋田市	99.5	92.6	65.1	38.8	24.3	15.9	12.0	8.2	4.5
能代市	99.2	88.6	60.6	41.3	26.4	18.9	14.0	9.3	5.6
横手市	99.6	90.4	62.7	39.7	25.0	17.8	14.8	9.5	6.8
大館市	99.6	87.8	63.5	39.9	27.5	20.1	16.5	9.9	5.7
本荘市	99.6	89.0	61.1	41.9	26.1	19.3	14.6	8.8	4.8
男鹿市	99.7	93.8	73.1	51.9	35.6	26.9	17.1	8.3	4.2
湯沢市	99.8	87.4	61.6	39.1	27.8	21.5	15.0	9.3	5.6
大曲市	99.6	89.5	62.3	34.9	23.6	19.1	12.9	7.9	5.3
鹿角市	99.7	86.8	63.6	44.2	29.5	18.3	15.3	8.3	3.9
山形市	99.5	92.3	66.1	39.4	23.8	16.3	12.7	8.3	4.6
米沢市	99.7	93.4	65.8	43.4	28.1	22.1	17.0	11.1	5.1
鶴岡市	99.5	88.5	62.9	40.3	27.3	20.0	15.8	10.0	5.9
酒田市	99.9	88.8	64.2	41.9	25.4	19.5	14.8	10.3	5.7
新庄市	99.8	86.8	57.2	36.1	22.2	16.9	11.4	8.5	4.3
寒河江市	99.7	88.7	62.3	34.7	22.0	13.9	11.4	7.1	3.7
上山市	99.7	91.2	69.5	42.7	26.1	19.7	16.0	8.8	8.7
村山市	99.7	89.7	64.5	35.6	23.5	17.7	12.6	8.2	3.9
長井市	99.7	86.1	65.8	37.2	25.2	15.6	13.9	9.4	5.0
天童市	99.7	86.7	58.5	35.2	21.6	15.5	12.2	7.4	4.6
東根市	99.6	89.5	61.6	36.9	22.6	16.1	11.6	6.1	2.4
尾花沢市	99.8	89.2	60.5	41.9	27.6	21.7	13.4	8.0	5.3
南陽市	98.8	86.4	61.5	39.9	26.7	17.2	14.2	8.0	5.1
福島市	99.5	89.8	63.1	39.1	25.0	17.8	14.5	10.0	5.7
会津若松市	99.5	87.1	60.6	39.2	24.0	17.4	15.4	10.8	6.3
郡山市	99.6	90.7	63.9	39.3	24.6	17.1	13.2	8.5	5.3
いわき市	99.5	88.8	62.5	41.1	27.3	21.9	17.3	11.3	6.7
白河市	99.4	85.6	62.2	40.9	26.3	18.6	13.8	9.2	5.5
原町市	99.6	82.4	57.5	35.8	24.9	19.4	12.9	8.0	4.7
須賀川市	99.6	84.2	58.0	36.2	25.1	18.5	12.8	8.5	4.4
喜多方市	99.4	83.7	62.7	37.1	26.3	22.1	17.1	15.1	8.9
相馬市	99.7	86.1	60.3	38.8	22.8	18.3	12.2	7.6	5.0
二本松市	98.9	86.6	57.3	39.0	25.3	19.0	12.5	8.6	6.5

第3節 地方都市の子どもの環境

出生に関わる特徴をまとめると、県庁所在市も東北地方の市も、全体的に低下傾向にあるが、水戸市、浦和市（合併前）、大阪市のように大都市圏のベッドタウンでは増加していることがわかった。東北地方の市のなかで出生率が増加しているのは、水沢市、長井市、天童市の3市だけであった。

合計特殊出生率は、県庁所在市での減少傾向が著しいのに対して、東北地方の都市では、増加した市13市あった。ただし二戸市、岩沼市は0.20ポイント以上の減少であった。

世帯全体の動向をみると、県庁所在市も東北地方の市も、親族世帯は減少傾向にある。県庁所在市では、単独世帯が3割内外で、4割近いところでは、福岡市、仙台市などがあげられる。東北地方の市では市ごとの格差が大きく単独世帯が1割を切っているところもあった。

6歳未満の子どものいる世帯では、岩手県を例にとれば、約半分が「夫婦とその子ども」の世帯のなかにおり、約半分が「その他の親族」世帯のなかにいる。また7人世帯以上のところにもおよそ2割の子どもが暮らしている。県全体の傾向と比較すると、盛岡市は約8割が「夫婦とその子ども」の世帯のなかにいる。岩手県の中では盛岡市の構成比は特別であるといえるだろう。この盛岡市の特徴は、東北地方の市全体の中でも特別な例となっていたが、県庁所在市全体からみると、大都市近郊の市の構成比に近いものとなっている。

婚姻率と未婚率をみると県庁所在市も東北地方の市でも晩婚化傾向が読み取れるが、県庁所在市全体よりは東北地方の市全体の方がまだおだやかな晩婚化傾向であった。

女性の未婚率からも晩婚化の傾向が読み取れるが、東京都、大阪市、長崎市は45歳から49歳層でも1割が未婚であるのに対して、東北地方の都市では、45歳から49歳層ではどの市も未婚率が1割をきっている。

男性の未婚率は、2000年では50歳から54歳層でも1割以上が未婚の都市がでてきており、東京都、大阪市、那覇市は、50歳から54歳層でも1割以上が未婚であった。東北地方の都市では、2000年で50歳から54歳層でも1割以上が未婚である都市は、19市でてきていた。そのうち喜多方市15.1、釜石市14.6は特に高い。1995年段階よりさらに晩婚化が進んでいる。こちらはむしろ、中核都市とは地理的に離れていて、比較的独立性の高い「市」である。

「地方都市」を具体的にとらえるために、県(道・府)庁所在市と東北地方の

行政「市」の統計データから捉えられる変化をみてきた。県庁所在市全体よりも、東北地方の「市」の方が世帯の家族構成にしても、バラツキがあることが確認された。特に、6歳未満の子どものいる世帯構成は、地方都市であっても、「夫婦と子ども」世帯が7～8割という地域と「その他の親族」世帯が7～8割という地域に分かれることについては特筆しておきたい。

*本章の作表はすべて五味道恵氏による。

第四章 県庁所在市における育児支援施策 — 県庁(府庁)所在市対象の「育児支援に関する調査」結果から —

第1節 調査の概要

1. 目的

大都市圏とは違った育児環境のある地方都市において、その地方都市独自の育児支援施策が、具体的にどのように展開しているのか、住民のニーズをどのような方法で吸い上げているか、住民がどのように社会的資源を発見し、活用しているのかを「地域社会計画」の視点から実証的に研究を進めることが目的である。

大都市圏に入らない県庁所在地自治体（政令指定都市をのぞく）の地域的な特徴、出産・育児助成にかかわる施策、幼稚園・保育園・育児サークル等に対する支援政策が、自治体のどの部局でどのようなものとして計画されているかの情報を収集することである。

2. 調査方法

調査票送付前に、各県庁所在地自治体（市）のホームページから「子育て支援事業」の担当部署を確認してみると、複数の部局で担当している市もあったので、各市の総務局宛に、担当が推測された部局数を送付する。調査票を送付する際、総務局宛に、総務局から担当部署への配票を依頼するかたちとした。

票の回収については、担当部署から回答された票をそれぞれに直接大学の研究室に送り返せるように、返信用封筒を票数分同封した。

(1) 調査の経緯

送付先：46 府県(東京都を除き)県庁(府庁) 所在市総務部

発送日：平成 14 年 1 月 28 日

返送希望期日：平成 14 年 2 月 14 日まで

返送方法：同封の封筒で、回答部署ごとに返送

上記の要領で配票し、37 市から回答を得ており、合計で 60 票を回収している。回収できなかった票のうち、5 市については人口 100 万近くまたはそれ以上の規模の都市だった。5 市では調査対象である「地方都市」にはあたらないと考えられたのかもしれない。返送日、回収状況は、表 4-1-1 のとおりである。

表 4-1-1 県庁(府庁)所在市調査回収状況と回答部署一覧

番号	月日	部署名	資料
1	2/14	児童福祉部子育て推進課子育て支援係	地域子育て支援事業リーフレット
2	2/19	健康福祉部健康づくり推進課健康支援室	なし
3	2/21	健康福祉部しあわせ相談室児童福祉係	なし
4	2/18	保健福祉部児童福祉課保育係	なし
5	1/31	福祉保健部児童家庭課子育て総合センター	HPIのびすく!トッパページ 「仙台市の組織」コピー 「仙台市の組織」コピー 「仙台市子どもをとりまく環境等に関する総合調査」報告書
6	2/16	同上※秋田市保健所保健予防課母子保健担当	秋田市母子保健ガイド
7	3/4	健康福祉部児童福祉課	なし
8	2/12	健康福祉部児童家庭課※保健係	なし
9	2/15	同上※健康福祉部生涯健康課母子保健係	マタニティから子育て支援事業体系
10	2/22	保健福祉部児童福祉課※保育係	なし
11	2/22	同上※健康課母子保健係	なし
12	2/13	保健福祉部児童家庭課※保育管理係	前橋市児童育成計画
13	2/14	同上※教育委員会管理部総務課企画財務係	幼稚園入園料・保育料の補助(減免)について
14	2/19	保健福祉部児童家庭課児童家庭係※保健予防課母子支援係	なし
15	2/22	保健福祉部推進部児童保健福祉課児童福祉係	なし
16	2/22	保健福祉部推進部保育課指導係	千葉県愛の保育所運営要綱
17	2/22	保健福祉部推進部保育課指導係	なし
18	2/25	教育委員会教育センター幼児教育センター	よこはま子育て支援計画
19	2/1	保健福祉部児童福祉課保育係	なし
20	2/22	福祉保健部こども福祉課	富山市児童育成計画
21	2/12	福祉保健部こども福祉課	子育てビジョン 金沢21
22	3/11	福祉保健部保育児童課	離乳食教室「おおきくなーれ」のご案内
23	2/15	福祉部児童福祉課保育係	なし
24	2/26	福祉部健康衛生課	平成13年度甲府市保健計画実施計画
25	2/13	保健福祉部児童福祉課保育担当	長野市地域子育て支援センター事業概要
26	2/16	保健福祉部保健福祉課企画担当	静岡市の保健福祉(保健福祉編)
27	2/19	福祉保健部福祉課児童母子担当	子どもの相談・女性のための相談 津市の福祉 エンゼルプランつ'ダイジェスト版 津市児童虐待防止等ネットワーク会議設置要綱
28	2/25	健康管理課母子保健係	なし
29	2/26	福祉保健部児童家庭課保育係	なし
30	2/26	教育委員会学校教育課幼稚園	なし
31	2/26	教育委員会生涯学習課	なし
32	2/20	福祉部児童家庭課子育て支援係	子育て支援パンフレット
33	2/28	京都市子育て支援総合センターこどもみらい館事業課事業	平成12年度事業報告
34	2/14	児童福祉部児童家庭課	赤ちゃんホーム・家庭訪問所のお知らせ
35	2/14	福祉部児童福祉課庶務係	市役所の子育て相談
36	2/15	福祉部健康福祉課母子保健係	子育てガイドブック
37	2/14	和歌山市保健所地域保健室	子育てママ大集合スケジュールO シニア世代の子育てサポート教室
38	2/19	福祉保健部児童家庭課児童係	保育所入所申込のしおり
39	2/16	同上※健康対策課母子保健係	なし
40	2/19	福祉部健康推進課母子保健課	なし
41	2/26	児童家庭課保育係	まつえファミリーサポートセンター
42	2/19	保健課精神母子保健係	なし
43	2/25	福祉部家庭児童課管理係	なし
44	2/14	健康福祉部児童家庭課児童福祉係	なし
45	2/19	健康福祉部健康増進課	なし
46	3/8	健康福祉部保健所保健センター	なし
47	2/6	保健福祉部児童福祉課・地域保健課母子保健指導担当	なし
48	2/17	健康福祉部健康づくり課母子保健係	なし
49	2/6	保健福祉部児童課子育て支援係	佐賀市児童育成計画
50	2/12	福祉保健部児童福祉課総務企画係	長崎市子育て支援計画
51	2/18	福祉保健部地域保健課	なし
52	-	福祉部児童家庭課	くまもと子育てハンドブック
53	2/7	福祉保健部児童家庭課保育児童家庭係※庶務	なし
54	2/13	福祉保健部児童家庭課児童家庭係※健康課保健第	平成13年度赤ちゃんひろば実施計画
55	2/12	福祉事務所児童家庭課婦人児童係	なし
56	2/18	健康福祉部子ども課	なし
57	2/20	福祉部児童家庭課子育て支援係	「ほっとスペース」へのお誘い
58	2/20	津市子育て支援ショートステイ事業実施要	「ほっとスペース」へのお誘い
59	2/20	津市の福祉	赤ちゃんをすくすくと育てましょう
60	2/20	エンゼルプランつ'ダイジェスト版	エンゼルプランつ'津市児童育成計画
61	2/20	第3次津市総合計画中期基本計画	子どもの相談
62	2/20	津市児童虐待防止等ネットワーク会議設置要綱	
63	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
64	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
65	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
66	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
67	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
68	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
69	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
70	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
71	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
72	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
73	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
74	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
75	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
76	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
77	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
78	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
79	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
80	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
81	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
82	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
83	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
84	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
85	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
86	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
87	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
88	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
89	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
90	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
91	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
92	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
93	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
94	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
95	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
96	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
97	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
98	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
99	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い
100	2/20	津市子育て支援センター	「ほっとスペース」へのお誘い

(2) 主な調査内容

主な調査内容は以下の通りである。

- ・子育て支援事業の中心となる部課係
- ・子育て支援事業と関わりのある部署や機関
- ・国との連携／県との連携
- ・市独自の企画
- ・実績の上がっている事業
- ・子育て支援事業は市の重点施策か否か
- ・市民グループとの連携
- ・事業の周知方法
- ・エンゼルプラン／新エンゼルプラン／健やか親子 21 / 男女共同参画基本法との関わりや影響
- ・市民のニーズの収集方法
- ・事業効果の把握方法と評価
- ・新しい事業の起こし方
- ・調査票記入者の意識

第2節 調査の結果

1. 子育て支援事業の中心となる部課係

60票中、35票が中心となる部課係をあげており、20票が「特に中心となる部課係はなく、複数部課係で事業を行っている」にマークしていた。残り5票は、チェックがされていなかった。

複数の担当部署から回答のあった市に注目してみると、各回答部署のどの回答も、同一の中心担当部課係をあげているものも7市あったが、回答した部署それぞれが自分の部署を中心担当だと考えているものや特に中心がないと考えている部署が混ざっている市が6市ほどあった。またどの部局も、「特に中心となる部課係はなく、複数部課係で事業を行っている」と統一的に回答した市は4市だった。

複数担当部署があるところでは、中心部署があり、他の部署との関係が互いに明確になっている組織は意外に少ない。多くの市が中心部署を福祉－保健(保健－福祉)部においている。

2. 子育て支援事業と関わりのある部署や機関

子育て支援事業と関わりがあると考えられる部署や機関についてあげてもらっている。回答している「課」と関連の深いものから順番に書いてもらっている。回答されたものの数は、4つあげているものが15票、1つあげているものと5つあげているものが13票ずつであった。平均は3つとなった。

3. 国との連携／県との連携

子育て支援事業について国と連携している事業があるか、連携しているものがあれば、事業名について問うている。49票は「助成金を受けている」と回答しているが、連携事業はないとする回答も9票でてきた。連携している事業名をあげたところは1票のみであった。

県との連携についても、国との連携と同様の選択肢で聞いているが、「助成金を受けている」と回答した票が26票、「事業の連携」をあげたものが7票であった。国との連携は「助成金」のかたちで行われていると答えたものが8割

近くであるのに対して県では4割ほどとなっていた。

4. 市独自の企画

市独自で企画している子育て支援事業があるか、ある場合は、その事業名、担当部局、事業概要を聞いた。

独自の企画があると回答したものは40票であった。ただし、「独自」の企画としてあがっているもので、多胎児家族への援助、一時保育・休日保育等の事業、子育て支援関係の相談事業が複数でてきていた。

5. 実績が上がっている事業

実績が上がっている事業があると回答したのは、41票であった。前問の「市独自」の事業を実績が上がっている事業としていたのは8市であり、市全体からみれば2割ほどで意外と少ない。

6. 子育て支援事業は市の重点施策か否か

市の重点施策と回答したのは、35票であった。同じ市でも回答した部署によって子育て支援事業を「市の重点施策となっている」としている部署と「重点施策となっていない」と言う部署が出てきている市があった。

7. 市民グループとの連携

市民グループとの連携については、以下の9つの項目について、「力を入れてやっている」「やっではいる」「全くやっていない」の3つのうちから1つを選ぶよう求めている。それぞれについて、最も多くでた項目をあげると、

- ①サポートグループの養成講座や育児学級の開催…「やっではいる」21票、
- ②子育て関連グループの把握…「やっではいる」34票、
- ③育児支援サークルのグループ作りの援助・育成…「やっではいる」22票、
- ④子育てサークルのグループ作りの援助・育成…「力を入れてやっている」22票、
- ⑤サポートグループとサポートが必要な親の連絡調整…「やっではいる」21票、
- ⑥サークル活動助成金等を出す…「やっではない」38票、
- ⑦公民館等の公共施設使用を優遇する…「やっではない」25票、
- ⑧入会希望者にサークルを紹介する…「やっではいる」25票、
- ⑨既存のグループに対する行政支援情報を提供…「や

っている」24票となっていた。

②子育て関連グループの把握、④子育てサークルのグループ作りの援助・育成、⑧入会希望者にサークルを紹介するは、およそ7割がやっていると回答する市民グループとの連携であるが、⑥サークル活動助成金等を出す、⑦公民館等の公共施設使用を優遇するは、実施しているところが少ない。

8. 事業の周知方法

子育て支援事業は、市ばかりでなく、県や国の主催する事業もあり、市が事業に協賛する場合もある。そこで、市の子育て関連事業と国・県主催の子育て関連事業に分けて、以下の11種類の方法をあげて、情報をどのように市民に報せるかを聞いた。

①広報への掲示、②市のホームページにのせる、③対象となる家庭への郵送または配布、④新聞での広告、⑤タウン誌への広告、⑥保健センターの掲示、⑦公民館の掲示⑧保健所の掲示、⑨産院や産婦人科小児科などの病院医院での掲示、⑩市独自の育児冊子等への掲載、⑪その他。

この11種類のうち、市の子育て関連事業については、①広報への掲示53票、②市のホームページにのせる43票、⑥保健センターの掲示35票と他を圧倒的に抜いている。特に少なかったのは、④新聞での広告4票、⑤タウン誌への広告5票であった。

国・県主催の子育て関連事業については、ほとんどが、報せているにはマークされず、①広報への掲示20票、⑥保健センターの掲示21票にとどまっている。

9. エンゼルプラン／新エンゼルプラン／健やか親子21／男女共同参画基本法との関わりや影響

子育て支援事業に関わる法律は、福祉、保健関連法規についても注意する必要があるが、事業の展開を考えると近年続けて施行された以下の法律との関係が気になってくる。そこで本調査では、「エンゼルプラン」(1994年)、「新エンゼルプラン」(1999年)、「健やか親子21」(2000年)、「男女共同参画基本法」(1999年)について、事業数・内容に変化はあったか、事業予算や人員に変化をもたらしたかをきいた。

「エンゼルプラン」では、事業数について「以前より事業数が増えた」が37票、内容について「以前より充実した」が41票、予算について「以前より全

体予算が増えた」36票と、活性化している様子がうかがえるが、人員については「担当人数に変化はない」に36票と集中した。

「新エンゼルプラン」では、事業数が「増えた」36票、内容についても「以前より充実した」が44票、「以前より全体予算が増えた」36票であった。人員については「担当人数に変化はない」に35票と、「エンゼルプラン」同様の傾向の回答となっていた。

「健やか親子 21」については、事業数で「以前より事業数が増えた」が14票に対して「事業数に変化はない」が30票となっているが、内容については「以前より充実した」が29票、予算について「変化はない」が24票であった。人員についても「担当人数に変化はない」に38票となっている。

「男女共同参画社会基本法」では、事業数、事業内容、予算、人員すべてにおいて「変化がない」が最頻値であった。

「エンゼルプラン」、「新エンゼルプラン」はともに、事業の活性化をよんでいるようだが、増員はなかなか適わないようである。

10. 市民のニーズの収集方法

市民からのニーズをどのような手段で集めて、どのように活かしているかを聞いた。

「対象者の懇談会を開く」「公募委員から聞く」「育児・子育て相談窓口利用集計から」「事業参加者アンケートから」「市民調査を行う」「市民からの陳情の意見」「市議会からの提案」「その他」の8項目で該当するものすべてを選んでもらった。

この中で最も多く選ばれたのは、「事業参加者アンケートから」42票であった。次いで、「育児・子育て相談窓口利用集計から」33票、「市民調査を行う」20票であった。

どのように活かしているかについては、「ニーズに合わせて事業内容の改善を図る」「市民のニーズに合わせて担当部局で事業として立ち上げる」「他の担当部局に市民ニーズをつなげる」「市長の提案として事業を立ち上げる」「その他」の5項目から該当するものをすべてを選んでもらった。

この中で最も多く選ばれたのは、「ニーズに合わせて事業内容の改善を図る」52票と圧倒的であった。「市民のニーズに合わせて担当部局で事業として立ち上げる」21票、「他の担当部局に市民ニーズをつなげる」20票はほぼ同数で、三分の一の回答者が選んでいた。

11. 事業効果の把握方法と評価

事業の効果はどのようにして把握しているのだろうか。これも前問同様、選択肢のうち該当するものすべてをあげてもらっている。

「対象者の懇談会を開く」、「公募委員から意見を聞く」、「育児・子育て相談窓口利用集計で」、「事業参加者アンケートで」、「市民調査で」、「市民からの陳情の意見で」、「その他」のうち、「事業参加者アンケートで」が37票集まったが、次の「育児・子育て相談窓口利用集計で」21票以外は、回答が低調でどれも選ばない回答が目立った。

事業効果の評価については、「利用者の増減など事業実績から評価」、「利用者アンケートから事業の効果や利用者の満足度をみている」、「第三者評価を受けている」、「市議会の評価を受けている」「その他」の5項目から該当するものすべてを選んでもらっている。

「利用者の増減など事業実績から評価」50票、「利用者アンケートから事業の効果や利用者の満足度をみている」35票と2項目は圧倒的だった。

12. 新しい事業の起こし方

新しい事業を起こしたり、大きな改編をするときどのような方法をとるか、「国の新しい制度を利用する」、「モデル事業として立ち上げる」、「市民のアイデアや公募などで収集して事業を起こす」、「産学官共同事業助成金などをつかって起こす」、「担当課が市議会に図って起案する」、「その他」の6項目から該当するものすべてを選んでもらった。

「国の新しい制度を利用する」41票、「モデル事業として立ち上げる」28票に次いで、「担当課が市議会に図って起案する」16票とほとんどがこの3項目に集中した。

13. 調査票記入者の意識

調査票の最後で、記入者の意見を子育て支援事業実施に当たって困っていることと、実施に当たって進めていきたいことについて担当者としての意見を聞いている。

子育て支援事業を実施するに当たって困ることは、「予算が乏しい」、「適当な事業案が浮かばない」、「他の部署との連絡調整が煩雑だ」、「委託事業が増えて独自の仕事が出来なくなっている」、「根拠となる法律や法令がたくさん

でてきて分かりにくい」、「仕事が忙しくなる(人手が足りない)」、「市民のニーズを把握するのが難しい」、「利用者の層がどんどん変わるなど、やりがない」、「その他」の12項目から選んでもらっている。

以上の項目のうち一番多かったのは、「予算が乏しい」で27票、次いで「仕事が忙しくなる(人手が足りない)」25票、「他の部署との連絡調整が煩雑だ」、「市民のニーズを把握するのが難しい」が同数で20票だった。

もう1問は、子育て支援事業を実施するにあたって、進めていきたいことを以下から選んでもらった。

「担当人員を増やしたい」「事業数を増やしたい」「事業を整理して数は減らしたい」「担当者の兼任などの努力をはかった上で担当者総数を減らしたい」

「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」「市独自の企画事業を増やしたい」「市は、育児支援事業の統轄・連絡機関となって具体的な支援サポートやサークル活動の育成等は、他の機関(NPOや社会福祉協議会など)が中心になるのがよい」「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」

「市域を越えて、隣接の市町村との連携がしたい」「その他」。

回答で一番多かったのが、「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」41票で圧倒的であったが、困っていることとしての「仕事が忙しくなる(人手が足りない)」や「市民のニーズを把握するのが難しい」に呼応するように、「担当人員を増やしたい」22票、「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」21票となっていた。

第3節 県庁所在地市調査についての考察

各県庁所在地自治体（市）のホームページから「子育て支援事業」の問い合わせ窓口を特定することを目的に、ホームページの検索から本調査はスタートした。しかしホームページをみただけでは、育児支援を担当する部署はわかりにくい。さらに各市とも、情報満載で、ホームページの「ふところ」が深く、中断すると、先ほどたどり着いていたページがどこにあるのかわからなくなることがたびたび起こった。この状況は、6歳未満の幼い子どもを傍らおいて、細切れのちょっとした時間で、めあてのページを探す親たちにとって、大きな困難となる状況でもあるだろう。

本調査では、ホームページから担当部署を特定し、その部署に調査票を直接送ることを断念して、総務部に宛てて調査を依頼して、総務部の判断で当該市の「子育て支援事業」に関係する課や係に配っていただく方法をとった。

返送された票の発送元の大半は、ホームページ上で特定できた部署ではあったが、なかには、こちらで検索を思いつかなかった教育委員会や生涯教育課の回答票もあって、結果的には、総務部あてに調査を依頼したことが功を奏した。

多くの県庁所在地自治体（市）が、複数の担当部局で、育児支援事業または働く女性（家族）の育児サポート事業、子どもの育成事業といった取り組みをもっていることはわかったが、これらの事業どうしの関係を体系的に把握する連絡調整機関を設置している市は少なかった。さらに複数の担当部署があっても、部署内での調整や評価は行うが、他の部署との連携を図る試みや市全体の「子育て支援事業または子育て支援関連事業」の総合的なまたは全庁を視野に入れた評価はあまりなされていないことわかってきた。例えば、「市独自で企画している子育て支援事業」について問いに対しても、複数枚回答票のある市を中心にみると、大半がそれぞれの票に回答部署の事業をあげており、「市」独自の全庁的な視野で、他の部署の事業までを見通した回答はあまりでない。むしろ人口規模の小さな市で担当も限られ、回答が単独になっているところの中に、包括的な視点が確保されている例があった。ただし、実際に、回答してくださった方の所属部署のみが唯一「子育て支援事業」を担当しているのかどうかは確認されていない。

しかしながら、担当者がこの状態の問題性に気づかずにいるわけではなく、何らかの改善の必要を感じていることは、調査票記入者の意識をきいた質問の回答でもわかる。回答結果が「子育て支援事業実施に当たって困っていること」

には、「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」に票が集まったことや、「進めていきたいこと」については「担当人員を増やしたい」、「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」が上位にはいつてきていることからわかる。

子育て支援事業は、社会福祉協議会等のとり組みの中にも同種の企画があり、地方自治体の事業を知るだけでは、その地域独自のとり組みを明らかにすることはできないと言いき難いこともわかってきた。今後は、こちらの取り組みについても把握する必要があるだろう。

そう多くなかったが、市独自で「子育てプラン」等の計画をつくり、特定部局が統括連絡調整機関となっている市は、提供される情報、事業企画も多く、窓口もわかりやすくなっている。この点も、本調査の知見として特筆しておくなければならない。

国や県との事業連携は、国からは「助成金を受けている」が主流であり、事業の連携はあまりなされない。県との連携でも「助成金を受けている」の回答が最頻値だが、国からの助成金のほうが回答数が多かった。

助成金をはじめとして、事業の基盤となる法規については、「エンゼルプラン」(1994年)、「新エンゼルプラン」(1999年)、「健やか親子21」(2000年)、「男女共同参画基本法」(1999年)について、事業数・内容に変化はあったか、事業予算や人員に変化をもたらしたかをきいた。

「エンゼルプラン」と「新エンゼルプラン」は事業数を増やし、事業内容を充実させ、予算の増加にも寄与しているようだが、増員までは適わないものようだった。「健やか親子21」については、「事業数に変化はない」が最頻値となり、内容については「以前より充実した」が多かったが、予算については「変化はない」とするものがおおかった。人員についても「担当人数に変化はない」に38票となっている。「男女共同参画社会基本法」では、事業数、事業内容、予算、人員すべてにおいて「変化がない」が最頻値であった。

どの法規も増員には結びつかないという意見が共通にでていった。

新しい事業を起こしたり、大きな改編をするとき、「国の新しい制度を利用する」や「モデル事業として立ち上げる」に票が集まっていることと合わせて考えてみると、近年相次いで施行された法律、特に、「エンゼルプラン」・「新エンゼルプラン」の効果は新しい事業を起こすなどの大きな変化への原動力になっているのではないだろうか。

市民からのニーズをどのような手段で集めて、どのように活かしているかは、「事業参加者アンケート」を通して集めているとするものが最頻値であり、次いで、「育児・子育て相談窓口利用集計から」があげられていた。選択肢には、

最近多くなってきた、意見収集のために専門に開く「公募委員」会形式や「懇談会」形式はあまり実施されていなかった。これは対象者がなかなか、市の会合に出席できる事情にないことを反映したものかもしれない。

また収集された意見は、「ニーズに合わせて事業内容の改善を図る」が圧倒的であった。さらに事業の効果の把握及び評価には、「事業参加者アンケート」で把握するに票が集まり、次いで「育児・子育て相談窓口利用集計で」把握するの2項目に票があつまった。

事業効果の評価についても「利用者の増減など事業実績から評価」するや「利用者アンケートから事業の効果や利用者の満足度をみている」の2項目に票が集まった。選択肢には、第三者評価などもあげていたが、利用している市はきわめて少ない。子育て支援事業や子育て関連事業については、利用者のニーズは、多くの市で、検討され、評価されているようだが、事業に参加しない親たちのニーズについては、把握し検討する手段を確保している市は意外に少ないことがわかる。

最後に、子育て支援事業実施に当たって困っていることと、実施に当たって進めていきたいことについて、担当者(調査票記入者)の意見を聞いている。

子育て支援事業を実施するに当たって困ることは、「予算が乏しい」、「仕事が忙しくなる(人手が足りない)」、「他の部署との連絡調整が煩雑だ」、「市民のニーズを把握するのが難しい」が上位に上がっていた。

子育て支援事業を実施するにあたって進めていきたいことでは、「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」が圧倒的であったが、「担当人員を増やしたい」、「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」にも20数票集まっていた。

事業数が増え内容が充実し、予算が増えても、人員の増加はあまり実行されていない現状を反映した意見ととれる。

第五章 盛岡市・矢巾町における育児教室

第1節 調査の概要

1. 目的

核家族化、少子化といった社会構造の変化、長時間・過密労働など労働環境の影響を背景とする、子育てに伴う母親の身体的・精神的負担に対して、育児支援策がさまざま打ち出されてきている。しかし、母親一人で育児の大半を担っている状況には大きな変化は見られない。それゆえの育児困難は今日でも看過できないところが多い。

国の子育て支援の事業の中心は、エンゼルプランに始まり、延長保育をはじめとする保育所の保育形態の多様化、就業者以外の家庭保育支援のための子育て支援センターの設置といったかたちで、保育関係（「福祉分野」）の事業が増えた。とは言っても盛岡市の場合、子育て支援センターが全ての子育て支援の中心を担っているわけではない。特に乳児期は、育児における母親の心身の負担は大きいのだが、子育て支援事業として利用できるものは限られているし、保育園に入所している割合も他の年齢に比べて低い。その点、母子健康手帳の交付や乳児健診などで、相談のあるなしに関わらずだれでも接触するのは「保健分野」である。

増大する育児不安に、地域保健における対応も変わろうとしている。厚生労働省は「健やか親子21」の中で、「これまでの疾患の早期発見・早期療育など画一的な保健指導の体制を、育児支援の観点から見直す。市町村の乳幼児の集団健診を、疾患や障害の発見だけでなく、親子関係・親子の心の状態の観察ができ、育児の交流の場として、話を聞いてもらえる安心の場として活用する」と報告している。保健指導も、一方的に指導するのではなく、母親の心のケアが求められると指摘されている。

しかし現状は、集団で行う乳児診断は減る一方である。特に盛岡市は、完全に個別健診制度を採っているため、育児の交流の場としては難しい状況である。「話を聞いてもらえる安心の場」としても、例えば子どもの成長・発達が順調かどうかや、

乳児湿疹などの病気の手当の仕方などは医師に聞けるが、成長と密接に関わる、離乳食の作り方などの具体的なやり方や、“夜泣きがひどくて大変”などといった母親自身の悩みに、その場でゆっくり相談することができない場合も多い。

そういう意味で、育児教室は、乳児期の子どもを持つ母親全てに開かれた事業であり、母親同士の交流という形で、あるいはケースによっては個別にも母親の悩みに対応することが可能である。岩手県の子育て支援担当者に対する意識調査¹⁾でも、母親同士交流する事業で、母親が元気に明るくなるという認識を持っていた。また、ヘルスプロモーションのキー概念の一つ、エンパワメントの観点からも、いくつかの活動が紹介されている²⁾。それらは、育児教室や乳児健診の中で、グループアプローチを導入して、「共感・共有」を体験し、「自己決定」「自己効力感」などを高めたというものである。

以上のことから、育児教室に期待するものは大きい。しかし、エンパワメントは長期的で総合的な支援型アプローチが必要とされていることから³⁾、1回ないし数回の育児教室で受ける影響とはどんなものなのか、人によっては期待したような影響は受けないのではないか、またそれが、より良い育児環境をつくっていかうとする原動力になり得るのかは疑問である。また、育児教室は、本来教育の場であるわけで、これまでは保健師をはじめとする指導者が、講話や実演を通して、必要な知識・技術を身につけてもらうという形が多かった。それが、「交流」という形をとる場合、伊志嶺氏⁴⁾のいう「親自身が考えて決める、それを脇で支えることが大事」がどのように展開するのか。ちょっと間違えばおしゃべりの場に終わってしまい、母親たちの中にどんな学びがあるのか、それは指導する側のねらいとすることと同じなのかどうかは評価しにくい。

この調査は、育児教室に参加する母親の育児環境を知ることと、育児教室に参加することで何を得、どんなことが支えとなり母親の力になっているのか知ることが目的である。そして、他人との関わりを通じてより良い育児環境を自ら創り出そうとするのに、育児教室がどのような意味を持っているのか考える手だてにしたい。

対象地区は盛岡市と矢巾町とする。盛岡市は、県庁所在地として県内で最も多い人口を抱えている。近隣との交流も希薄化する都市型の生活では、直接的・間接的育児支援を、社会に頼ることは特別なことではない。育児教室は、その社会資源の一つとなる。矢巾町は、盛岡市のベットタウンとして宅地開発が急速に進んでいる。核家族が多い国道沿いの新しい住宅街と、広い田畑と昔ながらの町並みがそのまま

残る地域と二分される感がある。そういう町で、今なお1人1人に目が行き届く保健活動を展開する矢巾町と、地方都市としての盛岡市と比較する。また、盛岡市の育児教室は、これまでの実績から、今年度新たに2コース増設され、グループワークを組み入れながら全部で4コースの教室となった。一方矢巾町は、子どもの成長確認と学習を目的に、生後3ヶ月の時期に1回の教室である。参加回数を重ねることによる違い、プログラムの違いを比較する。

2. 仮説

昨年行った特殊実験調査⁵⁾で対象とした「すくすく学級」の状況から、友達をつくりたい、また会って話をしたいという要求が見られたことから、1) 育児教室に参加する母親の育児環境としての仮説は次のように考える。「母親の育児環境として、近隣・友人の育児ネットワークの少ない人がネットワークを広げるための出会いの場として育児教室を活用している」、ということである。公的機関の催し物であるため、特に県外出身者にとっては安心して出かけられる出会いの場となっているのではないかと思われる。

また、育児教室に参加することで何を得、どんなことが支えとなり母親の力になるかを考えようとする、やはり育児教室に参加する動機・目的が大きく影響してくるものと思われる。2) 「その動機の違いによって、1回の育児教室で得られる満足感も違ってくるだろう」と考える。少なくとも以下の3つのタイプは考えられる。

- ①知識を得たいという動機で参加した人は、交流よりも専門家からくわしく話を聞きたいと思う。
- ②友だちに会いたい、友だちをつくりたいという動機で参加した人は、専門家の話より参加者同士の交流に満足を求める。
- ③自分の育児に心配・不安を抱え参加する人は、知識を得ることよりも、自分の話を聞いてもらい、他の参加者が述べる心配事などが自分と同じと思えると、気持ちが落ち着き参加して良かったと思える。

そして、3) 「育児教室への参加回数が多くなるほど、当初の参加目的の違いはあっても、他のお母さんや子どもの様子に関心を寄せる『養護性』が広がり、お互いの状況を話し聞き合える『感情を共有』する気持ちが強くなる。そういう支え合い(相互作用)の中で、目先の育児の知識や技術というものばかりではなく、何事

も合理的には進まない育児に対する捕らえ方を見直し、何か困った時にどう対処すればよいか考えられる力につながっていく」のではないか、それが、育児教室の存在意義ではないかと考える。

3. 調査方法

調査は次の2段階の方法をとる。一つは、育児教室を企画運営する側の保健師からの聞き取り調査。もう一つは、育児教室に参加する母親への調査である。その内容、対象、調査日は以下の通りである。

(1) 育児教室の取り組みについての聞き取り調査

1) 内容

育児教室を取り組む上で、①保健師が、母親の育児状況をどう捉えているか、②事業のねらいとするものは何か、そして③育児教室の経過、④育児教室を通じて、母親自身がどのように変化してきているのか、を中心に聞き取り調査する。

2) 調査日及び対象者

盛岡市「すくすく学級」については、平成14年10月21日(月)、事業を担当している盛岡市保健センター母子保健係の小笠原富子保健師よりお聞きした。

矢巾町の育児教室については、平成14年10月9日(水)と11月13日(水)の両日、育児教室に参加観察しながら、生きがい推進課健康推進係の菊池由紀保健師をはじめ事業を担当している職員の方々よりお聞きした。

(2) 育児教室参加者に対する調査

1) 内容

育児教室に参加する母親に対しては、①参与観察、②質問紙調査(付録.1参照)、③参加者へのインタビューによって調査する。

質問紙は、教室に参加し、調査について説明をした上で参加者に配布し、1週間をめどに郵送にて回収する方法とした。

質問紙の構成は以下の通りである。

「フェイスシート」、「これまで利用した子育て支援」、「育児に困ったとき、相談

したり頼れる相手・悩みを話せる相手」、「育児教室参加の動機」、「育児教室に参加しての感想」、「母親が仕事をする事・子どもから離れて気分転換することに対する考え方」について聞く。

「育児に困ったとき、相談したり頼れる相手・悩みを話せる相手」、の「育児に困ったとき」の場面想定は、落合氏⁶⁾の育児援助の区分を参照し、「直接的育児援助＝育児労働の一部あるいは全部を代行する」、「情動的育児援助＝母親に育児知識を与える」、「情緒的支援＝母親の育児役割遂行を側面から支える」の各要素から調査者が考えて想定した。「相談したり頼れる相手」としては、望月氏⁷⁾の社会的ネットワークを参照し、「親族ネットワーク」「近隣ネットワーク」「友人ネットワーク」「社会機関」に含まれる対象を調査者が考えて選定した。

「育児教室参加の動機」は、昨年行った特殊実験調査における「すくすく学級」の聞き取り調査と参与観察の結果から考えた。「育児教室に参加しての感想」は、同様に昨年の「すくすく学級」の聞き取り調査と参与観察からと、第一章で述べた「親の発達」、さらにエンパワメントの評価指標⁸⁾から考えた。

参加者へのインタビューは、教室の運営に支障をきたさないように、教室終了時に行う。インタビューによって、母親にとって育児教室のどういうところが良いのか、質問紙調査の「育児教室に参加しての感想」を補う。

2) 調査日及び対象者

育児教室は、各コース、1か月ないし2か月に1回の開催である。

調査日及び対象者（参加者）数は、表 5-1-1 に示す通りである。矢巾町の育児教室参加者は9人で、盛岡市に比べると少ないが、矢巾町の月平均出産数の3分の1に当たる人数である。

表 5-1-1 育児教室参加者に対する調査期日及び対象者数

育児教室		調査日	対象者数(人)
盛岡市 「すくすく学級」	2 - 3か月コース	H14.11.20	34
	5 - 6か月コース	同 .11. 5	46
	8 - 10か月コース	同 .10.22	25
	1歳2か月コース	同 .11.26	15
矢巾町 育児教室		同 .11.13	9

3) 質問紙調査 回収結果

質問紙調査の回収結果を、表 5-1-2 に示す。2 - 3 か月コースを除き、50%以上の回収率であった。

表 5-1-2 質問紙調査 回収結果

育児教室		対象者数(人)	回収数(率%)
盛岡市 「すくすく学級」	2 - 3 か月コース	34	11 (32.4%)
	5 - 6 か月コース	46	31 (67.4%)
	8 - 10 か月コース	25	15 (60.0%)
	1歳2か月 コース	15	8 (53.3%)
矢巾町 育児教室		9	7 (77.8%)

(注)

- 1) 大澤扶佐子:2002 「岩手県の子育て支援担当者に対する意識調査」 未発表。
2002.6.7. 岩手県が主催して行われた「子育て支援担当者研修会」の受講者を対象(62人)に調査した。対象者の多くは、保健師、保育士で、相談員、福祉担当者も若干含まれた。
- 2) 活動報告としては、石井鈴子:1999、「ヘルスプロモーションとして捉えた子育てネットワーク支援事業の展開」、『生活教育』43(5)、へるす出版、22-26。高村寿子:2000、「ヘルスプロモーションとエンパワメントー今、保健婦に期待される役割をめぐって」、『生活教育』44(2)、へるす出版、7-12。高橋こずえ:2000、「グループアプローチで親の『生き抜く力』を支援する」、『保健婦雑誌』56(11)、医学書院、932-935。などがある。
- 3) 曾根智史:2000、「エンパワメント」、『保健婦雑誌』56(12)、医学書院、1039
- 4) 「はじめに」の章の2) 参照
- 5) 「はじめに」の章の1) 参照
- 6) 落合恵美子:1989。「育児援助と育児ネットワーク」、『22 回家族セミナー』、109-133
- 7) 望月嵩:2001、「社会的ネットワークと家族機能」、『生活教育』45(8)、へるす出版、64-67
- 8) 麻原きよみ:2000、「エンパワメントと保健活動ーエンパワメント概念を用いて保健活動を読み解く」、『保健婦雑誌』56(13)、医学書院、1125

第2節 育児教室の取り組み

—母子保健担当者からの聞き取り調査—

I. 盛岡市 「すくすく学級」

1. 「すくすく学級」の経緯

(1) はじまり

既に実施している事業に妊婦を対象にした「母親学級」があった。その「母親学級」を通じて友達ができたという参加者の中から、“産後も集まって子育てについて相談し合える場がほしい”という要望が出されていた。

それに対して、社会的にも、子育ての環境づくりや仲間づくりの大切さが叫ばれており、平成3年度、試行的に育児教室を行う。その年は、母親学級受講者と保健センター周辺地区の親子に通知して、生後2～3か月の子どもを持つ親を対象に年3回実施した。翌年の平成4年から正式に開始された。

対象は、初めて子育てをする母親とその子どもで、定員は30組とした。

(2) 「すくすく学級」のねらい

「すくすく学級」のねらいは大きく2つある。

ひとつは、「仲間づくり」である。教室での交流を通じて、一人でも友達の輪をつなげられるようにすること。それは、転入者が多いという盛岡市の特徴からで、転入したばかりの母親は、友達がほしい、同じ月齢の子どもと交流したいという希望が強いと把握している。

二つ目は、「子育てについての学習の場」である。仲間づくりだけではなく、一般に、離乳食の与え方をはじめ、育児の知識を得られるようにすることを目的としている。

(3) 「すくすく学級」の企画と参加人数の推移

当初、月齢2～3か月のみのコースであったが、参加者から“回数を多くしてほしい”という要望があり、表5-2-1に示すように、平成7年度、月齢6～7か月の

コースが抑えられた。(しかし、この月齢の時期は、子どもによってはハイハイをして動き回り、母親はそれに気を取られて集中できないという状況が見られたため、平成8年度から月齢5～6か月時に改められた。)

「すくすく学級」受講者受付は、会場の広さの関係もあり、30組の定員を超えるような場合は、申し込みを断ることもあった。それを、平成13年度からは回数を増やして毎月開催し、定員にこだわらず希望者全員受け入れるようになった。

毎月実施できるようになったことで、対象となる子どもの生年月日の区分けも、単純に生れ月毎となり、広報に掲載する際の表示が、見る側に解りやすく変化した。また、新生児訪問¹⁾などでも、友達もなく閉じこもりがち、育児にいろいろ不安を持っているといった母親には、母親を支援する一つ的手段として紹介している。

表 5-2-1 「すくすく学級」事業実績

年度	児の月齢	参加者数	実施回数
4	2～3か月	60組(120人)	4回
5	2～3か月	110組(220人)	4回
6	2～3か月	103組(206人)	5回
7	2～3か月	198組	9回
	6～7か月	142組	
8	2～3か月	186組	9回
	5～6か月	143組	
9	2～3か月	158組	6回
	5～6か月	149組	
10	2～3か月	157組	6回
	5～6か月	117組	
11	2～3か月	146組	6回
	5～6か月	113組	
12	2～3か月	161組	6回
	5～6か月	153組	
13	2～3か月	252組	12回
	5～6か月	193組	6回

出典：『保健概要平成13年度版』盛岡市保健センター

(4) 子育てサークルの育成

「すくすく学級」修了後、“またみんなと会って話がしたい”という要望にそう形で、子育てサークルを立ち上げている。サークルに対しては、「保健センター内の部屋の無料提供（子どもが2歳になるまで）」、「サークル内での学習や相談に応じる」、「サークルのリーダー研修をする」などして支援をしている。

現在 20 サークル程あり、保健センター内の利用も限界となってきた。

(5) 平成 14 年度の新たな取り組み

1) 地域を拠点とした仲間づくり =コースの増設と地域開催=

表 5-2-2 のように、今年度 8~10 か月（かみかみコース）と 1 歳 2 か月前後（ぱっくんコース）のコースが新設され、地区公民館を会場に実施することになった。

これには、子育てサークルが保健センターのみでなく、もっと身近なところで集まることができ、地域に根ざしたサークルを育成したいというねらいがあった。また、地区公民館で「子育て相談会」²⁾を行う中で、乳児期後期も母親同士集る場があればよいと、保健師自身が感じていたということもあった。

これまでの参加状況をみると、地区公民館を会場にしても、実際はその集居地域に住む人達だけでなく、市内全域から参加している。また、母親学級や「すくすく学級」初期のコースで知り合った仲間同士で参加するグループもある。そのため、プログラム中の「グループワーク」では、あえて仲良しグループがあっても分けて地区別にグループ編成し、身近な地域で交流できるきっかけをつくるようにしている。

2) プログラムの構成

今年度、新たに乳幼児虐待防止を念頭に入れた内容を 5-6 か月（もぐもぐコース）時に設けた。また、子育て支援センターの保育士を講師に、親子運動遊びを取り入れ、内容にメリハリをつけている。

表 5-2-2 平成 14 年度「すくすく学級」プログラム

児の月齢 (コース名)	内 容	担 当 者	回数 (年)	会 場
2～3か月 (ごっくん コース)	①講話「赤ちゃんとふれあう大切さ」	保健師	12 回	盛岡市保健 センター
	②グループワーク「子育て情報交換 ーどんなことでも話してみようー」	保健師		
	③離乳食初期についてのお話と試食	栄養士		
	⑤個別相談・体重測定	保健師		
5～6か月 (もぐもぐ コース)	①参加親子の自己紹介	保健師	6 回	盛岡市保健 センター
	②講話「事故から子どもを守るために」	保健師		
	③講話「赤ちゃんのこころとからだ (虐待予防)」	スクールカ ウンセラー		
	④運動遊び	保育士		
	⑤離乳食中期についてのお話と試食	栄養士		
	⑥個別相談・体重測定	保健師		
8～10 か月 (かみかみ コース) *新設	①グループワーク「子育て情報交換 ー子育ての楽しさと大変さー」	保健師	6 回	西部公民館 都南公民館 中央公民館
	②運動遊び	保育士		
	③離乳食後期についてのお話と試食	栄養士		
	④個別相談・体重測定	保健師		
1歳2か月 前後 (ぱっくん コース) *新設	①参加親子の自己紹介	保健師	6 回	西部公民館 都南公民館 中央公民館
	②講話「歯磨き上手にできるかな」	歯科衛生士		
	③運動遊び	保育士		
	④おやつについてのお話と試食	栄養士		
	⑤個別相談	保健師 栄養士 保育士		

注：2-3か月(ごっくんコース)と5-6か月(もぐもぐコース)は、従来通り、初めて子育てをする母親が対象だが、新設された2コースは、そういう制限はない。

3) 離乳食初期の調理見学会

2-3か月の「ごっくんコース」に参加した人の中で希望者には、翌月の同コースに用意される離乳食の調理場面の見学会も用意されている。これは、“実際に作り方を見てみたい”という参加者からの要望で実施されることになったもので、毎回20組ほど参加している。

母親は、見学することによって、離乳食作りのイメージを持てる人も多いのだが、参加者の中には、離乳食作りの勉強より仲間と会えることを楽しみにして来る人もいる。逆に、見学会は、「すくすく学級」のように交流する場ではないので、交流は苦手という人にとっては参加しやすいという面もある。

4) 母親学級に“先輩ママさん”登場

「すくすく学級」に参加した母親の中から、母親学級に5・6人出てもらい、先輩ママさんとして体験談などを話してもらっている。学級に参加してしる妊婦さん達にとっては、出産・育児で役に立ったグッズなど具体的なことが聞けるので好評である。また、実際に赤ちゃんを抱いてみて、“かわいい”“結構重い”など感じたままに言葉にし、赤ちゃんを迎える心の準備をしている。

2. 保健師が「すくすく学級」で気を配っていること

保健師が「すくすく学級」で気を配っていることとして次のようなことが語られた。

まず1つは、保健師ら専門家が一方的に話をするよりも、「母親同士お互いに体験を聞き合ったり、これでいいのか確認したりすることを通して、母親達がお互いに励まし合い、支え合っていくことを大事にしている」ということである。

2つ目は、スタッフも、最新の子育てグッズなどの情報を得るなど、「スタッフと参加者がお互いに学び合うという意識で行っている」ということ。

3つ目は、講話では必要最低限のことしか言えないし、グループワークでも、話題を絞らざるを得ない。「もっとくわしいことや具体的な相談は、終了後の個別相談や、通常の電話相談・子育て相談会の活用に結びつけるようにしている」ということである。こうして複数の事業で支援すると共に、母親にも、「すくすく学級」に参加したことをきっかけに、他の事業にも目が向くようにと考えている。

4つ目は、「保健師と顔なじみになってもらうこと」。盛岡市の乳児健診は、全て医療機関で個別に受診するようにしているため、家庭訪問や子育て相談会で会うことがなければ、1歳6か月健診まで子どもとその母親とは接する機会がまずない。その1歳6か月健診では、“保健師からいろいろ言われた”とあまり良い印象を持たない人もいる。「すくすく学級」を一つのきっかけとして、その後の相談・指導がお互いにスムーズにできるようにしたいと考えている。

最後に、子育てサークルづくりについては、最初からそれを目的にしているかのように、保健師の方から誘導すると嫌がられる。そのため“また会って話したい”という参加者の気持ちを汲むようなかたちで組織するようにしている」ということであった。

3. 保健師がみた参加者の変化

保健師がみた参加者の変化として、次のようなことが語られた。

参加した母親自身の変化としては、一人でも二人でも友だちができると明るくなる、生き生きしてくる、ということである。お互い同じ月齢の子どもを持つ者同士、気持ちを共有し、気軽にいろんな事を聞けるのが良いと思う。1回目はお互いよそよそしいが、3回目になると、終了後お互い誘い合ってお茶を飲みに行くという姿も見られる。

新生児訪問をしたとき、“育児なんかもうイヤ！”と乳児虐待の可能性も考えられた母親に対して「すくすく学級」を紹介した。その母親は、「すくすく学級」だけでなく、その後の子育てサークルにも参加し、明るく育児をするようになった。“サークルで自分が支えられた”と話している。この事例から、「すくすく学級」の大切さを感じる。参加しようかどうか迷っていた人は、申し込み期限の最後の方に電話してくる。そういう人の方が育児に悩んでいるということもあるので、定員に達したからといって断らないで、受け入れる方が良いと思う。

「すくすく学級」に参加する母親の層の変化としては、障害を持っている母親(右手の不自由な人、全盲の人、車イスを使用している人)の参加が見られるようになってきた。そういう点でポピュラーな事業になってきたと考えている。

しかし、若年産婦の参加はほとんどない。子育てについて学ぶ意欲、周囲を見ようとする意欲が少ないようだ。母親学級にも参加しない。

4. 「すくすく学級」と他の支援との関係

保健師同士の連携を行っている。「すくすく学級」の事業担当保健師と、家庭訪問などをする受け持ち地区の担当保健師は、気になる母親についてお互いに情報を交換して、それぞれのケアに生かしている。

また、子育て支援センターとの関係では、「すくすく学級」に、親子運動遊びを通して、母親に乳幼児の理解を進めてもらう目的で、とりょう保育園の保育士に講師として参加してもらっている。この事が、保健センターと子育て支援センター相互の事業理解にも役だっている。

5. 保健師が考える今後の課題

1つには、「すくすく学級」のプログラムの構成がある。

交流と離乳食の学習を分けて開催した方がよいかどうか、若年産婦に対して、既存の教室に誘うか、別に（たとえば）「ヤンママ教室」を企画したらよいかなど検討しなければならない。

2つ目は、地域での子育てサークル活動についてである。

子育てサークルが地区公民館で活動する場合、保健センターで活動するように無料とはならない。そういう活動費の面が懸念される。

また、保健センター内の部屋を利用したサークル活動は、子どもが2歳になるまでを期限としている。その後の活動は、子育て支援センターの「こんにちはママさん講座」³⁾（対象：1歳3か月から2歳）から結成される子育てサークルにつなげるということも考えている。

3つ目は、地域に「親と子のたまり場」のようなものがないかということである。子育てサークルがもっと地域で集まることができればよいが、集まれる場所が少ない。サークルが苦手という人でも、いつでも気軽に親子が集れまる場所があればよい。

Ⅱ. 矢巾町 育児教室

1. 育児教室の経緯

矢巾町の育児教室の事業開始は、平成 14 年 10 月である（従って、本研究の調査日が、矢巾町にとっては初めての教室開催日であった）。月 1 回の開催で、対象月齢は 3 か月である。

育児教室は、次のような経緯で始められることになった。

矢巾町は盛岡市同様、乳児健診は医療機関に委託し、個別健診のかたちをとっているものの、3-4 か月健診だけは集団健診とし、さわやかハウス（盛岡市の保健センターに相当）で月 1 回行っていた。そこで保健師は町内全ての子どもとその（母）親に接し、子どもの成長・発達の状況や、家庭での育児の様子を把握し、その場の保健指導はもちろんのこと、その後のケアにも結びつけていた。

これまで、マタニティひろば、乳幼児育児相談、育児サークル、家庭訪問等は実施していたが、育児教室は行っていなかった。しかし、3-4 か月健診を担当していた医師が今年、年度途中で担当を降りることになり、代りの医師の確保もできず、他の月齢の健診と同様、個別健診の体制をとることになった。

そのことが、育児教室を始めるきっかけとなった。今までのように母親達と接する機会を持ち続けたいと、本来集団健診を行う時間の枠（毎月第 2 水曜日）に、急ぎよ 10 月から育児教室を組み入れることになった。次年度は、健診の体制がどうなるかによって、育児教室を継続するかどうかは流動的である。

2. 育児教室のねらい

矢巾町の育児教室の目的は、子どもの成長確認と、子育て情報を得る学習である。

また、教室を通じて、地域にも子育ての応援者がいることなど、地元の情報を知ってもらいたいと考えている。そして顔と顔がつながった支援を展開したいと考えている。

3. 内容

育児教室のプログラムは、表 5-2-3 の通りである。

成長確認は、保健師と母親が 1 対 1 で個別行う。保健師は、身体計測の結果や首すわりの状態など、成長・発達の状況を母親と一緒にみていく。また、母親の心配事や相談事にも答え、必要事項を個人カルテとなる母子健康カードに記録していく。

「赤ちゃんをもっと知ってケアも覚えよう」の講話の内容は、子どもの成長の目安、子どもの観察のポイント、3 か月の子どもに多い相談内容、親子のふれあい・遊びなどである。その中に、参加者の自己紹介も折り混ぜている。

担当者は、表 5-2-3 に記載されている他に、矢巾町子育て支援センター（徳田保育園内）の 2 人の保育士が入っている。2 人は、バブバブ講座が始まるまでの間、母親と赤ちゃんの様子を見ながら、教室の雰囲気になじめるよう話し相手になっている。また講座が始まると、母親が講座に集中できるよう、赤ちゃんがぐずれば代わりにあやすなどして、親子に寄り添いながら、教室がスムーズに運営できるようにサポートしている。また、講座の中で、子育て支援センターの活動の紹介もしている。

表 5-2-3 育児教室プログラム

対象月齢	内 容	担 当 者	会 場
3 ヶ月	身体計測(身長・体重・頭囲・胸囲)	保健師・看護師	さわやか ハウス
	成長確認・育児相談	保健師・看護師	
	バブバブ講座 1)「赤ちゃんをもっと知ってケアも 覚えよう」 2)離乳食のお話と試食	保健師 栄養士	

教室終了後のミーティングでは、スタッフがそれぞれの立場で観察したことを出し合いながら、参加者全員の状況を確認する。そこで問題のあるケースがあれば、意見を出し合い援助方針を決める。

4. 他の事業との関係

育児教室に参加した人の状況をきちんと記録に残し、健診その他のケアにつなげている。

子育て支援センターの事業に対しては、事業を立ち上げるとき保健師が入っていた。現在は、保健師が支援センターの事業運営に直接携わることはないが、保健事業と子育て支援センターの事業は、お互い協力しながら取り組んでいる。保健師は、支援センターの行事、例えば親子遠足で救護を担当することもある。また、家庭訪問等で気になるケースには、親と子が交流する「ぽかぽか広場」⁴⁾や「たけのこ広場」など、支援センターの事業の紹介もしている。それらの広場は、「さわやかハウス」も会場の一つとなっている。子育て支援センターからは、育児教室だけでなく、乳幼児健診にも来てもらい、育児教室と同様に母親と子どもの相手や、全体で遊びを組み入れたりしてもらっている。

1 回目の育児教室で支援センターの事業の紹介をしたところ、「参加した母親のほとんどが、『ぽかぽか広場』に来てくれた」ということが、支援センターから保健師の方にも情報が入っていた。業務と情報の連携が日常的にスムーズに行われている。

5. 保健師がみる最近の母親の傾向と、保健活動の問題

保健師は、最近の母親の様子と、保健活動の問題を次のように語っていた。

最近では、結婚しても親とは同居せず、同じ町内に住みながら若い夫婦はアパートに住む「町内別居」という家庭が増えてきた（育児教室の参加者にも、「同居しているが、6畳の部屋しか与えられないので、アパートに引っ越そうかと思っている」と漏らしていた母親がいた）。

保健活動としては、子どもが生まれた家庭には、すべて家庭訪問しようとする目標を持っているが、事前に約束を取って訪問しても居留守を使われることもある。転入者に対して、これまでの妊娠や子どもの成長発達の経過を聞こうとすると、極端に拒まれることもあった。また、“盛岡市だと、休日の母親学級もあったのに・・・”などといわれ、盛岡市と同じものを求められる。矢巾町として独自でやっているも

のに対しては、理解されにくい。

このように、母親とスムーズに関係をとることが難しくなってきた。その上、平成13年度から、出生届けを住民課で行うようになったため、出生時の状況が早期に把握しにくくなった。また、小児科の医師は健診を個別健診にしたい方向で、体制としても、以前に比べ母子との関係がとりにくくなる傾向にある。

Ⅲ. 考察

盛岡市と矢巾町の育児教室は、それぞれ経緯が異なり、内容の面でも、月齢に沿った学習のポイントは同じであるけれども、母親同士の交流の有る無しは大きく違っている。しかし、育児教室を通じて、他の支援にもつなげたいという点は共通していた。最近の母親に対して、両市町とも、健診等で保健師と母親との関わりがスムーズにいかないことがあるということは経験している。そして、母親への援助は、どこまですることがよいのかという方向性への迷いも感じている。

その中で、盛岡市の「すくすく学級」は、平成4年度開始以来、参加者からの要望に応えるかたちで、内容・実施回数とも拡大してきた。「保健師が気を配っていること」にあった、母親同士が励まし合い、支え合うことを大事にしているからこそ、母親達からの意見がまとまって出されやすい、そういう環境を産むのではないかと考える。母親が参加できる事業が増えることは、母親にとっては、それだけ生活の楽しみや社会とのつながりを得られる機会となる。

社会とつながることと言えば、今年度から先輩ママさんとして母親学級に参加してもらっているのだが、このことは、社会とのつながりを広げつつ、また新たな意味を持つと考える。母親がこれまでの経験を語ることは、母親から妊婦さん達への一方向的な援助にとどまるものではない。母親学級受講者からのいろんな反応によって、母親にとっても、自信や意欲につながっていくという相互作用が期待できる。それをマネジメントした保健師もまた手応えを感じ、今後の計画に生かそうとするだろう。スタッフと参加者がお互いに学び合う姿勢や協働の意識を持つことは、お互いに持っている力を発揮するということにつながっているのではないかと考える。

しかし、参加者からの要望にどれだけ応えればよいかという問題はある。「離乳

食の調理見学会」は、「実際の作り方を見てみたい」という要望で始まったのだが、参加者は企画の意図した目的だけで来ているわけではなかった。参加者にとっては実質的な意味（実際の調理に役立てる）と間接的な意味（参加者との交流）があることが伺える。実質的な意味は、直接事業の評価として扱われやすい。しかし、間接的な意味をどう補らえるかは、母親をどう見るかにも関わっている点で、事業を運営したり評価したりする上で大事なポイントになる。

保健師からみた参加者の変化としては、母親同士つながり合うことによって、子育てをする母親自身が支えられ、生き生きしてくるということだった。人口 28 万人を抱える都市において、全ての子どもと母親に保健師が関わることは困難である。個々の母親と保健師の関係が縦の関係だとすれば、「すくすく学級」は、母親同士の横の関係をつくる場である。交流を軸に母親同士の横の関係を築くことによって、限界のある縦の関係を補完するというのは、一つの援助スタイルではないかと思う。このスタイルがまた、援助は必要だが干渉や押しつけをあまり好まない現代の母親達の感覚にマッチしているのではないかと考える。

その点、矢巾町は保健師とすべての母親との縦のつながり持つことは、目標として挙げてでも実行できそうな人口の規模である。ただし、以前のように、保健師というだけで住民から 100%受け入れられるということではなくなってきている点で、都市的な要素が強くなってきた。

矢巾町の育児教室に参加した母親たちは、盛岡市と違い、育児教室に友達と申し合わせて参加するとか、隣同士言葉を掛け合うという人はほとんどなく、子育て支援センターの保育士が間に入ってくれなければ間が持たないというくらいおとなしかった。今は、教室も始まったばかりだし、小規模の人数だから、個別の縦のつながりが基本になるのかもしれないが、保健師と子育て支援センターの日頃の協同した取り組みを通して、母親同士横につながっていくという可能性はある。

(注)

- 1) **新生児訪問**：新生児期に行う家庭訪問による保健指導。盛岡市の乳児健診は、集団健診の方法ではなく、全て医療機関に委託し個別健診のかたちをとっているため、保健師が直接母親と接する機会が少ない。その対応として新生児訪問に力を入れている。
- 2) **子育て相談**：週1回、市保健センター並びに都南分所において、身体計測をしながら、子どもの発育・発達・栄養相談等に応じている。その他に、西部公民館や地区活動センターでも、月1回から年数回、同様の相談会を行っている。
- 3) **「こんにちはママさん講座」**：盛岡市子育て支援センター(拠点施設はとりよう保育園)が行っている事業。1歳3か月から2歳半までの子どもとその母親が対象で、子どもの遊びや健康についての学習・保育所体験入園などを含み、5回で1コースの教室となっている。修了後に子育てサークルがつくられる。
- 4) **「ぽかぽか広場」**：矢巾町子育て支援センター(徳田保育園内)が行っている事業。0歳から1歳頃までの乳児とその親を対象に、赤ちゃん体操・リズム遊び・手遊びなどを行う。さわやかハウスを会場に月1回から2回行っている。その他に、親子が参加できる事業として、「たけのこ広場」(対象は2歳から入園前)、「プチたけ広場」(対象は1歳から2歳頃)がある。また、おじいちゃん・おばあちゃんも一緒に遊ぶ「まごかでのいっぷく」(対象は0歳から入園前)、絵本の読み聞かせを中心とする「うさちゃんの部屋」(対象は1歳から入園前)も毎月開かれている。

第3節 育児教室参加者に対する質問紙調査と 参与観察から得られた結果

I. 質問紙調査 基礎集計結果

育児教室参加者に対する質問紙調査の基礎集計結果について述べる。
データは、付録2として掲載しているので、そちらを参照されたい。

1. 参加者のプロフィール

盛岡市の「すくすく学級」並びに矢巾町の育児教室に参加して、質問紙調査に回答した母親達のプロフィールは、次の通りであった。

(1) 年齢層

対象者の年齢階級別参加者数を図 5-3-1 に示す。圧倒的に 30～34 歳と 25～29 歳が多く、両階級合わせると、72 人回答した中の約 80%を占める。

母の年齢階級別出生数の割合と比べると、30 歳代の参加者が多く、24 歳以下の参加者が少ない。

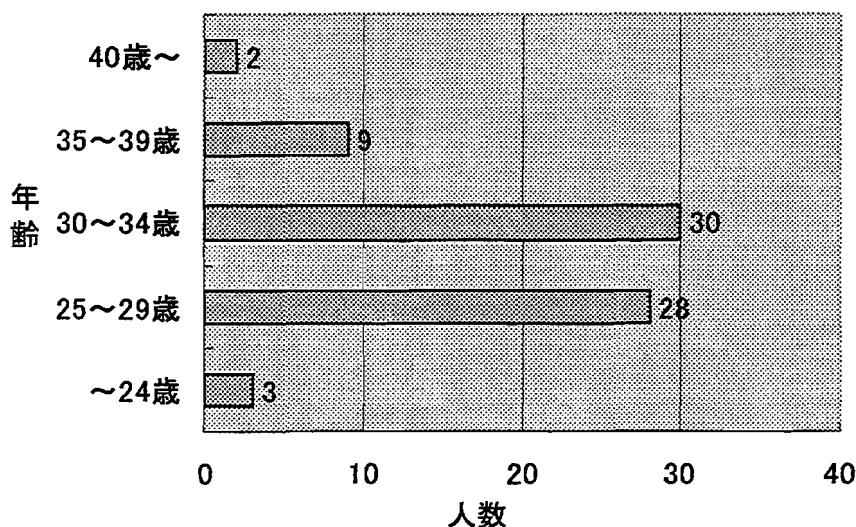


図5-3-1 参加者の年齢階級別人数

(2) 出身地

出身地を「市(町)内」、「市(町)内以外の県内」(以後「県内」)、「県外」に分け、その割合を見ると、「県内」がおよそ50%で最も多く、次いで、「県外」が30%、「市(町)内」が20%であった(表5-3-1参照)。

矢巾町の育児教室では、調査日の参加者に町内出身者はいなかった。

表 5-3-1 出身地別人数

出身地	「すくすく学級」				矢巾	合計	割合(%)
	2-3M	5-6M	8-10M	1Y2M			
市(町)内	1	5	5	3	0	14	19.4
市(町)内以外の県内	5	18	4	3	5	35	48.6
県外	5	8	6	2	2	23	31.9
合計	11	31	15	8	7	72	100.0

(3) 現住所在住年数

在住年数は、表5-3-2に示すように、全体の半数が1年未満から1年であった。数ヶ月から6か月という人も11人おり、妊娠中あるいは出産後に現在の場所に移り住むというケースも多いことが伺える。

表 5-3-2 現住所在住年数

在住年数	人数	割合(%)
1年未満	19	26.4
1年～	22	30.6
2年～	8	11.1
3年～	9	12.5
4年～	4	5.6
5～9年	6	8.3
10年以上	4	5.6
合計	72	100.0

(4) 卒業学校

参加者の最終卒業学校は、表 5-3-3 の通りである。中学卒業者はなく、全体の約半数が「短大・専門学校」の卒業であった。国勢調査における有配偶者の最終卒業学校の割合は、「高校」卒業者がおよそ 60%、「短大・高専・専門学校」が 20%、「大学・大学院」が 10%程度であるから、岩手県の有配偶者全体から見ると、盛岡市及び矢巾町の育児教室に参加する母親は、高校卒業者が少なく、短大・専門学校、及び大学・大学院の卒業者が多く含まれる。

表 5-3-3 参加者の学歴

卒業学校	人数	割合(%)
中学校	0	0.0
高校	21	29.2
短大・専門学校	34	47.2
大学・大学院	15	20.8
その他	2	2.8
合計	72	100.0

(5) 職業の有無

職業を有していたのは、全体の 4 分の 1 の 17 人だった。岩手県の年齢階級別就業率を見ると、20～30 歳代では 60～70%就業しているから、育児教室参加者は、職業を持っていない人の割合が多い。

2. 家庭の状況

(1) 子どもの数

72 件中、子どもの数が「1人」という回答が 67 件、「2人」が 5 件と、ほとんどが「1人」であった。育児教室の募集対象で「初めて子どもを持つ母親」としてしているのは、「すくすく学級」の 2-3 か月コースと 5-6 か月コースだけであるが、1 人目の子どもの育児のために参加する母親が多い。

(2) 家族構成

全体で見ると、72件中「核家族」は61件と圧倒的に多い。特に盛岡市は、国勢調査における核家族世帯割合の80.5%（6歳未満親族のいる一般家庭）より多い。それに対して矢巾町は、「核家族」と「夫方（祖）父母と同居」世帯が、ほぼ同じ人数であった。（表5-3-4参照）

表 5-3-4 家族構成

家族構成	件数			割合(%)		
	盛岡市 「すくすく学級」	矢巾町	合計	盛岡市 「すくすく学級」	矢巾町	合計
核家族	57	4	61	87.7	57.1	84.7
妻方(祖)父母と同居	1	0	1	1.5	0.0	1.4
夫方(祖)父母と同居	7	3	10	10.8	42.9	13.9
合計	65	7	72	100.0	100.0	100.0

(3) 平日の夫の帰宅時間

夫の帰宅時間は、表5-3-5に示す通り、「pm7～9時」「pm9～11時」が多い。「すくすく学級」の2-3か月コースと8-10コース及び矢巾町（3ヶ月）の教室の参加者の夫は、午後9時以降の帰宅の方が多く、夫は子どもとほとんど接することができないことが伺える。特に3ヶ月だと、まだ夜中の授乳も必要であり、教室に参加した母親の多くは、昼夜、休む暇がないということになる。中には、「不規則な上、週の半分以上が出張で不在」というケースもあった。

表 5-3-5 平日における夫の帰宅時間

夫の帰宅時間	「すくすく学級」				矢巾	合計	割合(%)
	2-3M	5-6M	8-10M	1Y2M			
pm5～7時	2	4	1	2	0	9	12.5
pm7～9時	1	16	6	3	2	28	38.9
pm9～11時	7	6	5	3	4	25	34.7
pm11時以降	0	2	2	0	1	5	6.9
不規則	1	2	1	0	0	4	5.6
その他	0	1	0	0	0	1	1.4
合計	11	31	15	8	7	72	100.0

(4) 両親の就業状況

参加者の両親は表 5-3-6 に示すように、現在何らかの仕事を持って働いている人が多い。育児を手助けすることの多い実(義)母も「パート・アルバイト」の割合が多いものの、39人(54%)が仕事を持っている。「専業主婦」あるいは「退職し家にいる」人は、実父11人(15%)、義父16人(22%)、実母27人、義母28人(38%)であった。

表 5-3-6 両親の就業状況

就業状況	件数				割合(%)			
	実父	実母	義父	義母	実父	実母	義父	義母
外でフルタイム勤務	36	8	28	10	50.0	11.1	38.9	13.9
パート・アルバイト	3	19	6	17	4.2	26.4	8.3	23.6
自営業・農業	12	12	13	12	16.7	16.7	18.1	16.7
専業主婦	0	22	0	26	0.0	30.6	0.0	36.1
退職し家にいる	11	5	16	2	15.3	6.9	22.2	2.8
社会活動で忙しい	0	2	0	1	0.0	2.8	0.0	1.4
家族の病気の介護	0	1	0	0	0.0	1.4	0.0	0.0
自身が病気療養中	1	0	0	1	1.4	0.0	0.0	1.4
死別	5	2	6	3	6.9	2.8	8.3	4.2
その他	3	0	2	0	4.2	0.0	2.8	0.0
NA	1	1	1	0	1.4	1.4	1.4	0.0
合計	72	72	72	72	100.0	100.0	100.0	100.0

(5) 住宅の状況

住まいが「アパート」という回答が29人で最も多く、次いで「マンション」15人、「一戸建て」(持ち家)14人という結果だった。アパート・マンションという集合住宅に居住する人が全体の60%を占めている。

矢巾町の「一戸建て」あるいは「借家」を回答した人は、3(4)世代同居者であった。

表 5-4-7 住宅の状況

住宅の状況	「すくすく学級」				矢巾	合計	割合(%)
	2-3M	5-6M	8-10M	1Y2M			
一戸建て(持ち家)	1	7	2	1	3	14	19.4
借家	1	1	2	1	1	6	8.3
アパート	4	14	5	3	3	29	40.3
マンション	3	5	5	2	0	15	20.8
社宅	2	3	1	1	0	7	9.7
その他	0	1	0	0	0	1	1.4
合計	11	31	15	8	7	72	100.0

3. 育児観

(1) 家庭か仕事か

子どもが3歳以下の場合、母親は家庭で子どもの世話をする方が良いと考える人(A)は、72人中37人であった。それに対し、仕事は自分らしくいきるためにも必要だと考える人(B)は29人であった。月齢別に見ると、生まれて間もない「すくすく学級」2-3か月コースと矢巾町の参加者は「家庭で」と考える傾向があるが、それ以外は両者に差がなくなる(表5-3-8参照)。

表 5-3-8 育児観(家庭か仕事か)

家庭(A)か仕事か(B)	「すくすく学級」				矢巾 (3M)	合計	割合(%)
	2-3M	5-6M	8-10M	1Y2M			
(どちらかと言えば)A	6	15	8	3	5	37	51.4
(どちらかと言えば)B	3	14	7	3	2	29	40.3
その他	2	2	0	2	0	6	8.3
合計	11	31	15	8	7	72	100.0

しかし、生後3か月で「今はA。可愛い赤ちゃんとなるべく一緒にいたいと思う」と回答した人が、質問紙の最後の余白に次のように記載していた。

「私の母は、私が4-5歳の頃仕事していたので、私もずっと仕事するつもりでしたが、会社がつぶれてしまい、専業主婦になってしまいました。だけど、今、赤ちゃんと主人との暮らしがとても楽しくて、あんなに仕事仕事って働いていたけど、こんな幸せがあったのかとしみじみ思います。今は、赤ちゃんをきちんと育てることをとても楽しんで、またそうできることを感謝しています。でも、女性が仕事にもどしやすい社会ならもっといいな—とすごく思います。」

この場合、「家庭か仕事か」と型にはめて考えるのではなく、子育てと仕事の垣根を低くして、「子どもと一緒にいたい時にいれる」「仕事をしたいと思った時にできる」両者がいつでも柔軟に選択できることを望んでいる。他にも同様の気持ちを持ちつつ、仕方なく一方に回答した人もいるかもしれない。

また、「その他」に回答した人は月齢に関係なく、「子どもから見ればA、大人から見ればB」「今一番の悩みです。子どものためには？自分のためには？…と」「母親が生き生きしていればどちらでも良い」といった内容で、両者の間でどちらに価値をおくということができない状況が見られる。

(2) 母親が気分転換するための託児…家族か外部か

1歳未満の子どもを持つ母親が、美容院やショッピングで気分転換したいと思った時、託児ルームなどを気軽に活用し、気分転換をすぐにはかる方が良いと考えるか(A)、家族の誰かが子どもを見てくれる体制が取れる時に出かける方が望ましいと考えるか(B)では、A(どちらかと言えばも含み)が17人だったのに対し、B(どちらかと言えばも含み)が54人と圧倒的にBが多かった。これは、月齢とは関係なかった。

4. 子育て支援と環境

(1) 親族以外で、これまで受けた子育て支援

育児教室を除き、子育て支援の利用で最も多かったのは、表 5-3-9 の通り、「保健師(助産師)による家庭訪問」であった。集計結果は37件であったが、矢巾町では、対象者7人全員に訪問しているのに対して、回答が3件であったということから、実際はもう少し多くの方が家庭訪問を受けていることが予想される。「家庭訪問」と「保健センターで行う子育て相談」の利用を合わせると55人となり、こ

れによって、少なくとも 75%の母親は、保健師（助産師）と関わっていることになる。

「ベビーシッター」や「近所のお宅に子どもを預ける」「保育所で行う一時保育」といった親族以外の人に託児を依頼するケースは、極わずかであった。

育児教室以外利用したことがない人は、14人いた。

表 5-3-9 これまでに受けた子育て支援

子育て支援	「すくすく学級」				矢巾 (n=7)	合計 (n=72)	割合(%)	
	2-3M (n=11)	5-6M (n=31)	8-10M (n=15)	1Y2M (n=8)				
育児教室	①1回目	11	0	5	2	7	25	34.7
	②2回目	-	31	0	1	-	32	44.4
	③3回目	-	-	10	0	-	10	13.9
	④4回目	-	-	-	4	-	4	5.6
	NA	0	0	0	1	0	1	1.4
ベビーシッター	0	1	0	0	0	0	1	1.4
近所のお宅	0	1	0	1	1	1	3	4.2
子育てサークル	0	5	3	1	0	0	9	12.5
電話相談	1	9	3	2	0	0	15	20.8
家庭訪問	5	18	7	4	3	3	37	51.4
子育て相談	2	5	2	5	4	4	18	25.0
保育所で一時保育	0	0	0	0	0	0	0	0.0
保育所の開放	0	0	3	0	0	0	3	4.2
育児教室以外ない	(6)	(5)	(2)	(0)	(1)	(1)	(14)	(19.4)
その他	①近隣など	0	0	3	1	0	4	5.6
	②行政	0	1	0	0	0	1	1.4
合計	19	71	36	22	15	15	163	

(2) 子育てに関して相談したり頼れる相手

図5-3-2は、子育てに関して6つの場合を想定して、相談あるいは頼れる相手として認識している人を全て挙げてもらった結果である。

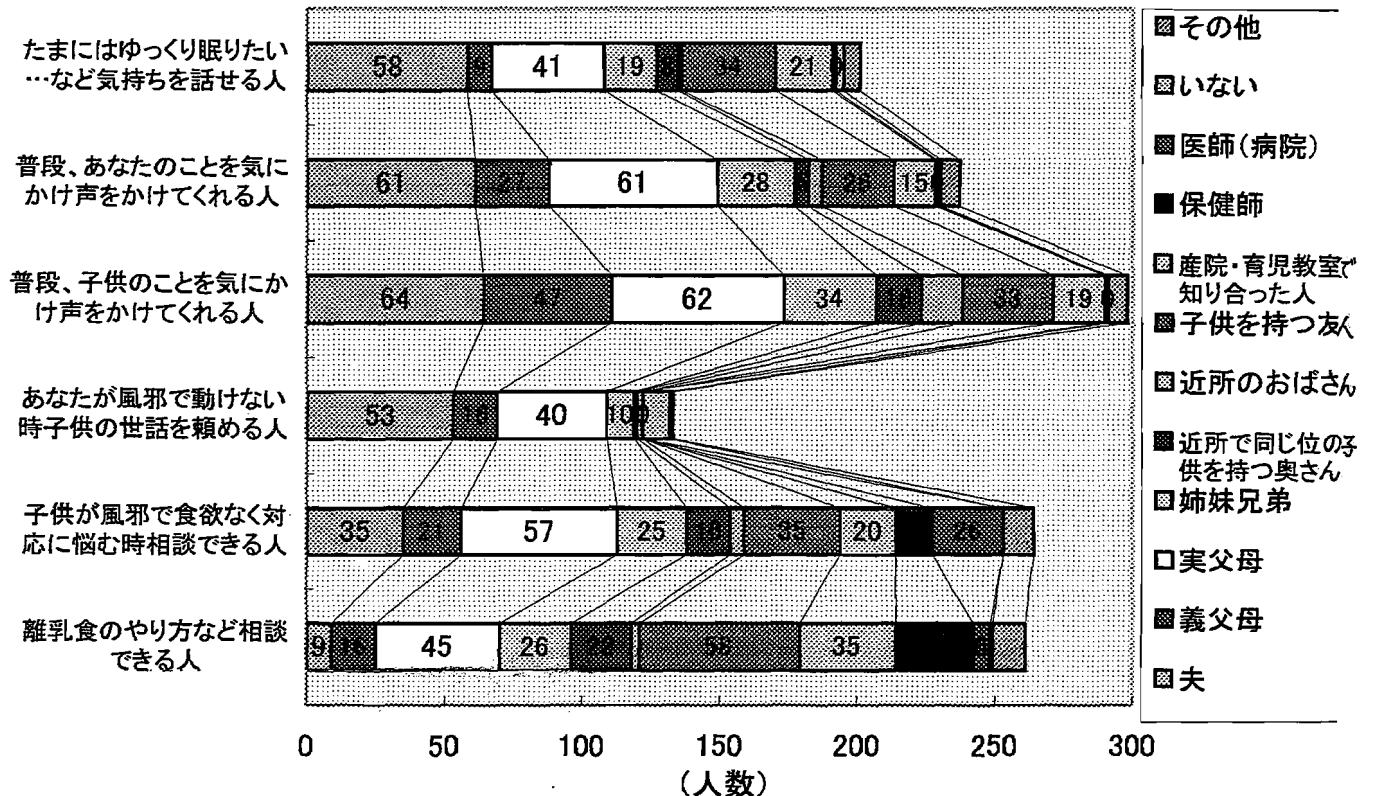


図5-3-2 育児に関して相談したり頼れる人

想定場面毎に見てみる。「離乳食のやり方」と「子供が風邪などで食欲がなく対応に悩む」場合の相談は、情動的育児援助を求めるものである。「離乳食のやり方」では、親族以外にも相談する人が3分の2を占め、その中でも、「子供を持つ友人」が最も多かった。その他にも「産院・育児教室で知り合った人」「近所で同じ位の子供を持つ奥さん」といった、近隣・友人関係で現在体験を共にしている人を相談相手とする傾向が強い。又、社会的ネットワークである「保健師」を挙げている人も多かった。離乳食の相談には、夫はほとんど当てにされていない。相談できる人として挙げられた平均人数は、3.6人であった。子供の病気に関した場合は、「実父母」「夫」を中心とする親族、そして「子供を持つ友人」「医師(病院)」に相談できるという人が多かった。平均の相談相手は3.7人だった。

育児の代行である直接的育児援助を求める「自分が風邪などで動けない時、子供

の世話を頼める人」は、「夫」や「実父母」を中心にほぼ親族に限られていた。6つの場面の中で最も頼れる人が少なく、平均の相談相手は1.7人で、「いない」と回答した人も10人いた。

残り3つは、情緒的育児援助に関係する。その中で、「子供のことを気にかけてくれる人」が最も多く、想定した6場面の中でも最も多かった。気にかけてくれると認識している人も、「夫」他親族をはじめ、近隣・友人関係と広い範囲にわたり、平均4.1人であった。「子供のこと」より「自分自身のことを気にかけてくれる人」は少なくなり（平均3.3人）、『たまにはゆっくり眠りたい…』という様な気持ちを話せる人はさらに少なくなる（平均2.8人）。自分自身の気持ちを話せる人の一番は「夫」である。その他に「実父母」「子供を持つ友人」を挙げている人が多いが、「いない」と言う人も3人いた。

全体を通して、どの場合にも「実父母」を頼りにする傾向が強い。「夫」は直接的育児援助と情緒的育児援助で頼りにされ、「義父母」は情緒的育児援助の中の子供に関わることに於いて援助者として認識されていた。友人関係は、離乳食に関する相談のような、子供の生活に関する情動的援助者、母親の気持ちを聞いてもらえる情緒的援助者として認識されていた。

5. 育児教室に関して

(1) 参加の動機

参加の動機は表5-3-10に示す。盛岡市は育児についての学習と交流、矢巾町は子供の成長確認と育児についての学習が主な目的となっているので、参加者側の心づもりも多少違ってくる。しかし、両教室とも、ほぼ全員が「正しい知識を得てこれからの育児に役立てる」という動機を持っていることは共通していた。

違いは、盛岡市の場合、内容に交流が含まれていることもあって、「他の人はどんな育児をしているか情報収集したい」「自分自身の友だちをつくりたかった」が多かった。矢巾町の場合は、「保健師（助産師）に紹介されて」という人が半数いたのに対し、「この機会に、友だちに会いたかったから」という人は全くいなかった。

表 5-3-10 育児教室参加の動機

動機	盛岡市「すくすく学級」		矢巾町 育児教室	
	回答件数 (n=65)	割合(%)	回答件数 (n=7)	割合(%)
正しい知識を得る	64	98.5	7	100.0
友だちに会いたい	27	41.5	0	0.0
保健師から紹介	19	29.2	4	57.1
他の人の育児を知る	58	89.2	4	57.1
自分の友だちづくり	55	84.6	3	42.9
育児に自信が持てない	33	50.8	3	42.9
その他	8	12.3	3	42.9

さらに、動機の強さで見ると、表 5-3-11 の通りである。これは、動機としてあった人のその強さ（おかれた「おはじき」の数）を平均したものである。盛岡市は、「保健師の紹介」「育児に自信が持てない」以外、3点前後でほぼ同じくらいの強さである。それに対して矢巾町は、「正しい知識を得る」と「その他」が強い。「その他」の内容は、「子供の成長確認、育児相談(7点)」、「離乳食のことを聞きたかった(4点)」他であった。離乳食のことは、「正しい知識を得る」にも関係するので、矢巾町は主に「正しい知識を得る」動機で参加する人が多いと言える。

表 5-3-11 育児教室参加の動機の強さ

動機の強さ	盛岡市「すくすく学級」		矢巾町 育児教室	
	総得点 (n=65)	平均得点	総得点 (n=7)	平均得点
正しい知識を得る	191	3.0	34	4.9
友だちに会いたい	65	2.4	0	-
保健師から紹介	35	1.8	5	1.3
他の人の育児を知る	150	2.6	9	2.3
自分の友だちづくり	131	2.4	3	1.0
育児に自信が持てない	54	1.6	6	2.0
その他	25	3.1	13	4.3

(2) 育児教室に参加した感想

育児教室に参加した感想を、コース毎にプロフィール分析した結果が、図 5-3-3 である。これを見ると、どのコースであっても「当てはまる」という回答が多かったのは、「1 保健師（栄養士）の話は参考になった」「4 他の母親や子どもの様子が見られて良かった」「6 会場で聞いた育児情報も参考になった」「15 また育児に関する催し物があったら出かけようと思う」であった。「12 もっと育児について情報交換できる時間がほしい」も、「すくすく学級」2-3 か月コースを除いては多かった。

コースによって感じ方が大きく違っていたのは、「10 初対面の参加者とも話をした」だった。参加者同士、育児の情報交換をするグループワークのある「すくすく学級」の 2-3 か月コースと 8-10 か月コースは「当てはまる」とした人が多かったのに対し、講義が中心の 1 歳 2 か月コース・矢巾の教室は「当てはまらない」が多かった。「すくすく学級」の 5-6 か月コースは、グループワークはないのだが、2-3 か月コースから皆継続して参加しているので、お互いあまり緊張しないで話せるということはあるだろう。「7 他の参加者の悩み・不満などを聞き、共感できるものがあった」も同様に、グループワークのある・なしが影響していると思われる。

プログラムの違いではなく、月齢の違いがでてるのは、「9 自分のことは話しづらい」「13 何かあれば相談できる人がいると思える」であった。月齢が小さいほど、自分のことが話しづらく、「相談できる人がいると思える」に「当てはまる」という人が少ない。

「その他の感想」（自由記載）の記載は、27件あった。その内容を見てみる。

A：「盛岡に来たばかり（1か月）で、知人がいないので、同じ位の子どもを持つお母さん方に会うことができ、とても良かった。離乳食のことを知りたくて参加したが、それよりも、育児のことを広く、皆さんと話せたことが、とても励みになった。子どもと行ける所が少ないので、外に出る良いきっかけにもなった。」（「すくすく学級」2-3Mコース）

B：「時間が足りないような気がしたので、回数を増やすなどをして、もう少し満足感がある教室にしてほしい」（「すくすく学級」2-3Mコース）

C：「・ごっくんコースで知り合ったお母さんと子どものことで色々情報交換が出来て良かった。・もう少し前回のようにグループでの話し合いの場もあれば良かったかもしれないと感じた。」（「すくすく学級」5-6Mコース）

D：「いくつかのグループができてしまっているので、それにとらわれずに色々な方と話ができればいいと思う」（「すくすく学級」5-6Mコース）

E：「乳児の親子一緒にグループワークは初体験でしたが、…なかなか大変なものです（賑やかで、大きな声を出し合い、ハイハイの子を抱きかかえながら…）。が、月齢が同じくらいの子どもたちの中での我が子を客観的に見ることもでき、大変楽しく過ごさせていただきました。

※ 離乳食のメニューは大変参考になりました（硬さ・大きさ・味付けなど…）」（「すくすく学級」8-10Mコース）

F：「今回、帰宅途中のバスで、一緒になって、初めて近所のママ（「すくすく学級」の参加者）と友だちになれた。すくすく学級のグループ分けでは、自分にとっては異なる地域の方々と一緒だった。友だちをつくりたい気持ちはあるが、近くの人でないと、その場限りのおしゃべりに終わってしまいがち…」（「すくすく学級」8-10Mコース）

G：「近所に同じ年位の子どもが少ないので、すくすく学級の様なものがたくさんあるとうれしいのですが、サークルはちょっといやなので…」（「すくすく学級」1Y2Mコース）

H：「以前のすくすく学級では、グループでの意見交換があったが、今回はなく、あまりお母さん方との交流が少なかったのが残念。グループ分けもいつも地区ごとに分けられるが、確かに近所だといいますが、いろいろな地区の人とも仲良くなりたいたい。」（「すくすく学級」1Y2M コース）

I：「3か月の子供だけでなく、6か月、12か月…とその時その時また違った相談や悩みがあると思うので、こういう会をもっともっと開いてほしい。なごやかな雰囲気でもよかったです。」（矢巾）

この他にも、「リフレッシュできた」、「子供の遊び（の紹介）はもっと家でできるものが良い」（「すくすく学級」5-6M コース）、「贅沢を言えば、お昼も出してもらってもう少しお母さん達と話ができる時間があればよかった」（「すくすく学級」1Y2M コース）などある。

共通するのは、母親同士の交流が、育児の情報交換や母親のリフレッシュのために有意義なものになっている、ということである。プログラムにグループワークが入っていればいたで、なければなおさら“もっと交流したい”という要望があげられている。

交流によって、情報が得られるだけでなく母親同士のつながりもできるのだが、「すくすく学級」の参加回数を重ねると、新たなつながり（Dさん、Hさん）、確実なつながり（Fさん）を求めるようである。

子どもに関して共通するのは、具体的（Eさん離乳食）で普段の生活に活用可能（子どもの遊び）な知識・方法が得られれば良いということであった。

6. 基礎集計結果を概観して

育児教室に参加するのは、市（町）外出身で、30歳前後の比較的学歴が高く、仕事を持っていない女性が多かった。家庭環境としては、核家族で現在の所に住んで1年前後、半数の夫は帰宅時間が遅く育児の直接的な手助けは、あまり期待できない状況である（妻の体調が悪くて動けない場合は別として）。

育児に関する相談者は、複数持ち、悩みや心配事の内容によって相談相手が存在していた。夫は情報的援助以外相談相手として認識されていた。どのような場合で

も、相談相手として挙げられていたのは実父母だった。実父はもちろん実母も半数は何らかの仕事を持っていたし、市（町）外が多いにも関わらず、子どもの世話の代行も義父母以上に頼りにしていた。それでも、「たまにはゆっくり眠りたい…というような気持ちを話せる相手」というのは、自分の親でも多少話しにくいようである。

育児のネットワークの多さと出身地や家庭環境の関係、また、ネットワークの多さと育児教室に参加する動機などの関係は次の分析で述べる。

母親と保健師の関係を見てみると、母親の70%以上が「家庭訪問」や「子育て相談」で保健師らと関わっているが、母親にとって保健師は、離乳食で困ったときや子どもの体調が思わしくないときなど、子どもに何かあった時の相談相手（主に情動的援助）と考えられている。一方保健師は、情動的援助だけでなく、「あなた自身のことを気にしていますよ」というメッセージを返し情動的援助も含んでいるつもりだと思うが、母親にはその受け止めは薄いようだ。育児教室は、お互い、学習（＝情動的援助）と母親同士の交流などによる情動的援助の両方を意識している。それが、月齢やプログラムの内容によって母親の受け止め方に違いが出てくるのか次に分析してみる。

また、母親の育児観については、子どもの月齢がまだ2－3ヶ月であれば、仕事より子育て優先と考える人が多いが、その後は「家庭での子育て」と「仕事を持つこと」どちらを大事にするかは半分に分かれる。「子どものためと自分自身のためと考えると揺らぐ」と言う回答もあったが、「家庭」か「仕事か」と敢えて分けて考える必要もなく、その垣根を下げて個人の選択においてどちらにも可能になるよう願う人も多いのかもしれない。母親のリフレッシュは、子どもを見てくれる家族の体制が取れるまで待ち、身内以外に子どもを預ける傾向は低い。

Ⅱ. 質問紙調査 分析

1. 参加者の育児環境

(1) 近隣の関係

表 5-3-12 は、対象者の住んでいる環境として、近所に同じくらいの子どもの持つ母親がいるかどうかを、現在地居住年数別でみてみたものである。

盛岡市の 65 人は、居住年数とは関係なく、近所に同じくらいの子どもの持つ母親が「いる。会えば子どもの話もする」という人が全体の約半数、「いるが、あまり交流がない」は、全体の 4 分の 1 の割合であった。「わからない」は、「1 年未満」から「1 年」に多いが、それ以上住んでいても、「わからない」という人も 4 人いた。

矢巾町の対象者 7 人の内、居住年数「1 年未満」と「1 年」を合わせた 5 人は、全て「わからない」と回答している。5 人の中には、三世帯同居の者が全員（3 人）入っているが、近隣に意識が向く状態なのか、近隣の情報が家族を通して入ってこないのかどうか検討する必要がある。

近隣の関係では、「同じくらいの子どもの持つ母親」以外にも交流はあると思うが、今回の調査では質問項目としてはあげなかった。

表 5-3-12 居住年数別にみた近隣に同じくらいの子どもの持つ母親の存在

現在地	いる。会えば子どもの話もする		いるが、あまり交流がない		いない		わからない		その他		合計	
	盛岡市	矢巾町	盛岡市	矢巾町	盛岡市	矢巾町	盛岡市	矢巾町	盛岡市	矢巾町	盛岡市	矢巾町
1年未満	7	0	4	0	0	0	5	3	0	0	16	3
1年～	11	0	4	0	1	0	3	2	1	0	20	2
2年～	4	0	3	0	0	0	1	0	0	0	8	0
3年～	4	0	2	0	1	0	1	0	1	0	9	0
4年～	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	3	1
5～9年	2	1	2	0	0	0	1	0	0	0	5	1
10年以上	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	4	0
合計	31	1	17	1	3	0	12	5	2	0	65	7

(2) 育児について相談できる人の状況

次に、育児をする上で、相談したり頼れる人について見てみる。

以下に示す図は、対象者全体の何%の人が「相談できる」としてあげているのか見たものである。

ただし、「近所で同じ位の子どもを持つ奥さん」と「近所のおばさん」は「近所」に、「子ども持つ友人」「産院で知り合った人」「育児教室で知り合った人」は「友人関係」、「保健師」「医師」は「保健医療」と再カテゴリー化して集計した。

1) 出身地別にみた相談者の状況

「離乳食のやり方が解らない場合やメニューに困った場合相談できる人」について見てみると、図 5-3-4 に示すように、どこの出身であっても、「夫」が最も少ない。また、父母や姉妹兄弟も含めた親族関係より、その他の「友人関係」や「保健医療」などといった、近隣や友人、社会の育児ネットワークをあげている人が多い。

出身地による違いとしては、県外出身者は、他の出身よりも、「近所」の人を相談者にあげる人が多い(47.8%)。県内出身者は、相談できる人の数が他より少ない。その中でも、特に「夫」「保健医療」が少ない。しかし、「姉妹兄弟」は45.7%と他の出身者より多かった。市内出身者は、全体的に相談できる人の割合が多い。

離乳食に関して「相談できる」として挙げられた人数の平均は、県外出身者が3.2人、県内出身者が3.0人、市内出身者が3.5人であった。

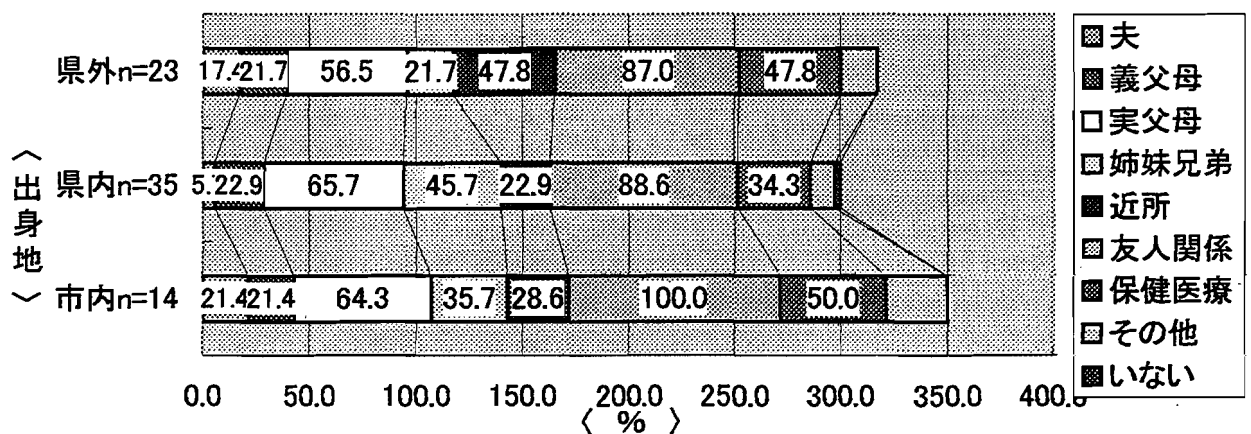


図5-3-4 出身地別 離乳食に関する相談者

次に、「母親自身が風邪などで動けなくなった時、子どもの世話を頼める人」について見てみる。

図 5-3-5 の通り、県外出身者は、頼める人として考えられる人が少ない。特に、「実父母」が 17% と極端に少なく、「姉妹兄弟」は 0% である。また、「いない」とする人も、34.8% あった。平均相談者数は、他の出身者が 2.0 人なのに対して、県外出身者は 1.0 人であった。

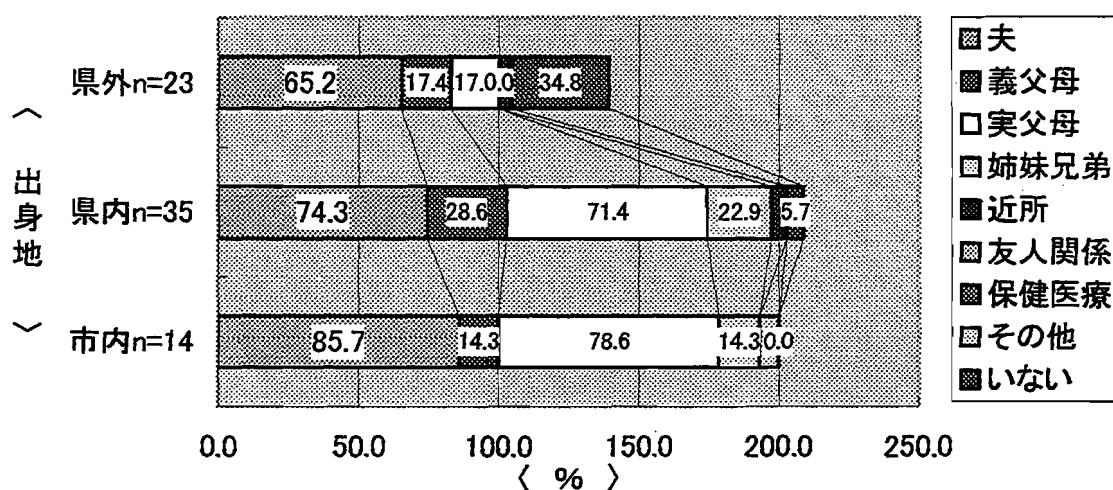


図5-3-5 出身地別 子どもの世話をを頼める人

「普段、子どもの事を気にかけて声をかけてくれる人」として挙げた人の平均は、「県外」が 4.0 人、「県内」が 3.4 人、「市内」が 4.2 人で、県内出身者が少ない。

「声をかけてくれる人」としてあげられた人の割合を見てみると、図 5-3-6 に示す通りとなる。他の出身者のほとんどの人が「夫」を挙げていたのに対し、「県内」は、「夫」が 80%、「近所」も他と比べ約半数である。

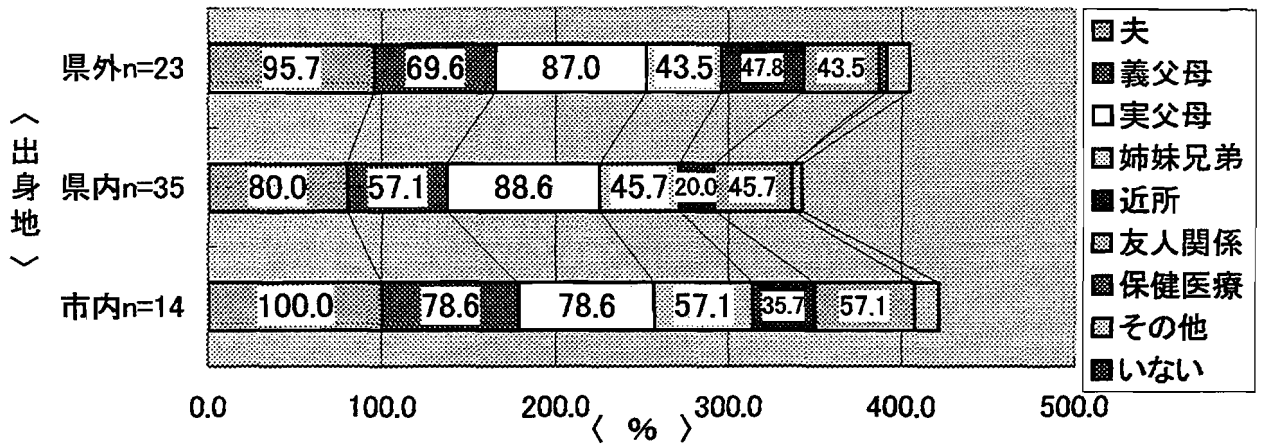


図5-3-6 子どものことを気にかけて声をかけてくれる人

「たまにはゆっくり眠りたい…という様な気持ちを話せる人」について見ると、図5-3-7に示すように、相談者の数では出身で差はほとんどない。しかし、その相手としては、「県内」は「夫」をはじめ、「実父母」「姉妹兄弟」と親族を挙げる人が多く、親族関係だけで全体の80%になる。一方「県外」と「市内」は、親族関係の割合は全体の60%程度である。県外出身者は、「実父母」が他より少ない分、「夫」を挙げる人が多い。親族以外では、「近所」の人を挙げる人が30%と他の出身者より多い。ただし、「いない」という人も13%いた。市内出身者は、「夫」よりも「友人関係」が多くなっている(85%)。

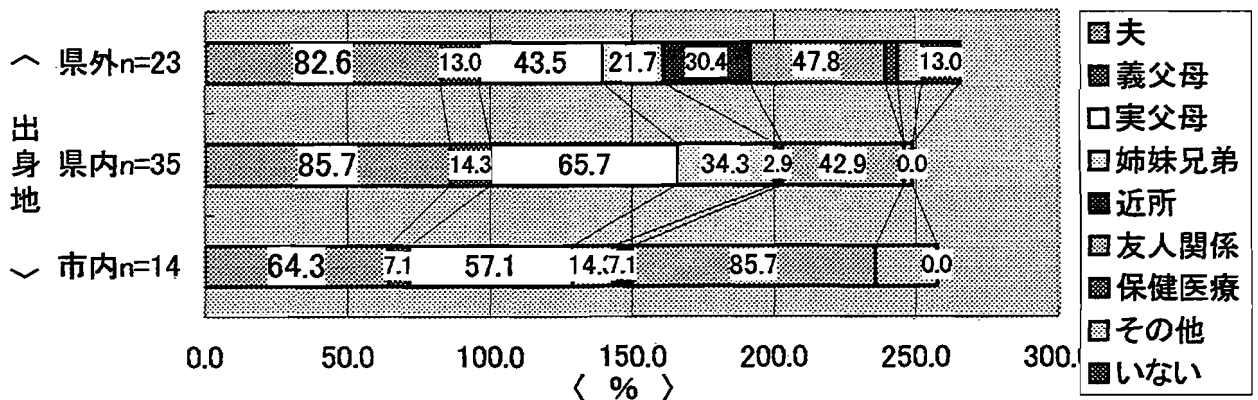


図5-3-7 出身地別 母親自身の気持ちを話せる人

以上、出身地別にどのような場合だれに相談できているかを見てみた。

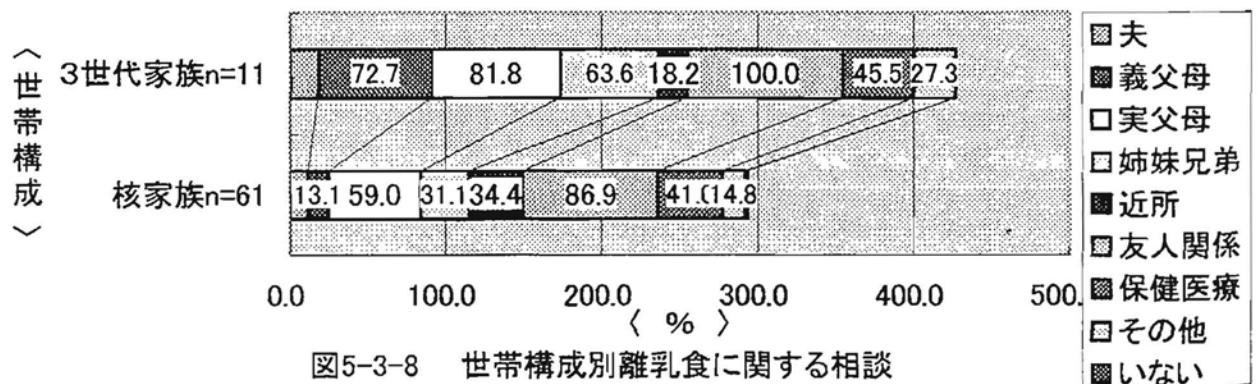
県外出身者は、母親に代わって「子どもの世話を頼める人」という直接的な育児支援については平均1人と少ない。しかし、「離乳食に関する相談」や「子どもの事を気にかけて声をかけてくれる人」といった情動的支援、情緒的支援については、他の出身者よりも近隣ネットワークを得て、県内出身者よりも相談できると思える人の数が多い。それに対し、県内出身者は、他の出身者より相談できる人の数が少ない。相談は、親族に頼る傾向が強く、「実父母」「姉妹兄弟」を当てにしている。市内出身者は、どの場合でも相談できると思える人の数が、他の出身者より多く、親族はもちろん友人関係を挙げる人が多い。しかし、情緒的支援の中でも、「母親自身の気持ちを話せる人」の数は、出身地に関係がなかった。

2) 世帯構成別にみた相談者の状況

出身別と同様に、まず、「離乳食に関する相談者」で見てみる。

相談できるとして挙げられた数は、「核家族」より「3世代家族」の方が多い。挙げられた人数の平均は、「3世代家族」が4.3人なのに対し、「核家族」は、2.9人であった。その対象者は、図5-3-8に示すように、3世代家族の場合、同居している「義父母」はもちろん、その他にも「実父母」「姉妹兄弟」といった親族、「友人関係」「保健医療」と全般に核家族より多くなっている。

「核家族」の方が多かったのは、「近所」の人だけであった。



「母親が風邪などで動けなくなった時、子どもの世話を頼める人」も同様に、「3世代家族」の方が「頼める人」として挙げて人の数が多かった。ただその人数の平均は「3世代家族」が2.4人、「核家族」1.6人と、「離乳食に関する相談」よりは少なくなる。

ところが、「普段、子どものことを気にして声をかけてくれる人」では、逆に「3世代家族」より「核家族」の方が、挙げる人の数がわずかだが多くなる。平均で、核家族が3.8人、3世代家族が3.6人である。

さらに、「たまにはゆっくり眠りたい…という様な気持ちを話せる人」になると、図5-3-9に示すようにその差は大きくなる。平均で、「3世代家族」が2.0人、「核家族」が2.6人である。

3世代家族は、「離乳食の相談」の時には72%の人が相談できるとしていた「義父母」が9%に下がり、「核家族」より少なくなっている。「夫」以外の相談者も「核家族」より少なく、「いない」という人もわずか(9%)ではあるがいる。

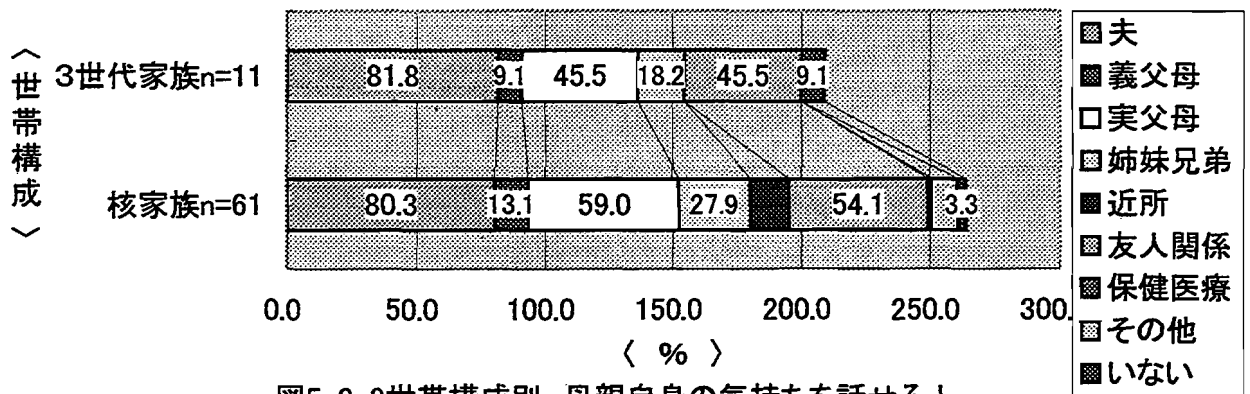


図5-3-9 世帯構成別 母親自身の気持ちを話せる人

以上のことより、世帯構成別の相談者の特徴は、3世代家族の場合、「離乳食」や「子どもの病気」などの情動的支援、「子どもの世話を頼む」などの直接的な支援には相談者を多く持っているが、情緒的な支援では、むしろ核家族の方が支えてくれると思える人が多い。

また、核家族は、3世代家族より「近所」の人を頼りにしている。矢巾町の3世代家族3人が、「近所に同じくらいの子どもの持つ母親がいるか」の設問で、全員「わからない」と回答していることから、核家族の方が近隣ネットワークを広げる条件があると言える。

2. 育児教室に参加した動機

(1) 出身地別に見た参加動機

育児教室の目的・内容が盛岡市と矢巾町で違うため、市町別に、育児教室に参加した動機をしてみる。

1) 盛岡市の「すくすく学級」に参加した人の動機

「おはじき」型で回答した件数を表 5-3-13 に示す。

「正しい知識を得る」「他の人の育児を知る」には、出身地に関係なくほとんどの人が回答している。また、「自分の友だちづくり」も回答者が多いが、特に県内・県外出身者の回答が多い。全体の 50%前後の人が「育児に自信が持てない」を動機として回答していた。

表 5-3-13 盛岡市における出身地別参加の動機 回答件数

参加動機	市内n=14	県内n=30	県外n=21	総数n=65
正しい知識を得る	14(100.0)	29(96.7)	21(100.0)	64(98.5)
友だちに会いたい	5(35.7)	12(40.0)	10(47.6)	27(41.5)
保健師から紹介	3(21.4)	8(26.7)	8(38.1)	19(29.2)
他の人の育児を知る	13(92.9)	26(86.7)	19(90.5)	58(89.2)
自分の友だちづくり	10(71.4)	27(90.0)	18(85.7)	55(84.6)
育児に自信が持てない	8(57.1)	15(50.0)	10(47.6)	33(50.8)
その他	2(14.3)	1(3.3)	5(23.8)	8(12.3)

()は、回答件数に対する出身地別対象者数の割合。単位:%

次に、動機の強さ（「おはじき」の数）について見てみる。「おはじき」の数を合計した得点の割合を図 5-3-10 に示す。

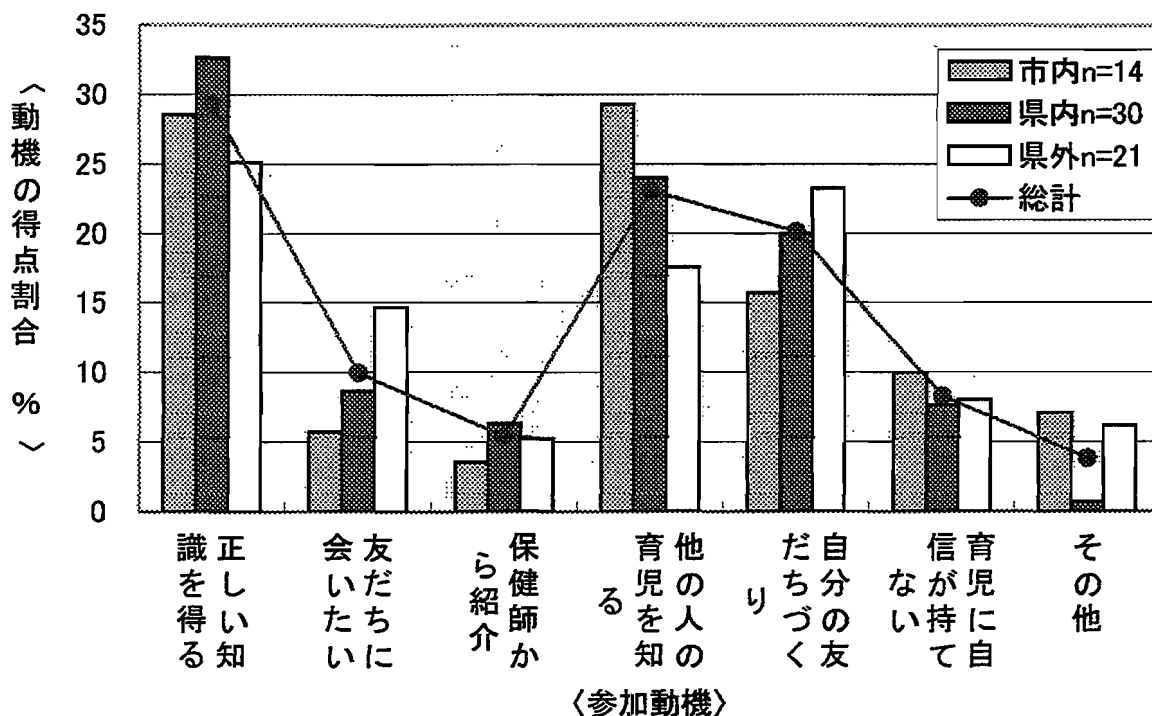


図5-3-10 出身地別参加動機の得点割合(盛岡市)

動機の有無であれば表 5-3-13 の通り、出身に関係なく「正しい知識を得る」「他の人の育児を知る」「自分の友だちづくり」が同じように高くでる。しかし、その重きの置き方になると、出身地によって異なる。

市内出身者の動機は、「正しい知識」と「他の人の育児を知る」が主である。「他の人の育児を知る」は、他の出身者と比較して最も多い割合となっている。県内出身者は、「正しい知識を得る」という動機が最も強く、次いで「他の人の育児を知る」である。それに対して、県外出身者の動機はいろいろあるが、主には「正しい知識を得る」「自分の友だちづくり」である。「友だちに会いたい」は、他の出身者より得点割合が多い。これは、担当者の見方と一致していた。

「友だちに会いたい」「自分の友だちづくり」は、出身地が「市内」から遠くなるほど、得点割合が多くなる。

2) 矢巾町の育児教室

矢巾町の場合は、盛岡市と育児教室と違い、母親同士の交流は特になく、成長確

認と学習が目的・内容となっている。そのため、育児教室に参加する動機の強さ（「おはじき」の数を合計）は、表 5-3-14 の通り、「正しい知識を得る」以外は動機としては弱くなる。その中で、（対象者が少ないのだが）県外出身者は、「正しい知識」と同程度に、「他の人の育児を知る」「育児に自信が持てない」を挙げていた。

表 5-3-14 矢巾町における出身地別参加の動機の強さ

得点	町内n=0	県内n=5	県外n=2	合計n=7
正しい知識を得る	—	29	5	34
友だちに会いたい	—	0	0	0
保健師から紹介	—	4	1	5
他の人の育児を知る	—	5	4	9
自分の友だちづくり	—	1	2	3
育児に自信が持てない	—	2	4	6
その他	—	9	4	13

以上のことから、育児教室参加の動機を出身地別に見ると、市内出身者は、「正しい知識を得る」と共に、「他の人の育児を知る」ことが主になる。それに加え、「自分の友だちづくり」を動機とするのが、県内・県外出身者である。

（2）近隣の関係から見た、参加の動機

「近所に同じくらいの年齢の子どもを持つ母親がいるか」どうかと、育児教室の参加の動機をみる。

動機の強さの割合を、図 5-3-11 に示す。同じくらいの子どもを持つ母親が「いる。会えば子どもの話もする」という人は、「正しい知識を得る」とことと「他の人の育児を知る」が主な動機である。これはちょうど、出身地別の「市内出身者」の動機の強さと同じ傾向である。「いるがあまり交流がない」という人は、「正しい知識を得る」ことに重きをおいているものの、その他にも「他の育児を知る」「自分の友だちづくり」「育児に自信が持てない」と、分散している。「いない・わからない」という人は、「正しい知識を得る」ことがまず重要で、次いで「自分の友だちづくり」となっている。

近所に同じくらいの年齢の子どもを持つ母親がいても、「交流がない」あるいは「いない、わからない」という人は、自分の友だちづくりもさることながら、育児

について情報を得る機会が、「いる。会えば子どもの話もする」という人よりも少ない分、「正しい知識を得る」ことが動機として強まるものとする。

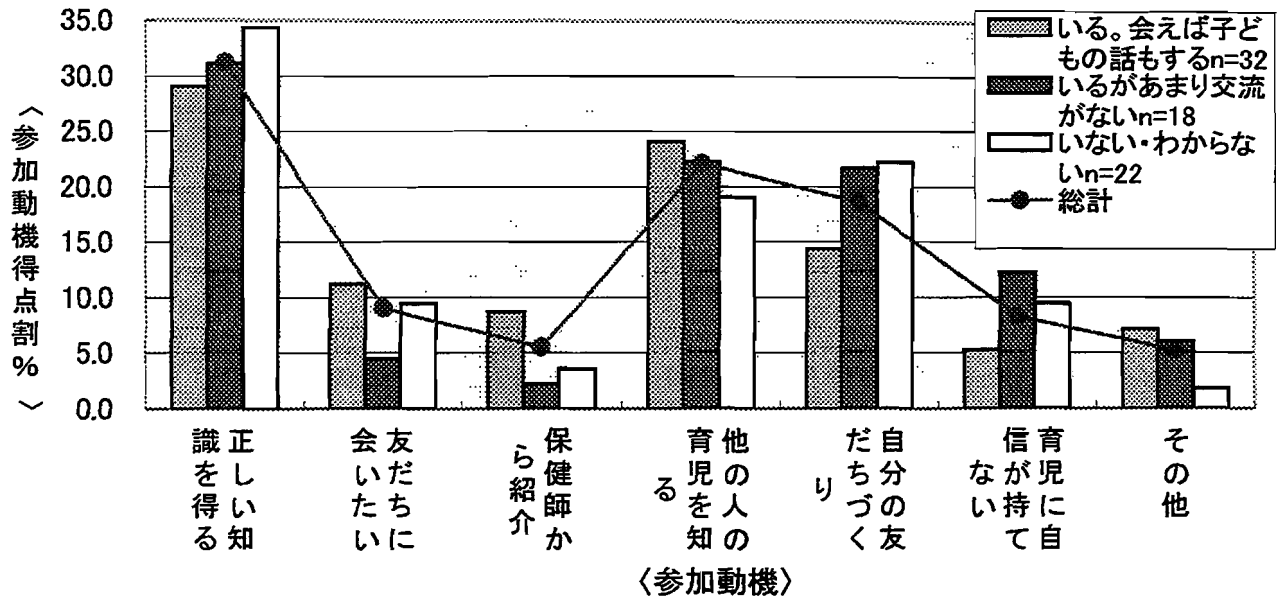


図5-3-11 近隣の関係別 参加動機得点割合

(3) 参加の動機の強さと相談者の数

参加した動機の項目の中で、最も高い得点（「おはじき」のおいた数が最も多い）をつけた項目と、育児をする上での相談者数の平均を見てみた。それを示したのが表 5-3-15 である。

（尚、「保健師に紹介されて」「育児に自信が持てない」「その他」を一番の動機に挙げた人は、1人ないし2人だけだったので、比較の対象にはあげなかった。）

「友だちに会いたい」という動機が最も強かった人は、他の動機を持った人より合計の平均相談者数が多かった。特に、「子どもの事を気にかけてくれる人」「母親自身の気持ちを話せる人」が多い。それに対し、「自分の友だちづくり」の動機が最も強かった人は、相談者がいないわけでない。しかし、「子どもの世話を頼める人」「自分自身のことを気にかけてくれる人」「母親自身の気持ちを話せる人」という、自分自身に関わる様な場面において支えてくれる人が他の動機を持っている人より少ないため、全体の相談者も他よりは少なくなっている。

表 5-3-15 動機の強さと育児についての平均相談者数との関係 (単位:人)

相談場面	動機	正しい知識を得る n=20	友だちに会いたい n=5	他の人の育児を見る n=6	自分の友だちづくり n=11
1	離乳食に関して相談できる人	3.4	3.8	3.7	3.4
2	子どもの体調が悪くなった場合相談できる人	3.7	3.6	3.0	3.2
3	自分が体調悪い時、子どもの世話を頼める人	2.0	1.6	1.8	1.3
4	子どもの事を気にかけて声をかけてくれる人	4.1	5.0	3.3	3.5
5	自分自身の事を気にかけて声をかけてくれる人	3.3	3.2	3.0	2.7
6	自分自身の気持ちを話せる人	2.6	3.2	2.7	2.3
合計		18.9	20.4	17.5	16.8

3. 育児教室に参加した感想

(1) 動機の強さと参加した感想の関係

各動機項目について、最も得点を高くつけた人ごとに、育児教室に参加した感想を得点化し、平均を取ったのが図 5-3-12 である。

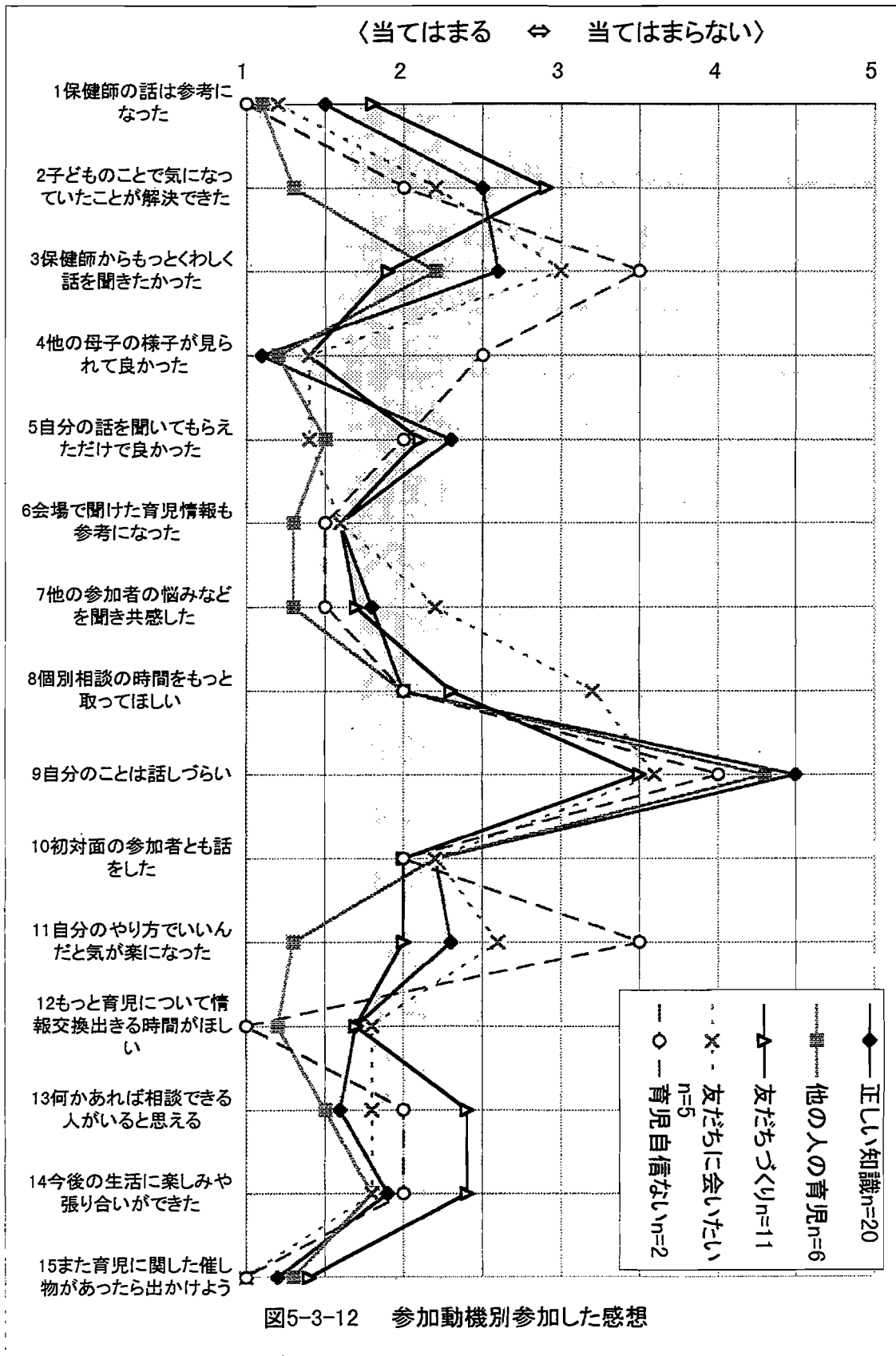


図5-12から、「正しい知識を得る」という動機が最も強かった人の参加した感想をみる。知識を得たいと思ってきても、「3.保健師からもっとくわしく話を聞きたかった」と思えた人が、他の動機の人より多いというわけではない。むしろ「4.他の母子の様子が見られて良かった」、「9.自分のことは話しづらい（とは思わない）」、「10.初対面の人とも話をした」と参加者の方に目が向いている。

「他の人の育児を知る」という動機が最も強かった人は、感想の項目全般にわたって「当てはまる」としている。特に「1.保健師の話は参考になった」「2.子どものことで気になっていたことが解決できた」「6.会場で聞いた育児情報も参考になった」「7.他の参加者の悩みなどを聞いて共感した」には、多くの人が「当てはまる」とし、専門家や母親同士の交流からいろいろ吸収している様子が伺える。そして、「11.自分のやり方でいいんだと気が楽になった」「13.何かあれば相談できる人がいると思える」と感じている。

「友だちづくり」という動機が最も強かった人は、「9.自分のことは話しづらい」と思う傾向が、他の動機を持った人より多い。それでも、「10.初対面の人とも話をした」と接触は持っている。しかし、「13.何かあれば相談できる人がいると思える」「14.今後の生活に楽しみや張り合いができた」と感じられる人は、他の動機の人より少ない。友だちをつくりたいという思いはあっても、すんなり参加者の中に溶け込みにくいところがある。育児教室に参加したからといって、すぐに友だちにめぐり合えないこともあることから、「今後の生活の楽しみ」などの感想にも影響していると考えられる。もう一つの傾向として、「2.子どもの事で気になっていたことが解決できた」に「当てはまる」という人は他の動機の人よりは少なく、「3.保健師からもっとくわしく話を聞きたかった」としている。普段、友だちを通した育児情報や、アドバイスなどが少ない分、子どものことで確認したいことや、保健師から知識を得たいという要求も強くなるのかもしれない。

「友だちに会いたい」という動機が最も強かった人は、「5.自分の話を聞いてもらえただけで良かった」と感じた人は多かった。しかし、「7.他の参加者の悩みなどを聞き共感した」「8.個別相談の時間をもっと取ってほしい」というわけではない。単に参加者とおしゃべりができることがよいのかもしれない。それが「14.今後の生活に楽しみや張り合いができた」「15.また育児に関する催し物があったら出かけようと思う」とつながっていると考えられる。

「育児に自信がない」という動機が最も強かった人は、2人だけだった。

2人共「1.保健師の話は参考になった」としているが、「3.保健師からもっとくわしく話を聞きたい」というわけではなく、「8.個別相談の時間」をもっと取ってほしいと感じている。また、「12.もっと育児について情報交換できる時間がほしい」と感じながらも、「4.他の母子の様子が見られて良かった」「11.自分のやり方でいいんだと気が楽になった」という感じは少ない。2人は、2回目あるいは4回目の参加だが、参加者から様々に情報が入ってくることで返って混乱を招いてしまうのではないかと考える。保健師との個別の関わり合いを持ち、母親の不安・心配がどこから来ているのか確認していかなければならない。「15.また育児に関する催し物があったら出かけよう」と思う気持ちは強いので、うまく情報整理してつなげていく必要がある。

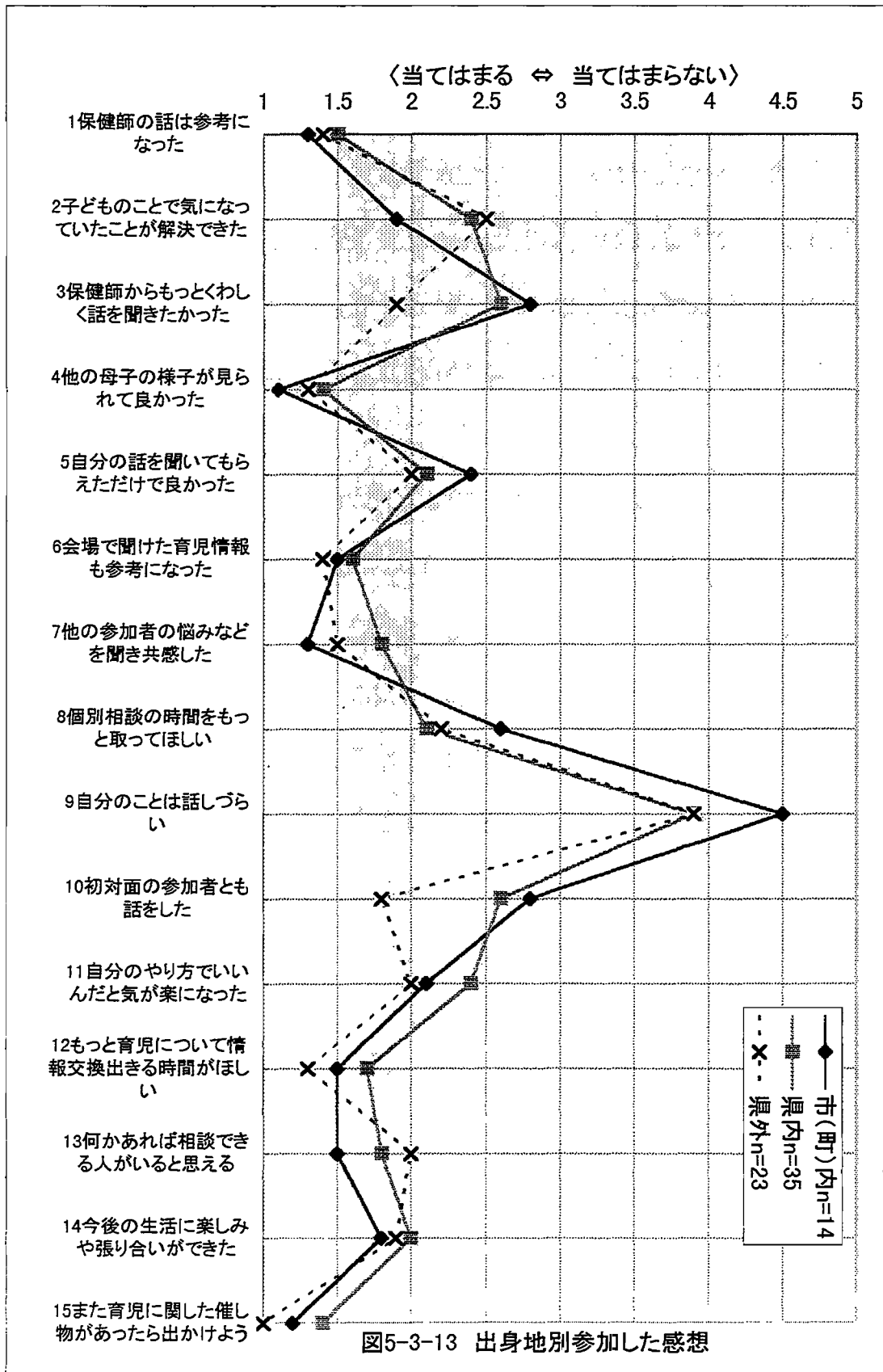
全般的に見ると、動機が何であれ、「6.会場で聞いた育児情報も参考になった」「10.初対面の参加者とも話をした」「15.また育児に関する催し物があったら出かけようと思う」は感じ方が同じであった。逆に「2.子どものことで気になっていたことが解決できた」「3.保健師からもっとくわしく話をききたかった」「9.自分のことは話しづらい」「11.自分のやり方でいいんだと気が楽になった」「13.何かあれば相談できる人がいる」は、動機によって感じ方が異なっていた。

(2) 出身地別にみた参加者の感想

図 5-3-13 に、出身地別に参加した感想の平均得点を示した。

全体的に、出身地による差はみられない。特に、「1.保健師の話は参考になった」「4.他の母子の様子が見られてよかった」「6.会場で聞いた育児情報も役に立った」「14.今後の生活に楽しみや張り合いができた」は感じ方が同じだった。

出身地によって多少違いがあるのは、「3.保健師からもっとくわしく話を聞きたかった」「10.初対面の参加者とも話をした」などで、市内よりも県外出身者の方が「当てはまる」という人が多い。逆に「2.子どものことで気になっていたことが解決できた」「9.自分のことは話しづらい（とは思わない）」「13.何かあれば相談できる人がいると思える」などは、市内出身者の方が「当てはまる」という人が多くなっている。



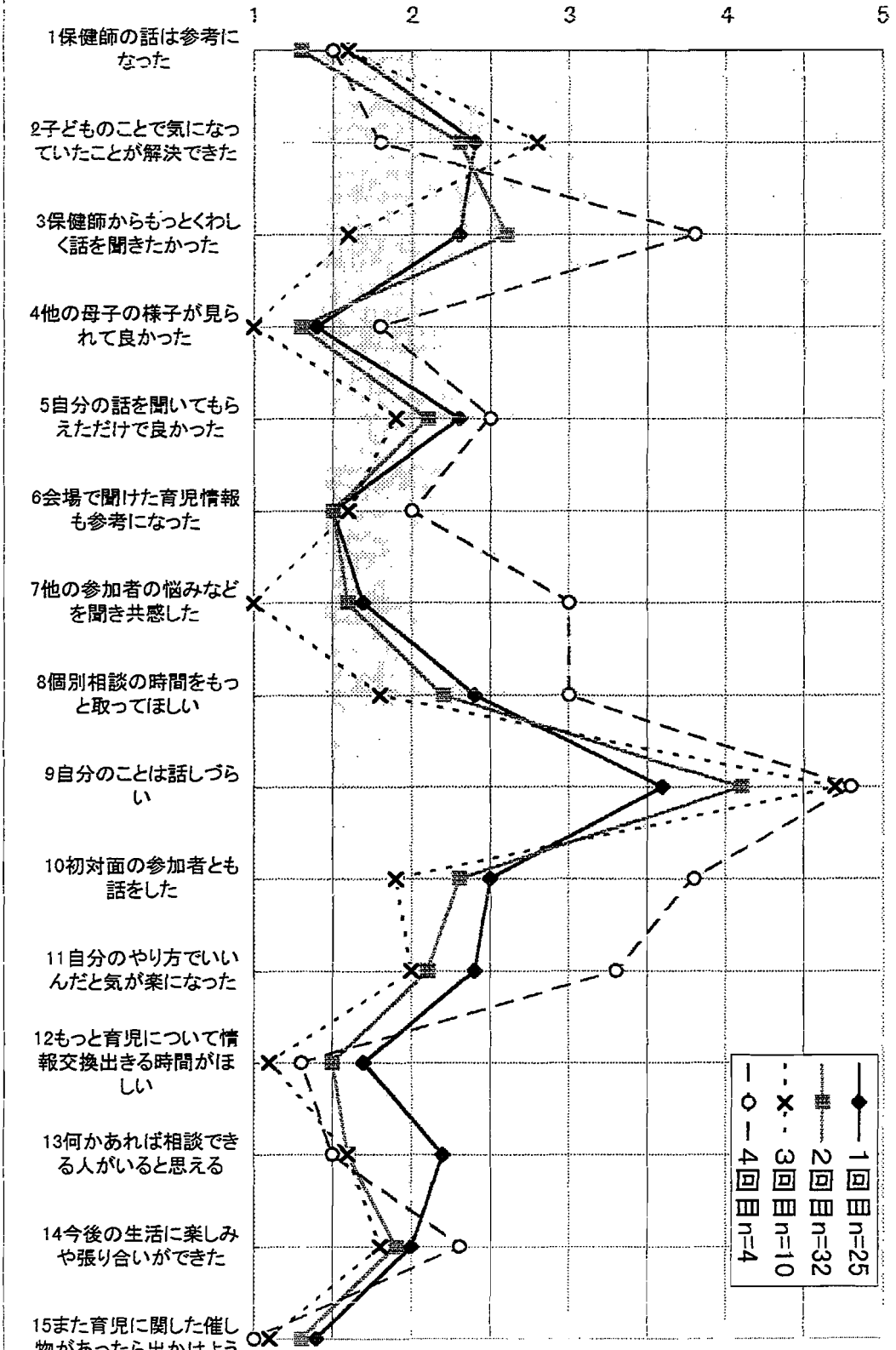
(3) 育児教室への参加回数と参加した感想の関係

図 5-3-14 は、参加回数別に見た参加した感想の平均得点である。

4回参加した人は人数が少ないためか、他の回数の平均値と開きがある。4回目のデータを除いて結果を見てみると、参加回数が増えるほど「当てはまる」と感じる項目が多かった。その中でも、「7.他の参加者の悩みなどを聞き共感した」「9.自分のことは話しづらい（とは思わない）」「10.初対面の参加者とも話をした」「12.もっと育児について情報交換できる時間がほしい」など、参加者同士の関わり合いに関係する項目では、参加回数が増えるほど、そう思える人が増える傾向にある。

参加回数に影響されないのは、「1.保健師の話は参考になった」「6.会場で聞いた育児情報も参考になった」「14.今後の生活に楽しみや張り合いができた」「15.また育児に関する催し物があったら出かけようと思う」などであった。

〈当てはまる ⇄ 当てはまらない〉



参加した感想

図5-3-14 参加回数別参加した感想

(4) 育児教室に参加した感想のまとめ

参加した感想は、参加の動機・出身地・参加回数、コース（基礎集計）という条件によってどのように違ってくるかまとめると次のようになる。

どのような条件にも左右されず、感じ方がほぼ同じだった項目は、「4.他の母子の様子が見られて良かった」「6.会場で聞いた育児情報も参考になった」「15.また育児に関する催し物があったら出かけようと思う」で、「当てはまる」と感じる人が多かった。これは、どのような形で育児教室を行っても、最低、参加者に感じてもらえる育児教室の良さ（利点）だと考える。

それに対して、条件によって感じ方の違いが出るものを次にあげる。

「1.保健婦の話は参考になった」は、あまり要因に左右されず「当てはまる」に回答する傾向が強いのだが、参加する動機によって、多少違いが見られる。

「2.子どものことで気になっていたことが解決できた」は、「他の人の育児を知る」事を1番の動機とした人、市内出身者、1歳2か月コース（参加4回目）で「当てはまる」という人が多かった。逆に、「友だちづくり」を動機とした人、「市内」以外の出身者に「どちらとも言えない」が多かった。子どもに対する意識の強さ、それに具体的な情報を得たいということがこの感想には関わっており、解決の程度が「3.保健師からもっとくわしく話を聞きたかった」に関連してくる。

「5.自分の話を聞いてもらえただけで良かった」は、参加の動機が影響していて、「育児に自信がない」人に「当てはまる」という回答が多かった。

「7.他の参加者の悩みなどを聞き共感した」は、プログラムの内容（グループワークの有無）、参加回数が影響し、参加者との関わり合いがあるほど「当てはまる」という人が多く、共感性が高まる。

「9.自分のことは話づらい」は、参加の動機・出身地・参加回数が影響している。育児のネットワークが乏しい、参加者同士のなじみが薄い場合などは、「当てはまる」ことが多い。

「10.初対面の参加者とも話をした」は、県外出身者や、プログラムでグループワークがある場合は積極的になれる。

「11.自分のやり方でいいんだと気が楽になった」は、参加の動機が影響している。「他の人の育児を知る」動機で参加した人はそう思えるが、育児に自信が持てず参加した人は、「当てはまらない」ようである。

「13.何かあれば相談できる人がいると思える」は、月齢・参加の動機が影響し、

育児のネットワークが広がると「当てはまる」という人が多い。

「14.今後の生活に楽しみや張り合いができた」は、あまり条件には左右されない方であるが、「友だちづくり」を動機に参加した人は、他の動機の人より「当てはまる」という人が少ない。

つまり、「2.子どものことで気になっていたことが解決できた」「8.個別相談の時間をもっと取ってほしい」など、一般的に知識を得ることや、個別的な対応を必要とする問題に関しては、主に参加の動機が感想に影響してくる。しかし、参加者と関わり合う「7.共感」「9.自分のことを話す」「10.初対面の人とも話した」「12.もっと情報交換をしたい」についての感想は、参加の動機だけでなく、出身、参加回数、プログラムの内容（グループワークの有無）によって感じ方が違ってくる。明日への希望をみる「13.何かあれば相談できる人がいる」「14.今後の生活に楽しみ」「15.また育児に関連する催し物に出かける」は、育児教室に参加した人の大半はそう思っているが、参加の動機と月齢で多少感想が影響してくる。育児のネットワークが広がるような関わりを持ちながら、月齢を経ることが大事になる。

Ⅲ. 参与観察と参加者インタビュー

1. 参与観察

盛岡市の「すくすく学級」は、グループワークが2-3か月コースと8-10か月コースにある。そのコースは、教室が終わってからも、以前からの友達とはもちろん、同じグループの人と話が尽きず、放っておけばいつまでも話しているような状態である。5-6か月コースには、グループワークはないが、2-3か月コースの時の参加者がそのまま継続して出席するかたちなので、同じように、教室が終わると同時に仲間同士が集まってくる。

グループワークは、2-3か月コースの場合、保健師が進行役になり、自己紹介を兼ねて普段気になっていることなど話してもらう。調査者が入ったグループでは、体重の増加、果汁の与え方、寒いので散歩はあまりできないということなどが、共通する疑問・心配事として出されていた。それに対し、保健師がアドバイスしてい

た。「夫の協力について」「自動車に乗るとき、チャイルドシートが嫌がるのでどうしたらよいか」という相談も出たが、それらに対しては、他のメンバーの場合どうであるかを改めて聞き、成功経験として情報提供し合うようにしていた。

8-10か月コースのグループワークの場合、保健師は入らず、離乳食の状況、育児をされていて大変なこと・嬉しいことなど、決められた項目に沿って、母親達だけで進めていた。グループで出された疑問に対しては、全体発表を進める保健師が、他のグループから意見を引き出したり、保健師・保育士自身がアドバイスしたりしていた。例えば、「動き回っておむつ交換が大変」ということに対して、他のグループメンバーから、「パンツ型のオムツに切り替えたなら楽になった」、「切り替えたら返ってオムツが肌に合わなくてだめだった」など、母親自身から体験を話してもらい、保育士から、「おむつ交換のときにおもちゃなど小道具を使って意識を別なほうに向けたらよい」といったアドバイスを参考にしてもらおうようにしていた。

1歳2か月コースは、子どもが会場内を歩き回ったり、他の人の持ち物に興味を示したりするので、参加する母親にとっては、講話に耳を傾けながらも、子どもの動きにも気を払うという感じだった。

矢巾町の育児教室の場合、参加したメンバーはお互い知らない同士で（1組、小児科に入院したとき同室だったという母親がいただけ）、身体計測や成長確認する個別指導の順番を待っている間、隣の参加者と何か話をするということは見られなかった。子育て支援センターの保育士が「どうですか」と適宜母親に話しかけながら和ませるようにしていた。

参加した母親9人中、実祖母も一緒に参加したのが2組あった。親子で、「男の子はうちともう一人しかいないね」とか「みんな首が座っているみたい。うちの子だけかな、まだ座ってないのは・・・」というような会話が聞こえた。当日は、雪降りで、教室終了時家族が部屋まで迎えに来た人も2人いた。家族で、育児教室に参加することを応援している印象があった。

参加者は、教室が終了すると、保健師や保育士と個別に話をするということはあるが、盛岡市の「すくすく学級」のように、いつまでも残って参加者同士話をしているということはない。

2. インタビュー

盛岡市の「すくすく学級」終了後、残っていた参加者から、育児をする上でどのような事が母親の学び・支えとなっているかインタビューした。

その結果、「すくすく学級」のねらいとなる「交流」と「学習」の各要素から、いくつかのキーワードが出てきた。それは、図 5-3-15 のように関連づけられた。以下、事例を用いて説明する。

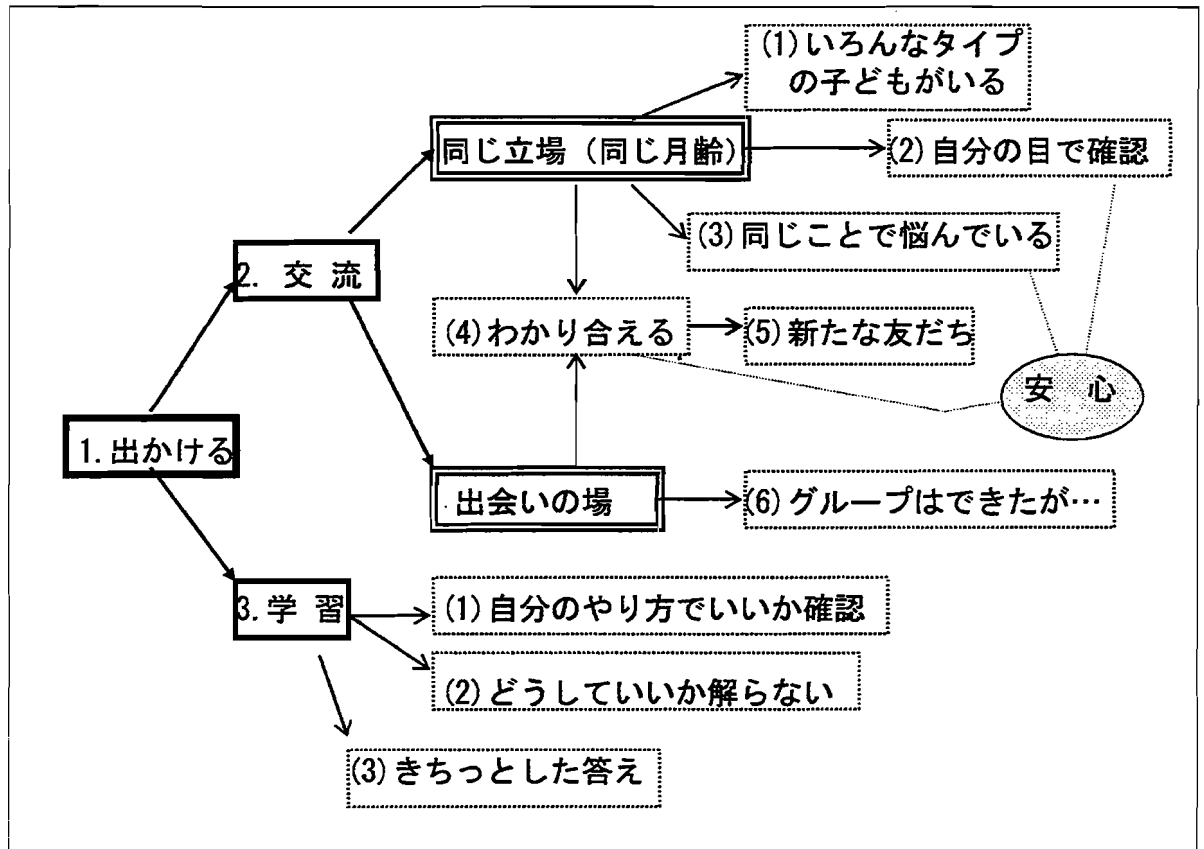


図 5-3-15 参加者のインタビューに含まれるキーワードの関連

[1] 「出かける」

【 Aさん：「すくすく学級」2 - 3 か月コース 】

(子どもの抱き方や母乳の与え方がぎこちないー両手で下から抱えて横抱きしている、子どももぴたっと母親の体にくっついてこないー。実母からその方が重くないと言われて

そうしているとのこと。会場で、保健師から手を取りながら縦抱きの方法を教えてもらう。しかし、そのように抱かせてもらっても、だんだん子どもが重みでずり落ちてきて、自分ではどうやって体制を立て直していいか困ってしまう。調査者に”どうしたらいいでしょう“と救いを求める。）

新潟に里帰りしていて最近戻ってきたばかり。子供と2人だけの生活にまだ慣れない。

転勤で今年の4月に盛岡に来て、産後は里帰りしていたから、全然盛岡のことが解らない。今回の参加は、マタニティ・スイミングで一緒になった人から里帰り中にメールで教えてもらい申し込んだ。母親学級で一緒の人からも電話で誘われた。

寒いのでほとんど子供と外に出たことがない。買い物にも行ったことがない。

今日来て良かった。朝早く準備しなければならないから大変だったけど、それでも良かった。外に出ることはいいこと。今度は、車で買い物に行ってみようと思う。

(スイミングで一緒だった母親と連れだって帰る。)

生後間もない子どもを連れて外出することは、結構大変なことである。初めての子どもで、しかも寒い時期あれば尚更である。「すくすく学級」の事業について聞き取り調査した際、小笠原保健師が、“産後初めての外出が「すくすく学級」という場合もある。申し込みの電話で、「どうやって子どもを連れて行けばいいんですか」と聞かれたことがある”と話していたが、似たようなケースであった。

1回でも外に出ることができると、自信を持って、散歩に出かけよう、買い物に出かけようと普段の行動範囲が広がる。そうすると、親も子も外からの刺激を受ける機会も増えていく。育児教室は、自信がなくて外に出かけられなかった人でも、思い切って外に出させてくれる機会を与えてくれる。

【2】交流

(1) いろんなタイプの子どもがいる。

【 Bさん：「すくすく学級」8-10 か月コース 】

3回目の参加。

転勤族だから、自分を出さないと友だちができないと思って…。子どもをもってよけいそう思うようになった。自分一人だったらこもっていてもいいけど、子どもにはそれは良くないと思うから。

教室で、いろんな人の話を聞き、いろんなタイプがあるんだなと思えた。うちの子は、離乳食をあまり食べてくれないのが気がかりなのだが、他にも食べなくて悩んでいるという発表もあって安心した。食べた方がよいとは思いますが、みんな一様ではないんだなと思えた。

「〇か月の時には〇〇ができなくてはならない」、「離乳食はこの位食べなければならぬ」など、母親は見えない圧力に苦しんでいたりする。しかし、「すすく学級」の中で、お互い悩みを出し合うと、同じように悩んでいる人の声も聞こえてくる。その時、子どもの性質の多様性に気が付く。これは、自分だけではないと安心する（2-（3）タイプ）とか、心配な気持ちをわかり合う（2-（4）タイプ）という母親自身の気持ちの処理とは少し違う。子どもの性質の多様性に目が行くと、教科書に自分の子どもが合わないことを悩む事からは少し開放され、この子に合わせてどうすればよいかという視点に変わっていくのではないかと考える。

（2）自分の目で確認

【 Cさん：「すすく学級」2-3か月コース 】

来て良かった。安心した。体重が多すぎるのかなと思って心配だったけど、他にも大きい子が結構いるのを見て、うちだけじゃないと思って安心した。

—— この事をだれかに相談したことはありますか？（調査者が質問）

姉に相談して“大丈夫じゃない”と言ってもらったが、だいぶ年がはなれているから、大丈夫と言ってもらっても、いまいち安心できなかった。今日、他の子どもを見て、大丈夫だと実感できた。

乳児期は体重の増え方が気になるものである。とりあえず身近なきょうだいや友人、自分の親など育児経験者に相談するが、そこで“大丈夫”と言われても、本当に大丈夫なのか確証を得られないということがある。その点、育児教室は、体重測定ができるので数値として見ることもできるのだが、大勢の子どもが集合することで、自分の子どもが、他の子どもと比較して特別でないこと、人並みであることを確認することができる。自分の目で確認し、そこで納得してやっと安心するのである。

(3) 他の母親も同じ事で悩んでいる → 安心 → 交流が進む

【 Dさん：「すくすく学級」 2－3か月コース 】

来て良かった。うちにいるとしゃべる相手もない。今日はいっぱいしゃべれた。まだしゃべり足りないの、これからどっか寄って…。(と、同じグループの母親と顔を見合わせる。)

—— 前からのお知り合いですか？

今日初めて会った。グループの自己紹介で出身が宮城って言ってたので、私も仙台だから、声をかけて話をしていたところ。

—— 来て良かったのは、しゃべることでストレスが発散できたからということですか？

他の子どもをみて、だいたいみんなと同じ位だなと思ったし、他のお母さんの話を聞いて、みんな自分と同じ事で悩んでいるんだと思ったら安心して、安心したからしゃべれる。

母親同士の交流の場であるグループワークは、どの母親も最初から何でも話せるわけではない。他の母親からいくつか悩み・心配事を聞き、悩んでいるのは自分だけないと気付き安心する。Dの事例から、安心できたからこそ自分のことを話したり相手の話を聞こうとしたりする気持ちになれるのだということがわかる。つまり、学習の前提として、まず安心感を持たせることが重要で、それなしには、効果的な学習はできないということがわかる。

(4) 気持ちをわかり合える (受容・共感) → 自信

【 Eさん：「すくすく学級」 5－6か月コース 】

2回目の参加。母親学級からの仲間4人と。

仲間がいるから参加できる。

参加すると2倍以上元気になる。自信もつく。普段1人だから。同じ月齢の人と、同じ立場で話ができる。“こんな事どうしてる？”って普段気になっていることをが気軽に聞ける。何年か先に産んだ人に相談しても、“あー、それは大丈夫、その内治るから！”とか言われる。でも、私が今心配する、その気持ちは分かってもらえない。その点、同じ月齢同士だと“そうそう”と分かり合える。でも、自分も生んだばかりの人から相談されたら“それは大丈夫、大丈夫”なんて言うと思うけど…。

母親は自分の感情を分かってもらいたいという気持ちを強く持っている。聞いたこと（相談したこと）の答えを求めているわけではない場合も多い。仲間が自分の気持ちを受容してくれ、“そうそう”と共感してくれる。それが、そういう自分でもいいのだという、自分自身の肯定的な評価につながる。そのことが、「元気になる」「自信がつく」につながっていくのではないかと考える。

(5) 出会いの場 → わかり合える → 新たな友だち

【 Fさん：「すくすく学級」 8－10か月コース 】

3回目の参加

転勤族で知り合いが少ない。普段一人だから、ここに来てしゃべれるのがいい。特に教室が終わってからの雑談がいい。細かいことだけど、気になることが聞ける

初めは、友だちと申し合わせて一緒に参加していたけど、今日は(友だちは)来てない。

3回目になると慣れて、知らない人でもしゃべれる。直接話した事がなくても、通い続けている人とは顔なじみになっている。

みんな、同じ立場だから分かり合える。

(今日初めて会った人だが、グループワークで一緒だった母親(こちらの母親は、双子を連れ初参加)と、お互いの連絡先を交換して一緒に帰る。今度遊びに行くことを約束していた。)

Fさんは、育児教室の良さとして、Dさん[他の母親も同じ事で悩んでいる → 安心 → 交流が進む]、Eさん[気持ちをわかり合える(受容・共感) → 自信]と同じ感想を持っていた。そしてさらに参加の回数を重ねることで、質問紙調査で、参加回数が増えるほど「自分のことが話しづらい(とは思わない)」という結果を表すように、初対面の人とも抵抗なく話しかけることができ、自然に新しいつながりに結びついている。

(6) 地区の子育てサークルはできたが・・・

【 Gさん：「すくすく学級」 5－6か月コース 】

(遅れて会場に入る。到着するなり、子どもに離乳食を食べさせてもいいか、側にいた保健師に聞く。“今の時間じゃないと後がずれるので”と、離乳食を与える時間にこだわっている。子どもは、周囲の雰囲気からか離乳食を与えられてもあまり進まない。仕方なく母親は食事を片付け母乳を与えるが、飲みきったという感じではなかった。子どもが小柄なので、余計離

乳食にこだわるのかなと思ったが、母親の雰囲気から、何か緊張感のようなものを感じ、教室終了後話を聞く。）

2回目の参加。県外出身だし、転勤で知り合いもないから、できるだけ外に出て友だちをつくろうと思って申し込んだ。

1回目の「すくすく学級」のあと、松園地区の人達で月1回集まることになった。

今日はその松園地区の子育てサークル(サークル員は現在8人くらい。地区活動センターに集まる)の仲間4人で参加。

(話を聞いているところに、メンバーが集まってくる。前回、子ども達を並べて撮った写真を焼き増ししたものが配られる。その写真を見て、メンバーから“みんな大きくなったよね”と言われるが、Gさんの表情はさえない。

Gさんは、子どもが離乳食をあまり食べてくれないこと、まだ寝返りをしないこと、小さい(体重がまだ6kg代)くせにもう歯が生えてきて、授乳時おっぱいを噛まれて痛くて大変であることを仲間に訴えていた。しかし、メンバーは、それぞれ、“うちは体重が8kgもあって大変だ”と自分の事ばかり話したり、“歯生えたんだって？どれ見せて～”と興味本位に見たりするだけで、Gさんの悩みに受容・共感するような言葉もアドバイスも聞かれなかった。)

(メンバーが子どもの体重測定のために離れた時) 子育てサークルでも、みんなと話ができる訳ではない。気の合う人はさっき隣にいた一人くらい。

県外出身者でなおかつ転勤族であれば、「すくすく学級」は出会いの場としては貴重な催しだ。それに参加して、孤独な転勤族から、サークル結成によって一気に知り合いは増えた。しかし、Gさん場合、地区でまとまったグループになったとき、固定したメンバーとなったそのグループが、必ずしも母親の支えとなるわけではない難しさを感じた。

確かにGさんの抱える悩みは、保健師などが入って個別に、しかも継続的に対応していかなければならない面がある。また、サークルを結成してまだ日も浅く、悩みを持つ母親に対して、サークルとして支え合えるような段階ではないのかもしれない。サークルに何をどこまで求めるのか、母親自身はもちろん考えなければならない。しかし、サークルとしてまとめた保健師も、サークルがどのように機能しているか見守り、支援していくことが大事になってくると考える。

[3] 学習

(1) 自分のやり方でいいか確認

【 Hさん：「すくすく学級」1歳2か月コース 】

4回目の参加

“離乳食の作り方はこれでいいかな”と確認できるのが安心。子どもにも友だちができるので、私にも子どもにもいいと思って参加している。

毎回参加していると、顔見知りもできて楽しい。(交流の広がり…2-(5))

【 Iさん夫婦：「すくすく学級」1歳2か月コース 】

(「すくすく学級」は)初めての参加。「パパ・ママ学級」には参加した。働いているが、夫は休日で、私(妻)は休暇を取って参加。

(夫)歯磨き、嫌がって磨かせない。むりくりやらせた方が良いのかどうすればよいか、気になっていたから……その辺がわかってよかった。

(妻)歯磨きが何で嫌がるのか、今日聞いて心当たりがあった。

—— 歯磨きで困っている事をだれかに相談したことはありますか？

職場の人は年上ばかり。妹に相談したが、「そのうち、なんとかなるっけ」と言われるだけ。今どうすればいいか聞きたいのに…。

学習には、新たな知識や情報を獲得したいというだけでなく、Hさんのように、自分なりにやっってはいるが、これでいいのか確認をしたいということがある。自分のやり方について、専門家のお墨付きをもらうことで、やっぱりこれで良かったんだと安心できる(自信が持てる)。また、Iさん夫婦のように、何かもっとうまくやれる方法はないか知りたい場合にも、講義を聞いて、自分たちのやり方を軌道修正することができる。グループワークをして情報交換したりすれば、ついでに、対処方法の持ち札を増やすことも可能になる。

(2) どうしたらよいかわからない

【 Jさん：「すくすく学級」8-10か月コース 】

(母子ともブランド品の装いで何となく目に入っていた。みんなが離乳食の試食のため隣の部屋に移動する際、まだ授乳中だったため、“襦をしめて隠しましょうか”と声をかけた。そし

たら、“もう、おっぱいは終わりにします。”と言う。試食する部屋に向かいながら、母親の方から調査者に、困っていることを話し出す)

離乳食、全然進んでいない…。まだ「どろどろ」なんです(困り顔)。おっぱいの方がよくて離乳食は食べないんです。

(試食の時間)離乳食の試食は全く食まませんでした。直前に哺乳したこともあるけど…。結局私がみんな食べました。

——「何か聞きたいことはないですか」という栄養士の言葉に、発言を促してみる。

んー(質問せず)

参加者の中には、打つ手がなくどうしたら良いか全く分からないというような問題を抱えて参加する人もいるだろう。でもそこで、集団学習の利点が活かされ(2-(1)(2)(3)(4)、解決の糸口をつかむという場合もあるだろう。しかしJさんの場合、集団学習ではなく個別に、しかもフォォーアップが必要なケースである。集団の中で、個別の関わりが必要なケースに対して、スタッフからあるいは本人の方から、個別の相談に結びつく事の難しさを感じる。

(3) きちっとした答え(信頼と確かさ)

【(再び) Eさん:「すくすく学級」5-6か月コース】

母親は当てにならない。母から“私はわからないからね”と、先に言われてしまって、相談しようにもできない。里帰りしたが、ストレスだった。子どもが泣けば、“ほら、ミルクやったほうがいいんじゃないか”とか、いちいちうるさい。母乳で育てたかったのに、“私も出なかったから、あんたも無理じゃないか”って言われたり…。あんまりストレスが溜まり、一度夜中に家を出ようとしたこともあった。

育児がこんなに大変だと思わなかった。本に書いてあることがどんどん崩れる。もっと勉強していれば良かった。最初の1か月は落ち込み放し。

友だちに相談しても、同じ経験をしていなければ曖昧な返事しか返ってこない。たとえ経験していても、信頼できるアドバイスとは限らない。そういう点で、相談したとき、知識と多くの事例からきちっと答えてくれる専門家もいてほしい。

「すくすく学級」の参加者は仲間同士わいわい賑やかで、この時とばかり発散している様子も毎回のように目にする。しかし、仲間との交流目的だけだったら何も

わざわざ「すくすく学級」に来る必要はない。学習という面にもまじめである。それは確かな情報として保障されているからである。

母親には、「自分の気持ちをわかってもらえていると思える人の存在」と、「些細な疑問・不安に対して経験を通して具体的に情報提供してくれる仲間の存在」、「相談したとき、きちっとした裏付けを持って答えてくれる専門家の存在」が大事であり、必要性を感じていることが伺える。その三つがそろるのが育児教室である。

4. その他 … 娘を支える母親

【 Kさん（参加者の実母）：「すくすく学級」2－3か月コース 】

一緒に買い物に行こうと終了時間に待ち合わせて来た。

この間まで里帰りしていた。70日扱った。

1月から働くというので、孫を預かることになっている。もう60歳も過ぎたので、体が持つか心配。4月からは、職場の近くの託児所をお願いしているようだが、それまで私も風邪を引かないようにとか気をつけなければならないし、いろいろ気がかりだ。自分は母乳で育てたから、ミルクはよく分からない。泣いているのでミルクをあげようとする、“時間であげるのだから”と娘に怒られる。いろいろうるさい。おんぶ紐も、今娘が持っているのは複雑で、4通りの使い方ができるようだけど、私は昔の普通のおんぶ紐がいい。

何かあったら、保健センター（都南支所）がすぐ近くだから行きます。小川さんだっけか、いつも都南に来る保健婦さんは…。

母親の親世代は、育児について「育児教室」などで改めて勉強しようというよりは、何かあったら保健婦さんのところへ走って行けばよい、という思いが定着しているように思う。

孫の世話は、「自分がやってきたやり方のほうが楽」ということと、大事な孫を預かるのに「万が一のことがあってはいけない」というジレンマに、娘に怒られないうやり方が無難かと思っているのかもしれない。それでも、心配や疑問が出てくる時は保健センターに走るということなのだろう。

第4節 調査のまとめ

盛岡市と矢巾町の育児教室について調査した結果から、仮説にそってまとめる。

仮説1)の育児ネットワークについては、対象者のネットワークは、親族を中心として、近隣・友人等重層的なネットワークを持っていた。これは仮説に反し、ネットワークがないから教室に参加するという単純なものではなかった。しかし、「たまにはゆっくり眠りたい」と言うような母親自身の気持ちを話せる相手は全般的に少ない。特に「友達づくり」のために参加している人は、育児の代行も含め、情緒的な支援を受けられると思える人が少ない。山根氏¹⁾が『あんふあんて』(1975年発行、新聞紙上を通じて子持ち女性同士の連帯を呼びかけ、相互託児を提案したグループ)に『本音』で話せる友人を求めて加入する会員が多い。会員が求めているのは、単なる『知り合い』ではなく、生き方全体に関わる本音を語り合う人間関係である」と述べている。参加者が、生き方全体まで求めているかどうかはわからないが、育児教室は、そういう母親の本音を話せる場として保障されている。それが、「今後の生活に楽しみや張り合いができた」＝「元気」にもつながっていくのではないかと考える。

仮説2)の参加の動機と参加した感想との関係では、やはり、参加の動機によって、その満足感は違っていた。しかし、動機ごとに見ると仮説に反する結果も出た。

①「知識を得たい」という動機で参加した人は、専門家からもっと話を聞きたいと感じる人は少なく、これは仮説通りではなかった。むしろ、「他の母子の様子が見られて良かった」と思える人が多く、他の参加者の方に目が向いていることがわかる。「その他の感想」の自由記載欄にあったAさんのように、離乳食のことを知りたくて参加したのに、育児について「皆さんと話せたことが励みになった」と、仮説3)の「養護性の広がり」、「感情の共有」がみられ、それが満足にもつながっていた。もし育児教室が、単に「離乳食の調理教室」のようなものだったら、Aさんのような感想にはならなかったと思われる。知識もさることながら、集団での交流が、Aさんにとって学びであり励みになっていた。牧野氏²⁾は、学習を、『子どものため』より『自分のため』と思える人のほうに育児不安が少ない」と述べていることから、今回の調査で「知識を得よう」と参加した人は、専門家からの講話だけ

でなく、他の参加者からの生の情報にもすぐ着目する余裕があるのではないかと考える。

②「友達に会いたい」という動機で参加した人は、単純におしゃべりができると満足感があり、これは仮説の通りであった。昨年調査者が特殊実験調査で「すくすく学級」に参加した時、保健師の話も聞かず隣同士賑やかだったのは、「友達に会いたい」という参加者が多かったためだったかもしれない。

一方、「友達をつくりたい」という動機の人、参加者の中にすぐには溶け込めないうところがあった。インタビューの中で、転勤族で知り合いがいないという人(Bさん・Gさん)が、どことなく無理をしてグループの中に入ろうとしている様子は、これを裏付けている。この点で、担当者の配慮が必要であるし、盛岡市の保健師が今後の課題で語っていた「親と子のたまり場」的なものが身近にあって、自分のペースで友達づくりができるようであればよいと考える。

③「育児に自信がない」ことを動機として強く持っていた人は、2人だけであった。2人の回答を見ると、知識よりも、自分の話を聞いてもらうことに満足しているところは、仮説の通りであった。しかし、それだけで「自分のやり方でいいんだ」と安心できず、参加者の話に共感する気持ちも他の参加者より少なかった。「もっと情報交換したい」「また催し物があったら参加したい」という気持ちを持ちつつ、「個別の相談」も望んでいることから、集団の中で個別的な関わりを持ちながら進めていかないと、育児に自信を持つことにつながっていかないと考える。

個別相談と言えば、インタビューしたGさん・Jさんは、たまたま何となく気になって声をかけたら、個別にも相談したほうが良いような深刻な悩みを持っていた。2人とも、こちらから話しかければ悩みを話す、自分からは個別相談をしようとしなかった。この2人はどんな動機を強く持っていたかはわからないが、集団の中からこのようなケースをキャッチするためにどうすればよいかは課題である。

仮説3)の参加回数が増えると、お互いに支えあう気持ちになれることは、仮説通りであった。実際、インタビューしたFさんは、3回目になると、友達が一緒でなくても参加することに抵抗がなくなり、双子を連れた初参加のお母さんと新たなつながりを持って、教室以外でも会って支え合おうとしていた。

しかし、回数だけが大事ではなかった。育児教室に参加した感想の中で、参加者と関わり合う「7.共感」「9.自分のことを話す」「10.初対面の人とも話した」「12.もっと情報交換をしたい」についての感想は、参加回数以外にも、参加の動機、出

身、プログラムの内容（グループワークの有無）によって感じ方が違っていた。特に、他の人はどんな育児をしているのか情報収集したかったという「他の人の育児を知る」を動機に参加した人は、参加者との関わりや今後の育児について展望が良好なのに対し、「友達をつくる」ことや、「育児に自信がない」という動機で参加した人は、集団の中に溶け込むことに始めはやや抵抗がある。その点で、教室に参加した仲間だからと言って、すぐに連帯感が生まれ、支え合う同士になれるとは限らないことがわかった。だから、援助する側の立場で、参加者同士の支えあいを目指すならば、参加者に対していろんな配慮が必要となる。また、今後の育児について展望を知る「13.何かあれば相談できる人がいる」「14.今後の生活に楽しみ」「15.また育児に関連する催し物があったら出かける」も、月齢だけでなく参加の動機で多少感想が違ってくる。明日への希望を持って育児ができるようにするためには、育児のネットワークが広がるような関わりを持ちながら、月齢を経ることが大事になる。

(注)

- 1) 山根真理:1994、「現代の家族－育児期の変化と育児ネットワーク－」、『社会学理論 比較文化』、pp100
- 2) 牧野カツコ:1987、「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』No9、p9

第六章 地方都市における育児支援の 諸相と可能性

—まとめにかえて—

この報告書では、平成12年度から15年度 科学研究費(基盤研究(C))(2))助成を受けて実施した、県庁所在市の育児支援施策を知るための「育児支援に関する調査」《大都市圏に入らない県庁(府庁)所在地自治体を対象として、地域の特色、出産助成(推進)にかかわる施策について、保育園・幼稚園・育児サークル等に対する支援政策の有無、どのような方法で住民のニーズを吸い上げているか、事業実施状況などについて、郵送法調査で実施》と育児教室参加者の育児ニーズを知るために盛岡市・矢巾町の育児教室で行った「母親の育児支援に関する意識調査」《岩手県県庁所在地盛岡市と隣接町矢巾町において、出産・育児支援政策がどのように展開しているか、育児教室参加者に対する質問紙調査と育児教室を運営する保健師からの面接聞き取り調査によって、就学前保育の実態と選択されている保育資源との関わりをあきらかにした》の2件の調査結果を中心にまとめたものである。

第三章では、それぞれの地方都市がどのような「家族形成」状況にあり、6歳未満の子どもはどんな家族構成の世帯で生活しているのか。統計データから確認をした。

盛岡市を例にとってみると、6歳未満の子どものいる親族世帯をみると、岩手県全体では約半分が「夫婦とその子ども」の世帯のなかにおり、約半分が「その他の親族」世帯のなかにいる。また7人世帯以上のところにもおよそ2割の子どもが暮らしている。県全体に比べて盛岡市は約8割が「夫婦とその子ども」の世帯のなかにおり、「その他の親族」世帯の中にいる子どもの数は低くなっている。岩手県の中でこの盛岡市の世帯構成比をみると特例的なものととれる。東北地方の市の中でも盛岡市は特例的なものと位置づけられることが確認できた。ただし県庁所在市の中でみればこの特徴は特別とは言えず、むしろ標準的な構成であることも特筆する必要があるだろう。

第四章の各県庁所在地自治体(市)の調査からは、事業どうしの関係を体系的に把握する連絡調整機関を設置している市は少ないことがわかり、さらに複

数の担当部署があっても、部署内での調整や評価は行うが、他の部署との連携を図る試みや市全体の「子育て支援事業または子育て支援関連事業」の総合的なまたは全庁を視野に入れた評価はあまりなされていないこともわかってきた。例えば、「市独自で企画している子育て支援事業」について問いに対しても、複数枚回答票のある市を中心にみると、大半がそれぞれの票に回答部署の事業をあげており、「市」独自の全庁的な視野で、他の部署の事業までを見通した回答はあまりでてこない。むしろ人口規模の小さな市で担当も限られ、回答が単独になっているところの中に、包括的な視点が確保されている例があった。ただし、実際に、回答してくださった方の所属部署のみが唯一「子育て支援事業」を担当しているのかどうかは確認されていない。

しかしながら、担当者がこの状態の問題性に気づかずにいるわけではなく、何らかの改善の必要を感じていることは、調査票記入者の意識をきいた質問の回答でもわかる。回答結果が「子育て支援事業実施に当たって困っていること」には、「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」に票が集まったことや、「進めていきたいこと」については「担当人員を増やしたい」、「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」が上位にはいつてきていることからわかる。

子育て支援事業は、社会福祉協議会等のとり組みの中にも同種の企画があり、地方自治体の事業を知るだけでは、その地域独自のとり組みを明らかにでき他とは言い難いこともわかってきた。今後は、こちらの取り組みについても把握する必要があるだろう。

そう多くなかったが、市独自で「子育てプラン」等の計画をつくり、特定部局が統括連絡調整機関となっている市は、提供される情報、事業企画も多く、窓口もわかりやすくなっている。この点も、本調査の知見として特筆しておかなければならない。

国や県との事業連携は、国からは「助成金を受けている」が主流であり、事業の連携はあまりなされない。県との連携でも「助成金を受けている」の回答が最頻値だが、国からの助成金のほうが回答数が多かった。

助成金をはじめとして、事業の基盤となる法規については、「エンゼルプラン」(1994年)、「新エンゼルプラン」(1999年)、「健やか親子21」(2000年)、「男女共同参画基本法」(1999年)について、事業数・内容に変化はあったか、事業予算や人員に変化をもたらしたかをきいた。

「エンゼルプラン」と「新エンゼルプラン」は事業数を増やし、事業内容を充実させ、予算の増加にも寄与しているようだが、増員までは適わないもののようにだった。「健やか親子21」については、「事業数に変化はない」が最頻値

となり、内容については「以前より充実した」が多かったが、予算については「変化はない」とするものがおおかった。人員についても「担当人数に変化はない」に38票となっている。「男女共同参画社会基本法」では、事業数、事業内容、予算、人員すべてにおいて「変化がない」が最頻値であった。

どの法規も増員には結びつかないという意見が共通にでていった。

新しい事業を起こしたり、大きな改編をするとき、「国の新しい制度を利用する」や「モデル事業として立ち上げる」に票が集まっていることと合わせて考えてみると、近年相次いで施行された法律、特に、「エンゼルプラン」・「新エンゼルプラン」の効果は新しい事業を起こすなどの大きな変化への原動力になっているのではないだろうか。

市民からのニーズをどのような手段で集めて、どのように活かしているかは、「事業参加者アンケート」を通して集めているとするものが最頻値であり、次いで、「育児・子育て相談窓口利用集計から」があげられていた。選択肢には、最近多くなってきた、意見収集のために専門に開く「公募委員」会形式や「懇談会」形式はあまり実施されていなかった。これは対象者がなかなか、市の会合に出席できる事情にないことを反映したものかもしれない。

また収集された意見は、「ニーズに合わせて事業内容の改善を図る」が圧倒的であった。さらに事業の効果の把握及び評価には、「事業参加者アンケートで」把握するに票が集まり、次いで「育児・子育て相談窓口利用集計で」把握するの2項目に票があつまった。

事業効果の評価についても「利用者の増減など事業実績から評価」するや「利用者アンケートから事業の効果や利用者の満足度をみている」の2項目に票が集まった。選択肢には、第三者評価などもあげていたが、利用している市はきわめて少ない。子育て支援事業や子育て関連事業については、利用者のニーズは、多くの市で、検討され、評価されているようだが、事業に参加しない親たちのニーズについては、把握し検討する手段を確保している市は意外に少ないことがわかる。

最後に、子育て支援事業実施に当たって困っていることと、実施に当たって進めていきたいことについて、担当者(調査票記入者)の意見を聞いている。

子育て支援事業を実施するに当たって困ることは、「予算が乏しい」、「仕事が忙しくなる(人手が足りない)」、「他の部署との連絡調整が煩雑だ」、「市民のニーズを把握するのが難しい」が上位に上がっていた。

子育て支援事業を実施するにあたって進めていきたいことでは、「子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい」が圧倒的であったが、「担当人員を増やしたい」、「市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい」にも20

数票集まっていた。

事業数が増え内容が充実し、予算が増えても、人員の増加はあまり実行されていない現状を反映した意見ととれる。

第五章の「母親の育児支援に関する意識調査」からは、育児教室に参加する母親が教室に期待することと主催者側の教室開催目的とが合致する点として、「育児についての知識の取得－伝達」が確認できた。しかし参加する母親のニーズとしてよくあげられたのは「母親自身が自分の気持ちををはなせる場」の確保や「教室を越えた育児仲間やネットワークの拡大」志向であった。この点教室主催者側には、母親のニーズとしてあまり意識されていないことが残念であった。

地方都市においても、大都市においても、育児の主たる担い手である母親のやっていることに大きな違いはない。違いがあるとすれば、母親を取り巻く家族の環境や都市の構成、育児教室等が担っている機能なのではないだろうか。大都市では育児支援が、市場の商品としても手に入れやすく、かならずしも、自治体のみが「育児支援の資源」というわけではない。ところが地方都市では市場からサービスをうる可能性が非常に低く、自治体による「子育て支援」は得難い家族外の「育児支援の資源」なのである。この点が行政側「地方都市自治体」にまず意識される必要があるだろう。

最後に第3章の作表及び本報告書全体の編集作業には、五味道恵氏の並々ならぬご助力がありました。本報告書がまがりなりにもかたちになったのは五味道恵さんのおかげです。本当にありがとうございました。

資 料

1. 県庁所在市あて依頼状および質問紙調査票
2. 育児教室参加者あて質問紙調査票

1. 県庁所在地あて依頼状および質問紙調査票

平成 年 月 日

〇〇市総務課御中

岩手大学人文社会科学部
人間科学講座(家族社会学研究室)
助教授 竹村祥子

アンケート調査実施について(依頼)

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
日頃より、大学の教育・研究事業にご指導、ご協力いただき誠にありがとうございます。
さて、このたび下記要領で育児支援に関する調査の実施をお許しいただけますようお願い申し上げます。
つきましては、ご多忙中まことに恐縮に存じますが、貴機関関係事業担当者にアンケート調査のご回答をいただきたく、ご助力いただけますようよろしくお願い申し上げます。

記

調査概要

題 目：「地方都市における育児支援ニーズの特徴とその対策の
具体的展開に関する研究」(文部科学省科学研究費助成研究)
目 的：エンゼルプラン等の策定以降、育児支援体制は、年々拡大しているなかで、
子育て中の(母)親に対して、地方自治体はどのような育児支援事業を展開し、
どのように市民に事業情報を提供しているかについて明らかにする。
対 象：県庁所在地各市 育児支援事業担当課
方 法：アンケート質問票による
返送期日：平成 年 月 日までに
返送方法：同封の封筒に入れて、各回答者ごとに返送してください。
所要時間：10分程度

【調査票配布のお願い】

貴市のインターネット・ホームページを参考にさせていただきましたところ、育児支援にかかわる事業を複数部局(〇〇課 △△課)で担当されているようにお見受けいたしましたので、総務部局宛に、3通同様の調査票を送付させていただきました。担当課それぞれに一通ずつ配布いただけますようお願い申し上げます。当方の見当違いがあるかもしれませんが、貴部局のご判断で上記の部局以外でも、育児支援にかかわる事業を担当されている部局があれば、(予備分)調査票をお届けさせていただきますよう、お願い申し上げます。

ご不明な点がございましたら下記までご連絡ください。

岩手大学人文社会科学部人間科学講座
家族社会学研究室 竹村祥子
電 話：019-621-6771
F a x：019-621-6774

育児支援に関する調査

本調査は、「地方都市における育児支援ニーズの特徴とその対策の具体的展開に関する研究」という題目で、文部科学省科学研究費助成金を受けて、岩手大学人文社会科学部 助教授竹村祥子が行っている調査です。

本調査は、各県の中でも、人口規模が比較的大きく、都市型の生活をしている市民の多い地域である県庁所在地を対象に行っております。本調査では、東京・大阪近郊の大都市域で発生する育児問題や育児支援ニーズの特徴とは異なった「地方都市独自の」ニーズや「地方都市ならでは」の育児支援対策があると考え、貴市でのお取り組みをお教えいただきたく、行われている行政サービスを中心にご回答いただくものです。

お答えいただいたものの集計に関しては、統計上の処理を行いますので、回答の如何によってご迷惑をおかけすることはございませんので忌憚のないところでお答えください。

上記の趣旨をご理解の上、調査へのご協力をお願い申し上げます。

なお本調査に関してのお問い合わせは、下記をお願いいたします。

岩手大学人文社会科学部人間科学講座
家族社会学研究室

助教授 竹村 祥子

TEL 019-621-6771

*** 本票と関係資料は、添付いたしました封筒に入れて
月 日までにご返送をいただけますよう
よろしくお願い申し上げます。**

* なお本調査票は、総務課に一括してお送りした上で下記の【お願い】をつけて担当課にお配りいただくようにしたものです。ご協力お願い申し上げます。

【調査票配布のお願い】

貴市のインターネット・ホームページを参考にさせていただきましたところ、育児支援にかかわる事業を複数部局（〇〇課 〇〇〇課（△△センター））で担当されているようにお見受けいたしましたので、総務部局宛に、3通同様の調査票を送付させていただきました。担当課それぞれに通ずつ配布いただけますようお願い申し上げます。当方の見当違いがあるかもしれませんので、貴部局のご判断で上記の部局以外でも、育児支援にかかわる事業を担当されている部局があれば、調査票をお届けくださるよう、お願い申し上げます。

1. 市では、どこの部課係が子育て支援事業を中心的に担当されていますか。
担当部課係をお知らせください。中心となる担当部課係が特でない場合は、
2) に○をつけてください。

1) _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

2) 特に中心となる部課係はなく、複数部課係で事業を行っている

2. 子育て支援事業に関わりのある事業をしている部課係とその概要をお教えください。
(社会福祉協議会等市以外の機関も含めてお答えください。)

① _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

主な事業名 _____

その内容 _____

② _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

主な事業名 _____

その内容 _____

③ _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

主な事業名 _____

その内容 _____

④ _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

主な事業名 _____

その内容 _____

⑤ _____ 局 _____ 部 _____ 課 _____ 係

主な事業名 _____

その内容 _____

3. 2にあがっている部課係とは、どのような連携をとっていますか。あてはまるものすべての
番号に○をつけてください。

1) 特に連携はしていない

2) 共同で事業をしている

3) サービス調整会議をもっている

4) 人事交流をしている

5) その他 (具体例をお示しください)

)

4. 市では、子育て支援事業について国との連携をどのようにとっていますか。
該当するものすべてに○をつけてください。

1) 事業のいくつかに助成金を受けている

2) 連携 (共催) している事業がある

(事業名 _____)

(事業名 _____)

3) 連携しているものはない

5. 市では、子育て支援事業について 県との連携をどのようにしていますか。
- 1) 事業のいくつかに助成金を受けている
 - 2) 連携（共催）している事業がある
 (事業名 _____)
 (事業名 _____)
 - 3) 連携しているものはない

6. 市独自で企画している、子育て支援事業がありますか。ある場合その事業名、担当部署、事業概要をお教えてください。

- 1) 独自企画はない
- 2) 独自の企画がある
 - ①事業名 _____ 担当部局 _____
 事業概要 _____
 - ②事業名 _____ 担当部局 _____
 事業概要 _____

***市で行っている子育て支援事業の内容がわかる資料があれば本調査票の返信と一緒に送っていただけませんか。よろしくお願ひ申し上げます。**

7. 市で行っている子育て支援事業の中で事業実績が向上している事業はどのようなものですか。
- 事業名 _____
- 事業名 _____

8. 子育て支援事業は、市の重点施策となっていますか。
- 1) 重点施策となっている
 - 2) 重点施策となっていない

11. 「エボルプラン」(1994年)以前とそれ以後「新エボルプラン」までで、市の事業に変化はありましたか。

【事業数】

- 1) 事業数に変化はない 2) 以前より事業数は増えた 3) 以前より事業数は減った

【事業内容】

- 1) 事業内容に変化はない 2) 以前より事業内容が充実した
3) 以前より事業内容が落ちた

【予算】

- 1) 予算の変化はない 2) 以前より全体予算が増えた 3) 以前より予算額が減った

【人員】

- 1) 担当人員に変化はない 2) 以前より担当人員が増えた
3) 以前より担当人員が減った

12. 「新エボルプラン」(1999年)以後で、市の事業に変化はありましたか。

【事業数】

- 1) 事業数に変化はない 2) 以前より事業数は増えた 3) 以前より事業数は減った

【事業内容】

- 1) 事業内容に変化はない 2) 以前より事業内容が充実した
3) 以前より事業内容が落ちた

【予算】

- 1) 予算の変化はない 2) 以前より全体予算が増えた 3) 以前より予算額が減った

【人員】

- 1) 担当人員に変化はない 2) 以前より担当人員が増えた
3) 以前より担当人員が減った

13. 厚生労働省「健やか親子21」(2000年)以前と以後で、市の事業に変化はありましたか。

【事業数】

- 1) 事業数に変化はない 2) 以前より事業数は増えた 3) 以前より事業数は減った

【事業内容】

- 1) 事業内容に変化はない 2) 以前より事業内容が充実した
3) 以前より事業内容が落ちた

【予算】

- 1) 予算の変化はない 2) 以前より全体予算が増えた 3) 以前より予算額が減った

【人員】

- 1) 担当人員に変化はない 2) 以前より担当人員が増えた
3) 以前より担当人員が減った

18. 事業の効果はどのようにして把握・評価していますか。

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1) 対象者の懇談会で聞く | 2) 公募委員から意見を聞く |
| 3) 育児子育て相談窓口利用集計で | |
| 4) 事業参加者アンケートで | 5) 市民調査で |
| 6) 市民からの陳情の意見で | 7) 市議会 |
| 8) 市全体で第三者評価を受けている | 9) その他 () |

次ページは、本調査の回答者におうかがいするものです。

個人的意見でもかまいませんのでお知らせください。集計結果は統計的に扱いますので、回答者個人が特定されたり、それにより不都合が生じることはありませんのでよろしくお願いいたします。

19. 子育て支援事業を実施するにあたって困っていることはなんですか。該当するものすべてに○をつけてください。

- 1) 予算が乏しい
- 2) 適当な事業案が浮かばない
- 3) 他の部署との連絡調整が煩雑だ
- 4) 委託事業が増えて独自の仕事が出来なくなっている
- 5) 根拠となる法律や法令がたくさんでてきて分かりにくい
- 6) 仕事が忙しくなる(人手が足りない)
- 7) 市民のニーズを把握するのが難しい
- 8) 利用者の層がどんどん変わるなど、やりがいがない
- 9) その他 ()

20. 子育て支援事業を実施するにあたって、進めていきたいことを下記の項目の中から選んで○をつけてください。複数○をつけてもかまいません。

- 1) 担当人員を増やしたい
- 2) 事業数を増やしたい
- 3) 事業を整理して数は減らしたい
- 4) 担当者の兼任などの努力をはかった上で担当者総数を減らしたい
- 5) 子育て関連事業に関わる他部局との連携を深めたい
- 6) 市独自の企画事業を増やしたい
- 7) 市は、育児支援事業の統轄・連絡機関となって具体的な支援サポートやサークル活動の育成等は、他の機関（NPO や社会福祉協議会など）が中心になるのがよい。
- 8) 市民や利用者のニーズを掘り起こす活動をしたい
- 9) 市域を越えて、隣接の市町村との連携がしたい
- 10) その他 ()

21. 他の市町村におけるとりくみで、参考にした、あるいは良い事業だと思ったものがあれば、お教えてください。

県 市 課
事業名や事業内容

ご回答ありがとうございました。

調査票 記入者
部 課 係
氏 名 _____

母親の子育て支援に関する意識調査

岩手大学 人文社会科学部

(行動科学研究講座 Tel: 621-6773)

大澤 扶佐子 (竹村 祥子研究室 Tel: 621-6771)

この調査票は、赤ちゃんがいる生活を通して、子育て支援に対する考え方や感じ方について伺います。

皆さんからいただいた資料は、純粹に研究のために使用するもので、皆さんにご迷惑をおかけすることは決してありません。

また、結果は統計的に分析を行うもので、個人のプライバシーに触れるようなことは一切ありませんので、気軽にお答え下さい。

♪♪♪ おねがい ♪♪♪

お書きになりなしたら お手数ですが 返信用の封筒に入れ

11月30日(土) まで に投函して下さい。よろしくお願致します。

1. これまでに、子育てに関して、親族以外から援助を得たり、支援事業を利用したことがありますか。当てはまるもの すべてに○ をつけて下さい。

- 1) 「すくすく学級」 1回目・2回目・3回目・4回目
 2) ベビーシッター 3) 近所のお宅に子どもを預ける
 4) 子育てサークル 5) 電話相談
 6) 保健師(又は助産師)による家庭訪問 7) 保健センターで行う子育て相談
 8) 保育所で行う一時保育 9) 保育施設の開放
 10) 全く利用したことがない
 11) その他 [①近隣・友人・民間のサービスから ()
 ②行政のサービス () 市町村]

2. あなたの住んでいる近くに、同じくらいの年齢のお子さんを持つお母さんはいらっしゃいますか。当てはまるところに ○ をつけて下さい。

- 1) いる。会えば子どもの話もする 2) いるがあまり交流はない ()
 3) いない 4) わからない 5) その他 ()

3. 「すくすく学級」に参加した動機は何ですか。次の(1)~(7)について、あなたの動機の強さの割合を 全体が10割になるように、整数で記入して下さい。

	割合	割合
1) 正しい知識を得て、これからの育児に役立てたいから	()	[例] (42)
2) この機会に、友人に会いたかったから	()	(0)
3) 保健師(又は助産師)から紹介されて	()	(2)
4) 他の人はどんな育児をしているのか情報収集したかった	()	(2)
5) 自分自身の友人をつくりたかった	()	(0)
6) 何となく育児に自信を持ってない感じがして	()	(4)
7) その他 ()	()	(0)
	計 (100)	(100)



5. 「すくすく学級（ごっくんユース）」に参加した感想をお聞きます。

1 (当てはまる)～5 (当てはまらない)の中で最も当てはまる数字に○をつけて下さい。

当てはまる 1 2 3 4 5
 やや当てはまる 1 2 3 4 5
 当てはまる 1 2 3 4 5
 やや当てはまる 1 2 3 4 5
 当てはまる 1 2 3 4 5

- (1) 保健師(栄養士)からの話は参考になった 1 2 3 4 5
- (2) 自分の子どものことで気になっていた事が解決できた 1 2 3 4 5
- (3) 保健師(栄養士)からもっとくわしく話を聞きたかった 1 2 3 4 5
- (4) 他のお子さんやお母さんの様子が見られて良かった 1 2 3 4 5
- (5) 自分の話を聞いてもらえただけでも来て良かった 1 2 3 4 5
- (6) 会場で聞いた育児情報も参考になった 1 2 3 4 5
- (7) 他の参加者の悩みや不満を聞き“そうそう”“わかるー”と共感できるものがあった 1 2 3 4 5
- (8) 個別の悩み・相談に保健師らに対応する時間をもっと取ってほしい 1 2 3 4 5

あと少しです。頑張ってください

- (9) 他の人の話を聞くのはいいが、自分の事は話づらい 1 2 3 4 5
- (10) 初対面の参加者とも子どもの事など話をした 1 2 3 4 5
- (11) “自分のやり方でいいんだ”と、気が楽になった 1 2 3 4 5
- (12) もっと育児について情報交換できる時間があればよい 1 2 3 4 5
- (13) 何かあれば、相談できる人がいると思える 1 2 3 4 5
- (14) 今後の生活に楽しみや張り合いができた 1 2 3 4 5
- (15) また育児に関した催し物があったら出かけようと思う 1 2 3 4 5
- (16) その他に感じたことがあれば、自由にお書き下さい

4. 次の1～6のような場合、相談したり頼れる人はどなたですか。
 ①～⑬の中から当てはまる箇所すべてに○をつけて下さい。

《例》
 母親学級の仲間
 ベビーシッター
 インターネット
 など

相談・頼れる人 場合	① 夫	② 義父母	③ 実父母	④ 姉妹兄弟	⑤ 近所で同じ位の子どもを持つ奥さん	⑥ 近所のおばさん	⑦ 子どもをもつ友人	⑧ 産院で知り合った人	⑨ 育児教室で知り合った人	⑩ 保健師	⑪ 医師(病院)	⑫ いらない	⑬ その他(具体的に)
1 離乳食のやり方が解らない場合や、メニューに困った場合、相談できる人はどなたですか													
2 子どもが風邪などで食欲がなく対応に悩んだ場合、相談できる人はどなたですか													
3 あなたが風邪などで動けなくなった時、子どもの世話を頼める人はどなたですか													
4 普段、子どもさんのことを気にかけて声をかけてくれる人はどなたですか													
5 普段、あなた自身のことを気にかけて声をかけてくれる人はどなたですか													
6 “たまにはゆっくり眠りたい...”という様な気持ちを感じている人はどなたですか													



6. 次の状況において、あなたは、A・Bどちらの考えに近いですか。
最も当てはまるところに○をつけて下さい。

(1) 3歳以下の子どもをもつ母親が仕事をすることにについて

A: 経済的に余裕があるなら、母親は、家庭でしつかり子どもの世話を
する方がよい。

B: 仕事はお金のためというよりは、自分が自分らしく生きるために必要なことで、
母親が働いていることは、子どもにとっても悪いことではないと思う。

- 1) A 2) どちらかと言えはA
3) B 4) どちらかと言えはB 5) その他()

(2) 1歳未満の子どものもつ母親が、美容院やショッピングで気分転換したいと
思ったとき

A: 託児ルームなどを気軽に活用し、気分転換をすぐにはかかるとは望ましい。

B: 家族の誰かが子どもをみてくれる体制がとれる時に出かける方が望ましい。

- 1) A 2) どちらかと言えはA
3) B 4) どちらかと言えはB 5) その他()

7. あなた自身のことについておたずねします。当てはまるところに○をつけて
下さい。

- (1) 年齢……1) ~24歳 2) 25~29歳 3) 30~34歳 4) 35~39歳 5) 40歳~
(2) 出身……1) 盛岡市内 2) 盛岡市外の県内(市町村)
3) 県外(国・都道府県)
(3) 現住所(在住年数……1) (年) 2) (か月)
(4) 学歴……1) 中学卒 2) 高校卒 3) 専門学校卒 4) 短大卒
5) 大学卒 6) 大学院卒 7) その他()
(5) 職業……1) 有 2) 無



8. ご家庭のことについておたずねします。当てはまるところに○をつけて下さい。

- (1) (住まい……) 1) 一戸建て(持ち家) 2) 借家 3) アパート 4) マンション
5) 杜宅 6) その他()
(2) お子さんの人数 ……
1) 1人 2) 2人 3) 3人 4) その他(人)
(3) ご主人の帰宅時間(平日で)……
1) pm5~7時 2) pm7~9時 3) pm9~11時 4) pm11時以降
5) 2又は3交代勤務 6) 不規則 7) その他()
(4) 子ども・夫以外に、同居しているご家族 すべてに○ をつけて下さい。
1) あなたの父 2) あなたの母 3) 夫方の父 4) 夫方の母
5) あなたの祖父 6) あなたの祖母 7) 夫方の祖父 8) 夫方の祖母
9) その他()

(5) あなたのご両親の就業状況(平日)についてお聞きします。

下の1)~11)の中から該当する番号を箱の中に記入して下さい。

就業状況	あなたの父	あなたの母	夫方の父	夫方の母
1) 外でフルタイム勤務				
2) パート・アルバイト				
3) 自営業				
4) 専業主婦				
5) 退職し家にいる				
6) 社会活動で忙しい				
7) 家族の病気の介護				
8) 自分自身が病氣療養中				
9) 死別				
10) 不明				
11) その他()				

- 1) 外でフルタイム勤務 2) パート・アルバイト 3) 自営業
4) 専業主婦 5) 退職し家にいる 6) 社会活動で忙しい
7) 家族の病気の介護 8) 自分自身が病氣療養中 9) 死別 10) 不明
11) その他()

質問は以上です

ご協力ありがとうございました



**The Child Care Support Needs and the Public Aids :
its Characteristics and the Correspondences from Administrative Aspects**

Research Project Report
Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2) (2000-2003)

March,2004

Head Investigator **Sachiko Takemura**
(Iwate University, Faculty of Humanities&Social Sciences, Associate Professor)